
機動戦士ガンダム00 - おとぎの世界へ -

窓側 指定席

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

機動戦士ガンダム00 - おとぎの世界へ -

【Nコード】

N5039Y

【作者名】

窓側 指定席

【あらすじ】

ELSとの対話を終えて地球に帰還した刹那とお年を召されて益々魅力的になったマリナ様がキャッキャウフフを頑張って目指すお話しです。本作品ではオリジナル設定が多分に入っています。途中、マリナ様が御崩御されたり神様や悪魔が出てきたりすることも多少あるかもしれませんが。オリ設定が苦手な人はご注意下さい。なお、この小説には年齢的に若いピチピチの女性はまず登場しませんのでこちらも期待しないで下さい。本作品のヒロインズは皆お年を召された女性ばかりで構成されております。筆者にとって本作品が処女

作になりますので色々至らない点がありますが誤字脱字ご指摘
よろしく願います。

登場人物・メカニック（前書き）

登場人物とメカニックの紹介です。

ガンダム00は知っているけどFSSはちょっと、という読者向けページですがネタバレを含んでいますのでご注意ください。

物語の進行に合わせて随時更新します。

登場人物・メカニック

登場人物

・マリナ・イスマイル

本作品のヒロイン。本作品で一番無茶な設定がされている。

御年??歳にられました。アザディスタン王国復興のために一生を捧げ、女性として一人の母親ではなく国民の母親になることを選んだため生涯独身を貫き通した。晩年は光を失うなど引退後も苦労したようだ。ひっそりと隠居生活を送っていたが1年前に刹那が地球に帰還したことにより一緒に住み始める。刹那と住み始めたことにより日々心が若返っえり、今では刹那に対して甘え上手になっている。

フェルトとは親友で二人で刹那を弄るのが大好き。ELSダブルオークアンタに懐かれている。

・ラキシス

本作品のもう一人のヒロイン。

星団歴3293年にK・O・Gと共にカラミティ星の爆発に巻き込まれて様々な時空や次元を彷徨って西暦1945年に地球にやっってきた。

長い間バルト海に眠り22世紀頃に地球から旅立っただはずだが、再びK・O・Gと共に地球に舞い戻った。

マリナと刹那の行く末を心配している。

・刹那・F・セイエイ

本作品の主人公。

ELSと融合した事によりイノベーターでもなく人類でもない新たな生命体になってしまった我らが主人公。

マリナと一緒に過ごすようになり家政夫としてスキルアップしたようだ。

・ファルク・ユージェントリツヒ・ログナー

A・K・D 構成国の一つ、バビロン王国の王であり、ミラージ
ユ騎士団の総司令。

皆から司令と呼ばれている。何故か地球で奥様と暗躍中。

どうやらラキシスとは別に目的があつて地球にやってきたらしい。本作品中恐らく最強の方だが、ラキシスからはムツツリスケベだと思われている。

・フェルト・グレイス

ソレスタルビーイングの宇宙航行船プトレマイオスの元オペレーター。

刹那がELSとの対話で地球を不在にしていた際はマリナを支えていた。現在はマリナとは女同士の友情で結ばれた仲。

最近はマリナと二人で刹那を弄るのが楽しみ。

ソレスタルビーイング解散後はミレイナと共に起業するなど活躍を見せる。現在は高齢のため会長職に退いている。

・ミレイナ・ヴァステイ

ソレスタルビーイングの宇宙船プトレマイオスの元戦況オペレーター。独特の喋り方は今も代わらず。

両親の遺児となったGNT-0000「E」ELSダブルオーク
アンタのメインメカニック。

ソレスタルビーイング解散後はフェルト共に企業するなど活躍を見せる。近年良い取引先に恵まれ多忙の日々を送っている。

本作品ではメインヒロイン2名を除いてガンダム勢では一番美しい女性という設定。

・ソーニャ・カーリン

ミレイナの取引先の営業部長。

ミレイナの社長室に飾られていた写真から刹那とマリナを発見する。

その正体はログナーの奥様、イエッタさん。

・シーリン・バフティヤール

マリナ・イスマイルの親友であり、マリナと刹那の良き理解者で、二人の同棲を仕組んだ張本人。

このためマリナに惚気話に散々聞かされていたようだ。だが、うんざりかと思いきや、マリナからやっと惚気話が聞けるようになったかと内心喜んでい

る。マリナと刹那、両方の良き相談相手。眼鏡の似合う可愛いお婆ちゃん。

・スメラギ・李・ノリエガ

ソレスタルビーイングの元戦術予報士。現在はど

ういう訳か、ライバルであるカティ・マネキンと仲良く老人介護施設に入所中。作戦からプライベートまで刹那の良き相談相手の綺麗なお婆ちゃん。

だが密かに刹那を狙っているようで、マリナに次いで刹那にアタックを仕掛けてくる。

・悪魔

マリナの魂の輪廻転生を阻止するために地球圏に現れた謎の外骨格生物。

6本の指、背中にはコウモリのような翼と尻尾を生やしている。サタン（S・A・T・A・N・）とも言われている。

軍隊のように一般兵士、コマンダー等の階級があり一般兵士でもランザム状態のMSと互角以上の戦いを繰り広げる。

体長はある程度自由に変えられるようだが、およそ一般兵士で12m程度、指揮官クラスのコマンダーでは15m程度（いずれも肩高）の大きさである。

宇宙区間でも自由に動き回ることが可能な上にレーザーライフルや実剣、斧など様々な武器を操る。更に次元航行艦等を有するなど高度な科学力も持つ。相手の魂を抜き去ったり、永久機関の停止、呪いをかける等、その名の通り悪魔じみた力も持っている。

メカニック紹介

・ELSダブルオークアンタ

刹那と共にELSと対話の旅に出かけて帰ってきたら、やっぱりダブルオークアンタもELSと融合していました。

対話の道中で様々な世界・文明の技術が取り入れられているようだが、管制システムの構築が追いついていない。

事実上の刹那専用機であるが、マリナに懐いているためマリナ単独でも動かせるらしい（座っていれば良いだけという話も）

主力武装はGNソードV。名称は当時のままだが射程距離・破壊力・切断力は比較にならないほど強化されている。

通常は背中 of 触手部に格納されている。

対話の道中、刹那達がメンテナンスを依頼した技師がGNソード

Vを『これは戦士の銃だ』と評したとか云々。

この技師は登場しません。たぶん。

また、モーフィングシステム等ELSと関係した能力を持っているらしい。

本作品では、もう1機の主役メカ？と共に無茶な扱いをされる。

・K・O・G・ラキシス（ディステイニー・ミラージュ）

ラキシスと共に様々な時空や次元を彷徨い再び地球に帰ってきた。本作品でのもう1機の主役メカ、というよりも黄金の巨人。

原作上でも本作品上でも最強のMH。本作品ではディステイニーとして呼ばれている。

地球連邦軍でのコールサインは「ゴールド・ソード（金の剣）」。
ハグーダ戦でのコールサインをそのまま使用しているが、これはラキシスの希望でヴェーダに登録された。

半透明でキラキラ輝く黄金の装甲が目立ちすぎなのが悩みの種。
無茶な扱いをされるELSダブルオークアンタには何かシンパシーを感じているようだ。クアンタ不在の際のお留守番役。

・ガデラーザII

ガデラーザの再設計機。コストダウンのため搭載するGNドライヴ「I」の数を減らす代わりに生産性を高めた機体。

戦闘能力は初代ガデラーザより数段落るが、その代わり電子戦・情報処理能力が格段に向上している。

これは戦闘空域での指揮・管制を担うためでブレイヴ2機とのコンビネーションで運用を行うためだ。

・ブレイヴII

ブレイヴ正式採用機の後継機。GNドライブの性能向上によりGNドライブの数は最終的に1個になっている。

オリジナルGNドライブもしくはGNドライブ「T」を搭載可能。ガデラーザを母艦としてガデラーザ1機、ブレイヴ2機で小隊を組む。

GN-Xパイロットから何故か目の敵にされている。

・GN-X VI

GN-X Vの発展強化型。オリジナルGNドライブもしくはGNドライブ「T」を搭載可能。

コアファイターシステムを採用しておりパイロットの生存性を高める措置が施されている。

ソレスタルビーイングの旧ガンダムタイプを博物館入りさせるほどの汎用高性能機。

GNビームライフル、GNロングバレル、GNバスターソードの他にも長距離GNブースター、粒子増加タンクなど多彩なオプションを装備可能。

・悪魔の次元航行艦

悪魔達がマリナ暗殺に使用した小型艇で、ガデラーザよりやや小さい280m級。悪魔4人で操艦を行う。

外燃機関を搭載しているためガデラーザIIを翻弄する程の機動力を持つ。短距離から長距離までワープが可能など悪魔達の科学技術は地球のソレを大幅に上回っている事がうかがい知れる。

第1話「もう、それなら刹那が食べさせて?」(前書き)

西暦2365年、地球。

刹那・F・セイエイがELSとの対話から地球に帰還して1年が経っていた。

物語はここから始まる。

第1話「もう、それなら刹那が食べさせて?」

アザディスタン王国某所。

王国の中心部から離れた一軒家に、本作品のヒロインであるその老婆と青年が暮らしていた。

トントントン

ドアを叩く音が数回

「おはよう、マリナ。今日の朝の目覚めはどうだ?ひとりで起き上がる事は出来るか?」

若者が室内の人物に声をかける。

この一軒家には長らく女主人である老婆しか住んでいなかったが、1年前から青年も一緒に住むようになった。

この一軒家には長らく外部の人間や女主人の知人が週に数回は食料や生活必需品を届けに来ていたのだが、この青年が突然一緒に住み始めた分かったときは軽い騒ぎになるところだった。

幸いにも女主人からの説得と、女主人の親友からの強い推薦もあり、こうして女主人の世話をこの青年にお願いする事に決まったわけである。

女主人とは表舞台から姿を消してこうして隠居の身となった元アザディスタン王国皇女マリナ・イスマイルその人である。

アザディスタン復興後、表舞台から姿を消したマリナ・イスマイルはアザディスタン王国の某所にある別荘で隠居生活をおくっていた。荒廃したアザディスタンを奇跡的に復興させ、かつては世間から聖女と言われ時の人ともなったマリナ・イスマイルではあったが、隠居後はマリナの元を訪れる人は少ない。

反アロウズ組織、カタロンの元に身を寄せていた時に世話をしていたかつての子供達か前述の外部の人間、アザディスタン王宮の人間位とマリナの極一部の友人知人だろうか。

「ふぁ・・・おはよう、刹那。入っただいいわ。今日は調子が良いみたい。ひとりで起きあがるから、刹那は見ていて」

青年の名前は刹那・F・セイエイ。ソレスタルビーイングのガンダムマスターである。

51年前、外宇宙より来襲したELS（Extraterrestrial Living Metal Shapeshifter）「地球外変異性金属体」の地球侵攻を食い止めるため、彼は仲間であるティエリア・アーデと彼の乗機であるGNT-0000 ダブルオークアンタを駆ってELS本星へと対話の旅に出かけたのだ。そして去年、50年の歳月をかけて自らもELSと融合する事により対話を達成させ、対話の旅から戻って来たのだ。そして、ここアザディスタン王国で隠居の身となったマリナ・イスマイルと再会したのだ。

あの日以来、刹那は年老いて光を失っていたマリナに寄り添っていた。いや、正確に言うとな刹那ともう一人、いや一機と言った方が良いのだろうか？刹那と共に対話の旅から帰還したダブルオークアンタもマリナの元に居た。ELSとの対話の道中、様々な世界の技術・生物と融合したダブルオークアンタである。刹那とダブルオークアンタが今のマリナの唯一のロイヤルガードである。

隠居した今、マリナの命を狙うような暗殺者は居ないだろうが、もしも「そのような事態になっても」刹那は出来る限り対話で解決を図るだろう。

一軒家の朝の寝室に話を戻す。

先に起きて朝食の支度を終えたエプロンを身につけたままの刹那がマリナを起こしに来たのである。もともとマリナも、マリナに気を使って毎日こつそり起きる刹那に合わせて一度は起きていたのだが、刹那がそれを知っているのかはわからない。

刹那が寝室に入ると今まさにマリナが起き上がるところだった。マリナがベットに取り付けられた手摺りを探そうと手を動かすと、ベットに半分埋め込まれた赤い球体がグルグル回り出して、ベットの手摺りがせり上がり、手摺りの方がマリナの手に近づいていく。マリナは自動追尾してくる手摺りに捉まると弱々しくも立ち上がろうとする。

刹那はマリナを信用しているが、体が万が一を考えマリナの前に先回りをしていつでも支えられるように素早く体勢を整える。しかし、

「刹那、今日は大丈夫よ。」

そんな刹那の気配を察してマリナが釘を差す。

人間は光を失うと別の感覚が研ぎ澄まされるといって、イノベーターである刹那の動きを気配で感じ取るとはマリナとは何者だろうか。マリナは刹那の気配を察したのではない。刹那なら必ず支えようとするだろうと思っていただけだ。それは何故か。そんな野暮な事では字数を割くのは勿体ないので割愛する。

マリナはついにベットから立ち上がり一歩目を踏み出す。二歩、三歩とマリナの歩みは続く。

刹那は内心ハラハラしながらもマリナの歩みを見守る。そんな刹那の心情を刹那に融合したELSも共有している事をマリナは知らない。

「確かに今日は調子が良いようだな」

「フフ、ありがとう刹那」

刹那はマリナの手をとり寝室の一角に設けられているドレッサーの前に誘導すると、ベッドに埋め込まれていた球体が自発的に外れてこちらに転がって来た。

「マリナ、着替えが終わったら教えてくれ。ハロ、マリナのサポートを頼む」

「マカサレタ、マカサレタ、マリナ、キガエテツダウ」

「ハロ、今日もお願いしますね。」

球体の正体はソレスタルビーイングでサポートメカとして使用していたハロである。

先ほどのマリナのベッドに半分埋め込まれていたのもマリナをサポートするためだ。マリナ的生活用品の一部にはハロによるサポートが行われている。

刹那はマリナの手に着替えを渡すと寝室から一旦退室する。年老いたとはいえマリナはレディである。マリナは刹那の優しさ感謝しながら渡された洋服に着替えを始める。

寝室の扉の外では刹那が両目を輝かせて脳量子波による通信を行っていた。通信先は別荘外のダブルオークアンタである。

「今朝のマリナの状態をデータ送信してくれ」

ハ口が健康状態をモニタリングしているのだ。ハ口から送られたデータをダブルオークアンタが更に別の場所にデータ送信する。このデータ送信は毎朝の日課である。健康状態のモニタリングもデータ送信しているのはマリナも承知済みである。だからこそ、ハ口によるサポートも受け入れているのである。

ダブルオークアンタ経由で刹那の元に通信が入る。

『おはよう、刹那。今日もマリナさんの健康状態は変わっていないわ。』

ダブルオークアンタを経由する理由は通信傍受を防ぐためと、ソレスタルビーイングの仲間同士での通信の為である。そう、通信の相手というのは……。

「おはよう、フェルト。そうか……」

『それでも、以前診てみた時よりも進行はゆっくりにはなっているわ。』

フェルト・グレイス。ソレスタルビーイング、宇宙航行船プロレマイオスの元オペレーターである。

刹那がELSとの対話のために地球を去ったELS戦後、アザディスタン王国復興に奔走するマリナを影からささえていたのだった。ソレスタル・ビーイング解散後は、時々マリナの元を訪れ精神面・健康面の両方を支えていたのだ。

ゲリラの少年兵として、ソレスタルビーイングのガンダムマイスターとして世界に变革をもたらすために多くの命のやりとりをしてきた刹那でも、フェルトからの返信にやりきれない気持ちになる。

『私もそちらに伺う予定だから、その時に詳しく診察するわ』

マリナとフェルトは刹那に対しては、それぞれ想う気持ちがあったが今ではこうして交流があるのだ。

「わかった。ありがとう」

『ああ、刹那。それとダブルオークアンタも診察の対象だ、そうです。』

「うん？」

刹那がフェルトに問いただそうとしたとき

「刹那、着替えが終わりました」

「キガエオワツタ、セツナ、ムカイニコイ、ムカイニコイ」

言い終わる前に寝室のマリナから明るい声がかかる。

「また後で詳しい話を聞かせてくれ」

刹那はフェルトとの通信を切り上げると寝室の中のマリナを向かいに行った。

『刹那、ただの人間である私達は貴方と一緒に居られる時間は少ないのよ……』

刹那との通信が切れた後、フェルトは目を伏せながら独語していた。

刹那が着替えを終えたマリナを鏡台の前に座らせるとマリナを髪を梳かし始める。レディの身だしなみは大切なのである。

刹那がどこでそんな気配りや技術？を身につけたのか？察しの通り、フェルト達元ソレスタルビーイングの女性陣である。刹那にレディと対話の方法を頑張って教え込んだのだ。

それでも、現在のダブルオークアンタのメインメカニックの女史曰く赤点ギリギリだそうだが。

刹那がマリナの手を取りながら食卓にエスコートする。その様子がかつての仲間が見たら「刹那、お前は本当に変わったなあ」と冷やかしの対象になる位、エスコートは板につていた。

食卓には朝食はトーストにハムエッグ、コーヒーマルクが並べられている。刹那がガンダムマイスター時代に教育された最低限の調理技術から用意できる朝食のレパートリーは決して多くはないがそれでもマリナの口に合うように調理されていた。手の込んだ食事はマリナ指示の元「作成」することも出来るが、朝食は刹那単独で行うのでありがたいが簡単である。

朝食が進むとマリナの方から刹那に話しかけてきた。

「刹那、私はもう良いから、私の分も食べて」

「いや、駄目だ。きちんと食べないと力がつかないぞ」

「もう、それなら刹那が食べさせて？」

「それは・・・尚更駄目だ。自分で出来ることは自分でする」

端から見ると仲の良い祖母と孫のやりとりに見えるが実体は老夫婦である。二人とも夫婦の自覚はないのがポイントである。そんな

つもの朝食の光景が繰り広げられていた。

朝食を片付け終わると、一日の日課のはじまりである。

とはいえ、隠居後は特に日課というものもないが、刹那が帰還してからというもの、マリナを外に連れ出す機会が多くなった。場合によってはマリナの気分転換にと、『ちよつと遠くに』連れ出したりもしていた。

今日のスケジュールはお弁当を持ってマリナと共に家の周りの散策、場合によっては『少しだけ』足を伸ばす予定である。ダブルオークアンタで『ちよつと遠くに少しだけ』といえば大凡どれくらいの距離か予想できるだろうか。

一軒家から歩いて10分の道のり。そこはかつて荒廃し多くの人間の血が流されたが、アザディスタン復興の証のように今では様々な花々が咲き乱れてる。

光を失ったマリナの光となった刹那は、マリナの手を取りながら花々のなかを歩く。

「少しペースを落とそうか？」

「いえ、これくらいでないとリハビリにはなりません」

「そうか、もう少しで座れる所にたどり着くから、頑張れ」

やはり、ここでも刹那がマリナに気を遣いながらエスコートする。刹那がマリナを「座れるところ」に案内すると、マリナが甘えたように両腕を刹那に突き出す。すると刹那はやや困ったそぶりを見せるがマリナの上半身を優しく抱きかかえる。

「ゆっくり腰をおろせ、そう、そうだ。」

刹那はマリナの上半身を抱きかかえながらマリナを『座れるところに座らせる。』

「今日はペースが早かったから少し疲れただろう？大丈夫か」

「大丈夫です。フフ、本当に刹那は心配性ですね」

マリナは刹那が居るだろう方向に顔を向けると微笑む。本当にあなたは、という顔をしている。

刹那も叶わないな、表情を見せるとマリナの隣に腰をおろし、マリナと咲き乱れる花々を楽しむ事にした。

「光を失っていても、こうしているだけでも花々が咲き乱れている様子がよくわかります」

マリナが刹那に話しかける。

マリナにとっても刹那にとってもこの場所はお気に入り場所だった。

するとグワツと刹那とマリナが腰をおろした部分が急に動き始め、大地から離れる。

マリナは「彼が」そうすることを初めてではない事に馴れていたのに怖くはなかったが反射的に刹那の手を握る。

二人が腰をおろした場所、それはダブルオークアンタの掌だった。

花々を楽しんでいたのは刹那とマリナだけではない。彼と違って良いのかわからないがダブルオークアンタに同化しているELS達も同じだった。

「今日は貴方もご機嫌なのかしら」

マリナは刹那の手を握っていない掌で、ダブルオークアンタの掌を優しくなでる。

ヴォンツ！と、まるでマリナの問いかけに答えるように一瞬だけダブルオークアンタのツインアイが点滅した。

「そうかもしれない、な」

地上から数m浮かんだ場所で掌の昇降がとまる。ダブルオークアンタの装甲表面は花々に同化しており周りの風景にとけ込んでいたのだ。

ただ、遠くから見たら花模様の巨人の掌に座っているシユールで不思議な光景であったが。

「刹那、今日はこの間の話の続きをお願いできないかしら」

「・・・マリナ、この前の続きというと・・・宇宙を旅する少年と女性の話だったか？どこまで話をしたのか忘れてしまったな」

「あら、それは私の記憶力を試しているのかしら？貴方たちが、宇宙で出会った40人の海賊達と・・・」

マリナと刹那の会話にも花が咲く。そんな二人の様子をダブルオークアンタとELSが観察している。

心地よい風が二人の間を駆け抜けていった。

第1話「もう、それなら刹那が食べさせて？」（後書き）

次回予告

失った時間を取り戻すかのように刹那とマリナの幸せの時間が流れていた。

このまま幸せの時間はどこまで続くのだろうか。
そんな二人の元にかつての仲間が訪れる。

後書き

ついに第1話を投下してしまいました。

本作品が処女作のため至らぬ点多々あると思いますが今後ともよろしく願います。

基本的に出張中の移動時間が主執筆時間になりますので投稿スパンが空くかもしれません。どうか気長にお付き合いいただければ幸いです。

第2話「なんだこの居心地の悪さは？」（前書き）

本作品は完全オリジナルの話です。

第2話以降はオリジナル設定がバンバン出てきますのでご注意ください。
さい。

第2話「なんだこの居心地の悪さは？」

……うう、ここは？

私はゆっくりと瞼を開く。遠い昔光を失ったはずの私。ぼんやりと何かが見えてきた。小さな光が瞬いている。

……あれは星？

……何年ぶりだろう、こうして自分の目で外を見るのは？

目が慣れてきたのか、徐々に像がはつきりしてくる。よく見るとあたりは星々が一面に広がっていた。いや、一面所ではない。まるで私を包み込むように……。

……ここは、まさか！宇宙！？

私は宇宙に浮かんでいた。宇宙服も着ないで。いや、そもそも何も着ていない。

私は恐る恐る自分の両手を見る。手に皺が一つもない。次に自分の胸を見る。乳房に張りがある。体にも皺がない。毛も白髪ではない。

鏡がないから自分の顔を見ることが出来ないが、私は今、若い頃の、生まれたままの姿になっている！？

……でも、何だろう不思議と恥ずかしくない。

……私はどうして、この場所に居るのだろうか？

私が疑問に思っていると、遠くで大きな光の玉が破裂し消えていく。

……今の光は？

私は光の玉が消えてしまう前にその方向に向かおうと意識を集中する。

すると私の体は光の方向に進み始めた！

……まるで、まるで私が刹那のガンダムのような。ウフフ。

光を失ってから籠もりがちだった私を刹那はガンダムで様々な所へ連れ出してくれた。

『ちよつとそこまで、だ』と行って遠い世界にも行ったわ。後でシリんにバレて二人で怒られたっけ。

体だけじゃなくて、気持ちも若返ったのかしら。

……刹那に会いたい。でも、今の姿を見られるのは、ちよつと恥ずかしいかな？

何故か、あの光が消えてしまう前に行かないといけない気持ちが強くなる。

……トランザム？そんな言葉が私の頭をよぎる。でも大丈夫。

……光が消えてしまう前に何とか辿り着けそう。

……今の私はガンダムだから、速いんだから。

何かが見えてきた。あれは人形……？違う、巨人？

次第にはつきりと見えてくるに従って私は段々怖くなってくる。
あの巨人は・・・首と右腕がない！それに左足も膝から下が無くな
っているようだ。

あの巨人、違う！あれはモビルスーツ。私は見たことがない。

・・・でも私はあのモビルスーツを知っている。

・・・忘れるものですか！あれは、あれは、あれが刹那のガンダ
ム！！！！

刹那のガンダムは、ダブルオークアンタは、頭を吹き飛ばれ、右腕
が切り落とされていた。

左足も膝から下がズタズタになっていた。背中から吹き出すはずの
緑の粒子も見えない。

・・・刹那！クアンタ！お願い、返事をして頂戴！刹那！クアン
タ！

必死で呼びかけても刹那もダブルオークアンタも答えてくれない。
私は知らない間に泣いていた。

・・・あ、クアンタが動いた。刹那は無事なの！？お願い返事を
して頂戴！

クアンタが微かに動き始める。傷だらけの体を必死に動かそうとし
ているのが遠くからでもわかった。

私がクアンタに近づこうとスピードを上げようとするが、何かに邪
魔されてこれ以上近づくことが出来ない。

・・・どうして？私は刹那の所に行きたいだけなの。お願い刹那

の側に行かせて！

……トランザムッ！！

私はトランザムの呪文を唱える。すると私の体を絡め止めていた何かを引き千切ったのか再び体が動き出した。

私は頬を伝わる涙を拭いながら一気に刹那のクアンタに近づく。あともう少し、もう少しで刹那の側に行ける！

その時だった。

「これで終わりだ！」

クアンタの胸を一振りの大剣が貫いた。

闇から出現した巨大な悪魔がクアンタの胸を大剣で刺し貫いたのだ。クアンタは苦しむように左腕を数回動かすと爆散した。

周囲に緑の光が弾け飛ぶ。

……え！？

刹那が、刹那が、死んだ？ そんな事、あるわけない、じゃない。

遠い宇宙の果てまで対話のために50年も留守にして、突然ひよっこり帰ってくる、あの刹那よ。

あの刹那が、死ぬわけない。死ぬわけないわよ。だって、だって刹那よ！

駄目、理解できない。認めたくない。刹那の死を認めたくない。

あ、ああ、ああああああ、せ、刹那！刹那ああああ！！！！

私は悲しかった。悔しかった。怖かった。どうして、どうして、どうして？どうして刹那が！駄目、やっぱり理解できない。

「手こずらせおって。これで邪魔者はいなくなった」

刹那を殺した悪魔が爆発の中から現れる。その勝ち誇った悪魔の顔が私を睨む。

「次は貴様の番だ。マリナ・イスマイル！」

ハッと目が覚めた。ここは、寝室のベッドの上。私の世界はやはり光を失ったままだ。

「（・・・今のは夢？）」

息づかいが荒い。

夢を思い出して体が震える。

「マリナ、ダイジョブか？マリナ、ダイジョブか？」

「・・・ハロ、側に居てくれたのね」

ベッドで私を看ていてくれる相棒の心配する可愛い声を聞くと自然と震えが収まってくる。

だってこのハロは刹那が私のためにプレゼントしてくれたハロだもの。

「ハロ、マリナノ、ソバカラハナレナイ。ソレガ、ハロノシゴト。ハロノシゴト」

「ありがとう、ハロ」

「ハロ、おかしな事を聞いても良いかしら？刹那とクアンタは今どこかしから？」

「マリナ、オカシクナイ、オカシクナイ。セツナハ、ランニングニデカケタ。クアンタハ、タイキチュウ」

その言葉でホツとする。やはりあれは夢だったのだ。

「もう朝なのかしら、今は何時？」

「ゴゼン4ジ27フン32ビヨウ。イマ33ビヨウ、ナッタ」

「もう一眠り、出来そうね。」

「オヤスミ、マリナ」

「おやすみなさい、ハロ」

刹那とマリナのいつもの朝の風景。

ラジオからはニュースが流れていた。世界情勢からアザディスタン国王からの談話、宇宙航行艦の今の様子など話題は事欠かないようだ。

「今日は朝から元気がないが、どこか具合が悪いのか？」

エプロン姿で朝食の片づけを行っている刹那にマリナが話しかける。

「……ごめんなさい。心配をかけて。大丈夫、私はどこも具合が悪くありませんよ」

「……それなら良いが」

「刹那、今日は何時にいらっしやるのかしら？」

「午前中に来ると言っていたが、彼女のことだ。時間通りに現れるだろう」

刹那は洗い物をこなしながらマリナに答える。

今日はフェルトがマリナの健康診断に訪ねてくる日である。

「そう。……刹那、質問して良いかしら。答えたくないなら答えなくても良いわ」

「？なんだ、急に」

「刹那は昔、私に『戦え、自分の信じる神のために』と言いましたね」

刹那達ソレスタルビーイングがアザディスタンの内戦に介入した際に、マリナに投げかけた言葉だ。

「ああ、覚えている。そしてマリナ、君はその言葉の通り、君のや

り方で戦い続け、こうしてアザディスタンを復興させた」

刹那は泡だらけの手を止めてマリナに向き合う。

「ありがとう。そして刹那、貴方も自分の信念を貫き、刹那のやり方で戦い続け、貴方は革新しイノベーターとなった。そしてELSと対話を行い理解し合うことが出来ました」

「その通りだ」

刹那は目を閉じて、ガンダムマイスターとして世界に対して武力介入した日のことを思い出す。

「そこで、刹那に質問です。刹那は『悪魔』を信じますか？」

「悪魔、だと？」

刹那は神と悪魔は表裏一体の存在と認識していた。一方にとっては神のような存在でも、もう一方にとっては悪魔のような存在であるからだ。

「（俺たちソレスタルビーイングは世界にとって悪魔のような存在だった。だが、果たしてソレスタルビーイングはもう一方で神だったのか？それは違うはずだ）」

刹那がなにやら考えている雰囲気を読み取る。

「ごめんなさい、変なことを質問してしまって。今の質問は忘れて頂戴。ごめんなさい、刹那」

マリナの方から一方的に質問の取り消し宣言をされてしまい、それ以上刹那も話しかける事が出来なかった。

刹那にとって懐かしい仲間に出会える日でもあると同時に『ある』チェックが行われる日でもある。

刹那は朝食の後かたづけを終えると部屋の掃除をはじめ。いつもマリナも手伝いを申し出るが刹那は頑なに断る。これもチェック項目に含まれているのだ。

マリナが暮らす一軒家の掃除は王宮の人間が訪ねてきたときに行われていたが、刹那と一緒に住むようになってからは刹那が掃除を行っている。

刹那が掃除機をかけているその後ろを、赤八口が転がりながら着いてくる。

「八口、寝室クリア。掃除漏れのチェックを頼む」

「セツナ、チェックOK、チェックOK」

「了解、次のフェーズ（部屋）に移る」

男性目線ではついつい汚れを見落としてしまう箇所もある。ましてや、あの刹那である。そのような見落とし箇所は八口がチェックを行い、掃除後のデブリーフィングで刹那にフィードバックされていた。

この一軒家の八口はマリナの手伝いだけではなく家政夫刹那のサポートもしている。

今日はフェルトの家政夫チェックが行われる事もあり入念なチェックをしているのだ。

マリナは掃除の邪魔にならないように椅子に腰掛けながら耳で掃除の様子を見守っていた。

どうやら刹那が掃除機をかけながらこちらに近づいてくるようだ。

マリナは気配を察し立ち上がる。しかし、刹那は一端掃除機のホースを放棄し、立ち上がったマリナをひよいつと両腕で抱き上げる。

マリナも慣れたもので両腕を刹那の首に巻き付ける。

刹那は片手だけでマリナを持ち直すと、空いたもう片方の手で先ほど放棄したホースを再び手にして、マリナが座っていた椅子の下を手早く掃除機をかける。

「刹那、言っていただければ退きますから」

「いや、すぐに終わるからこの方がいい」

刹那はマリナを降ろし再び椅子に座らせる。名残惜しそうに両腕を離すマリナであったが、刹那はあえて無視して掃除を続行する。

刹那はテキパキと掃除を終えると、呼び出しのチャイムが鳴った。

「相変わらず時間通りだな」

刹那は玄関に向かうと、そこには小柄の老婆が大きな鞆を持って立っていた。

「ご無沙汰していました、刹那」

かつてのソレスタル・ビーイングの仲間であったフェルト・グレイスである。

「1ヶ月ぶりだな、フェルト。今日はよく来てくれた」

「こちらこそ、もう少し早く来たかったんだけど、なかなか時間がとれなくてごめんなさい。」

刹那はフェルトを招き入ると刹那はフェルトをマリナが待つ客間に案内する。

「いや、いつもマリナが世話になって申し訳ない。ところで、クアンタの診察というのは？」

刹那が申し訳なそうな表情でフェルトに尋ねる。

「実は今日はミレイナも途中まで一緒だったんだけど、途中で取引先から緊急連絡が入ったので遅れるそうなの。だから先にクアンタを診てからこちらに来るそうよ」

「ミレイナ・・・彼女も来てくれたのか」

ミレイナ・ヴァステイ。フェルトと同じくソレスタルビーイング、ソレスタルビーイングの宇宙船プロマイオスの元戦況オペレーターである。彼女と同じくソレスタルビーイングのメンバーであった両親達が、ソレスタルビーイングが保有する機動兵器MS・ガンダムを開発したのだ。GNドライヴを搭載したMSガンダムを駆って刹那達ソレスタルビーイングは半世紀以上に世界に対して武力介入を行ったのだ。

ミレイナの両親、父イアンと母リンダはすでに亡くなっており、ミレイナはソレスタルビーイング解散後はその技術を生かし主に民生品のサポートデバイスを開発、販売する会社をフェルト共に起業したのだ。

再生治療が発達した西暦でも人間の老いを克服する事は出来ない。

介護用のリアクティブ・サポートデバイスはこの世界では当たり前の技術になっていたが、ミレイナは第三国など貧しい国々でも入手しやすいように安価で、かつメンテナンスが容易もしくはほぼメンテナンスフリーに近い製品を開発・販売していた。ソレスタルビーイングのMS運用で培った技術がフィードバックされている。フェルトは高齢を理由に現在は会長職に退いたが、ミレイナはCEOとして活躍していた。ここ数年は良い取引先に恵まれ多忙の日々を送っているそうだ。

これら介護用品の売上金の一部は、今なお世界各地で小規模ではあるが勃発している紛争による戦災孤児達の基金に回されている。

実はマリナの介護ベッドなどもミレイナの会社の製品であるが、マリナのベッドは採算度外視の完全オーダーメイド仕様である。ベッドの型式がGNで始まっている事を知っているのは何人いることか・・・。

両親が他界した今、ミレイナにとってダブルオークアンタが遺作になってしまった。

刹那が地球に帰還後ミレイナがダブルオークアンタの専属メカニックになったのも自然な流れである。

話を戻す。

「スメラギ・李・ノリエガの様子は？」

「あいかわらず、スメラギさんは元気ですよ」

スメラギ・李・ノリエガ、ソレスタルビーイングの元戦術予報士である。現在は保養施設で隠居中である。

マリナはフェルトの気配を感じると椅子から立ち上がりフェルトの来訪を歓迎した。

「フェルトさん、おはよう。今日はお忙しいところ訪ねてきていただいて、ありがとうございます」

「マリナさん、おはようございます。お二人に会いに来るのは楽しみなんです。マリナさんもお元気そうで何よりです。マリナさんは座っていてください。」

「おかげさまで。いつも診察していただいてありがとうございます。」

マリナは軽く会釈すると再びゆっくりと椅子に座る。もちろん、刹那はいつでもサポートできるように素早くマリナの背後に回り込むのを忘れていない。

その様子を見ていたフェルトが、うんうんと、独りで何度もうなずくと、自分も椅子に座る。

「ちゃんと刹那はフォローしているようですね。刹那は甘えさせられていますか？」

「ええ、刹那は厳しいようで優しいですから甘えさせていただいています」

刹那に対してそれぞれ思い入れのある二人であるが、今では女同士の友情で結ばれた仲だ。

二人とも高齢ではあったが顔を合わせれば女子会の始まりである。ここ最近刹那を肴に話の花を咲かせることが楽しみであった。

もっとも、当の刹那本人としてはマリナとフェルトの会話を聞いているとどうも居心地が悪い。

「・・・(これも対話のひとつだと思いが、なんだこの居心地の悪さは?)」

マリナとフェルトの話はさらにヒートアップする。
イノベーターの苦難はしばらく続くことになる。

第2話「なんだこの居心地の悪さは？」（後書き）

次回予告

ミレイナはクアンタに思いを馳せる。

しかし、突然のマリナの異変に刹那達に戦慄が走った。

後書き

拙いSSに評価ポイントをいただきまして誠にありがとうございます。
す。

今後ともよろしく願います。

第一部が本作品のプロローグになりますが、第一部完結までしばらく時間がかかりそうです。ごめんなさい。

素朴な疑問ですがガンダム00は詳しいけどもう片方のFSSは知らん。という方はどれだけいらっしやるでしょうか。

第一部が終わる前後にはキャラクター紹介を行いたいと思います。

それでは第3話も引き続きよろしく願います。

第3話「ELSダブルオークアンタは伊達じゃないです！」（前書き）

オリジナル設定オンパレードの第3話始まります。

第3話「ELSダブルオークアンタは伊達じゃないです！」

刹那がマリナとフェルトに弄られている頃、先日マリナと刹那が過ぎた花畑に、片手にメカボックスを持った女性が訪れていた。

コホン。

咳払いを一つ。

次に誰もいない花畑に向かって大声で叫ぶ。

「ELSダブルオークアンタ！今日は貴方も健康診断です。諦めてさっさと光学迷彩を解除して姿を現すです！」

年を召しても今日も元気で言葉の語尾に特徴があるミレイナ・ヴァステイである。

ミレイナの一言に降参したのか花々と同化していたクアンタが徐々に姿を現す。

クアンタは偽装していたのではなく、ELS達は花々と同化し自然を楽しんでいただけなのだが、ミレイナからすると診察から逃げ隠れてしている子供に思えるのだろう。

「パパとママが作ったELSダブルオークアンタは物分かりが良い子で助かるです」

クアンタは片膝を付き、右手をゆっくり大地に降ろすとミレイナを乗せる。ELSと同化したクアンタにはどのような自我があるのか定かではないが、刹那曰くクアンタには対話の道中様々な経験を重ねる事によって自我を持ったかもしれない、とのこと。それもマリナの元にいるうちに穏やかな性格になった、というのだ。

非常に興味深い話なのであるがメカニック担当のミレイナは何故かクアンタをバラバラに分解して解析するつもりはないらしい。

ミレイナはクアンタに導かれるままコックピットに潜り込むと、メカボックスから携帯端末を取り出しメンテナンス端子ポトに接続する。すぐに熟練された手つきでダイアグノス（自己診断プログラム）を起動させる。

ふと、ミレイナは振り返りコックピット背後に設置されているヴェーダへのターミナルユニットに目をやる。

51年前のELS襲来に際の出撃の時に、両親が急遽設置したヴェーダへ接続するためのターミナルユニットである。ELSからの膨大な情報をヴェーダで処理するために使用したアクセス端末で、コックピット前方中央の立体投影装置からティエリアが投影される仕組みだ。

現在はヴェーダとのリンクが切れているためターミナルユニットは使用されていないが、刹那からも特に取り外すように指示されていないのでそのままにしている。

ミレイナは、51年前のあの時のように、電子妖精となったティエリアが突然ふと現れるのではないかと叶わぬ期待をしているのもあるが……。

「アーデさんは、またミレイナを置いて遠い宇宙に旅立ってしまったね。ミレイナはお婆ちゃんになってもアーデさんが帰ってくるのを待っているです。私がパパとママの元に召される前に必ず戻って来る約束は破っちゃだめです」

ティエリア・アーデは刹那の地球帰還と入れ違いで、宇宙航行艦ス

メラギに乗船して外宇宙への調査に出かけて行ってしまった。その別れの際にミレイナと交わした約束である。

ミレイナは大きなため息をつき感傷に漬るがすぐに端末のディスプレイに目をやる。

今日は『健康診断』ということもあり診断項目も多く、まだ終わりそうになかった。

完了した項目からディスプレイに表示されるのは現在のダイアグノスとそう変わりはない。

「GNドライブ6番・7番は異常なしです。モーフイングシステム異常なし、と」

> GNT-0000 ダブルオークアンタ<純粹種のイノベーターに覚醒した刹那専用機である。

ELS大戦に導入されてからELSとの対話のため50年間、様々な星々や文明と遭遇したMS。

だが、ELS大戦から51年経過した現在、地球連邦軍のMSの開発技術は格段にレベルアップしており、宇宙航行艦スメラギに搭載されている作業用MS『サキブレ』をはじめ、名機と言われ現在も改良が加えられているGN-Xや、可変MSの傑作機ブレイヴシリーズなど、どれもが51年前のソレスタルビーイングのガンダムの性能を凌駕していた。

それはGNT-0000ダブルオークアンタも例外ではなく、もう過去のガンダムシリーズは博物館行きなのである。事実、旧ユニオン領の博物館にはレプリカであるがソレスタルビーイングのガンダムが展示されている。余談であるが先日博物館にアロウズのMS、ブーメラン装備型アヘッドの展示を巡って一悶着があったばかりであった。

「ところがぎつちゃん、GNT-0000[E]ELSダブルオー
クアンタは伊達じゃないです!」

>GNT-0000[E]<1年前に地球に帰還したダブルオーク
アンタにミレイナが付与した型式である。ミレイナ曰く

「今日からGNT-0000[E] ELSダブルオークアンタと
呼ぶです!」

だそうだが、ELSと同化している刹那とフェルトは今まで通り『
クアンタ』、マリナは『ガンダム』と呼んでいる。ELSダブルオ
ークアンタと呼んでいるのは悲しいかなミレイナ唯一人である。マ
リナの場合は単に刹那が搭乗するガンダムタイプのMSの区別が付
いていないというのもあるが。

「ELSダブルオークアンタは、ELSと融合することによりEL
S達の記憶を引き継いでいるだけではなくELSの能力をはじめ、
対話の道中で遭遇した文明の技術が盛り込まれて格段にバージョン
アップしているです」

ミレイナはクアンタのコックピットのスイッチを押してメンテナン
スノートを開く。

メンテナンスノートはロールアウト後から今日までのメンテ記録が
メモリーされている。

ミレイナもコピーは持っているがオリジナルの持つ『当時の空気感』
がたまらなく好きだった。

ノートの担当者の項目にはヴァステイ家以外の名前も記録されてお
り、刹那とクアンタが地球に帰還したばかりの頃、ミレイナがメン
テナンスノートを発見し読み進めているうちに号泣したものだ。

つまり対話の道中でソレスタルビーイング以外の人間、いや地球外生命体の手によりクアンタの修理・メンテナンスが行われていた動かぬ証拠である。

メンテナンスノートには言葉なのかさえ分からない地球以外の言語から、何故か日本語まで様々な言語でメンテナンス記録が記されていた。

地球以外の言語については、恐らくティエリアが行ったのだろうか。ご丁寧に翻訳文も記載されてあったりと芸が細かい。

また、ノートの欄外には刹那とティエリア、クアンタへの感謝の言葉や、クアンタを建造した両親宛へのメッセージ、GNドライブ喪失時のバックアップ動力についての提案等、クアンタの抱える問題点の指摘から未来展望まで、多岐に渡るメモが記されていたのだ。

つまり現在のクアンタにはソレスタルビーイングの意志意外にも異世界の技術者達の夢や希望の未来にかける思いが込められているのだ。

だからミレイナも、クアンタを簡単にバラバラに分解して解析するような事はしたくないのだ。

ミレイナの独り言を聞いていたのかコックピット内の照度が少しだけ明るくなる。

ミレイナにとってクアンタは大きな子供と同じであった。遺作ではなく遺児なのだ。だから『健康診断』という言葉をつかったのだ。しかし気になることもある。

「ELSダブルオークアンタはELSとの対話の道中、様々な文明の技術を供与、吸収されて進化を繰り返していますが、それらを管制するQUANTUM SYSTEMのアップデートが間に合っていないです」

ミレイナは現在のクアンタのシステム構成図を表示させて険しい顔をする。

「現在の西暦のMSはシングルドライブでもツインドライブ並の性能を発揮出来るようになりました。ELSダブルオークアンタに搭載されているGNドライブは当時よりも改良が加えられ、更に不思議な自己進化を遂げ、事実上の専用ドライブとなっています。しかし、その性能を出し切れていない状態です。ヴェーダとリンクしても地球外の技術が導入されているので、細かい制御はどうしても搭乗者もしくはELSダブルオークアンタと直接対話して制御しないと駄目です。いくらイノベーターのセイエイさんでも独りで精細な制御を行うのはかなりの負担です」

対話の道中に異世界の技術を取り入れたクアンタではあるが、悪い言い方をすると継ぎ接ぎだらけのMSということになる。

クアンタの操縦には現在の西暦の一部のMSと同じくELSによる操縦サポートが行われてはいるが、それでも限界があるのだ。

「それに、これからは地球圏でのMS相手に戦闘する機会は減ると思います。これからは外宇宙の生命体や文明への対応が主たる任務になるはず。その時に、現在のELSダブルオークアンタでも、もしも、もしも手に負えない生命体と遭遇したらどうなるか・・・」
ミレイナに一抹の不安がよぎる。

「やっぱり、セイエイさんにELSダブルオークアンタの改修計画を提案するのが良いです」

コックピット内で険しい表情を浮かべるミレイナの心情を読み取ったのか、コックピット内の照度が若干下がる。

「あらららら、ELSダブルオークアンタは心配しなくても大丈夫です。必ず私がELSダブルオークアンタを更に強くたくましい子にしてあげますから安心するです！」

刹那の耳に入ったら頭を抱えてしまいそうなミレイナの発言であるが、ミレイナは明るく振る舞い続ける。

丁度、診断プログラムの全項目がすべて完了する。

「武装管制も問題なし。すべて異常なし、っと」

俗にいうコンディションオールグリーンである。

「実は改修プランはすでにできあがっています。特別にELSダブルオークアンタに先に見せてあげるです」

呼応するようにコックピット内部が明るくなる。

ミレイナは端末を叩き改修プランをコックピットのディスプレイ全体に表示させた。

「（ただ、この改修プランを実現するには難問が幾つかあるのです。資金も不足していますが、それにセイエイさんが賛成してくるか未知数です……）」

ミレイナがクアンタのメンテナンスを行っている頃、フェルトは奥の寝室でマリナを診察していた。マリナは大病こそ患ってはいないが、体力や内臓機能の衰えがみつかった。

刹那が帰還してからは緩やかになってはきたものの、それでも衰えから来る諸症状は確認されていた。

マリナの介護ベッドは八口によるサポート付きであると第1話で述べたが、端末を接続することにより大病院の診察ベッドに匹敵する機能を発揮することが出来るのだ。ここでもGN型番で始まるベッドは伊達じゃない。

「マリナさん、それでは始めます」

診察着に着せ替えられベッドに横になったマリナに話しかける。

「フェルトさん、お願いします」

「シンサツ、カイシ、カイシ」

ベッドに埋め込まれた八口が回転し始めスキャンを開始した。

次々と送られてきたデータが診察用端末のディスプレイに表示される。それを覗き込むフェルトは顔色一つ変えずに分析していたが気分は決して穏やかではなかった。

「（やはり・・・進行している・・・）」

マリナの診察にはまだまだ時間が必要だった。

「次の曲は、今日のゲストのマフ・マクトミンさんからのリクエスト、スーパーノヴァの・・・」

診察の間、刹那はオルガンの上に置かれたラジオを聞きながら携帯端末片手に昼食のレシピを考えていた。

「……和食はシンプルに見えて前回失敗した。マリナは気にせず食べてくれたが、ガンダムマイスターに同じ失敗は許されない。沙慈・クロスロードの協力が必要だが今は難しいな。と、なると……うん？」

チャイムが鳴る。

クアンタのメンテナンスを終えたミレイナが訪ねてきた。

「セイエイさん、ご無沙汰しておりましたです！」

「ミレイナも元気そうで何よりだ。また綺麗になったんじゃないのか？」

「えー！セイエイさんもお世辞が旨くなりましたね。（これもイスマイルさんの御陰ですかあ？）」

刹那からのお世辞の奇襲攻撃に頬を赤らめながらも応戦するミレイナであるが、事実、ミレイナは戦後は大変魅力のある女性に成長しており、こうして年を召した今でも母親譲りなのか、同年代の女性より遙かに若く見える。

刹那がミレイナを客間に招く。

「イスマイルさんとグレイスさんは、まだ診察中……のようですね？」

「ああ、まだ奥の寝室で診察中だ。お茶で良いか？」

刹那はミレイナにお茶を煎れる。

「セイエイさん、お茶を煎れるのが上手になりましたね」

「ああ、マリナのお陰だ」

「はいはい、ご馳走様です」

「（・・・それはどういう意味だ？）」

怪訝な顔をする刹那の毎度のリアクションにミレイナは内心呆れていた。

「セイエイさん、話題を変えるです。セイエイさんには色々お話しする事があるのですが、今度会社の方に来ていただけませんか？」

ミレイナが真剣な表情で刹那に問いかける。

「？それは今の仕事と関係しているのか？それとも・・・」

「『仕事の方』の関係です。最近、ミレイナの会社を御贖にしていただいている取引先が出来たのですが、会社の創立記念パーティーの招待券を貰ったのです。ですが、一緒に行く人がいないので困っています」

「はあ、そんな事か」

刹那はソレスタルビーイングと関係のある事だと考えていたがアテが外れてしまったようだ。

「そんな事とは失礼です！折角のお得意様からのご招待を断るわけにはいかないです！断ったらどうなるか、考えただけで未恐ろしいです……」

「それは悪かった。でも、どうして俺なんだ？ミレイナの会社には若い男は何人も居るだろう？」

ミレイナはギクツとする。

刹那の疑問はもつともだった。ミレイナとフェルトの共同設立した会社は中小企業ではあったが、50人近くの社員を雇っていた。技術を専門にしている会社のため若い従業員も居るのだが……。

「え、ええ居ますよ。新鮮でピチピチな若い男が。でもセイエイさんじゃないと駄目なんです」

ミレイナの眼が泳いでいる。どうも何かを隠しているようだ。

「ミ・レ・イ・ナ、何かを隠しているな？」

刹那は目を細め問い詰める。刹那も隠し事は苦手であったがミレイナも同じようだ。

「うう、正直にお話しますです。実はパーティーの出席にはセイエイさんの同伴が条件なんです。取引先の営業部長さんにミレイナの社長室に飾ってあったセイエイさんとイスマイルさんの写真を見られてしまったです。そうしたら是非！と言われてしまったんです。セイエイさん、イスマイルさん、本当にごめんなさいです！」

ミレイナの社長机の上には、去年、刹那が地球に帰還したときに刹那

那・マリナ・フェルト・ミレイナの4人で写した写真が飾られていたのだ。

マリナは隠居したとはいえ聖母とまで言われた有名人。そのマリナと刹那が二人とも無自覚に仲睦まじく写っていたものだからマリナの関係者と思われたのだろう。

「……困ったな、それはマリナも一緒なのか？」

「いえいえ、イスマイルルさんは流石にお断りさせていただきました。イスマイルルさんが出席となると外交問題になりますし。それならセイエイさんだけでもと言われてしまいました……」

刹那は頭を抑えながら、こんな時にテイエリアが居てくれたらと考えてしまう。

「多分、セイエイさんをイスマイルルさんが昔面倒をみられていた子供達と勘違いしたと思うんです。でもでも、一応、取引先のカーリン営業部長には『この人売約済みです』と言ったんですが、それでも是非にということで押し切られてしまいました……ううごめんなさい」

ミレイナは顔を伏せながら申し訳なさそうにする。が、聞こえないような小声で「イスマイルルさんが売約済みですと言おうとしましたがやめました」と呟いたのを刹那は聞き逃していた。

「ふう、分かった。マリナと相談してからになるが、とりあえず同伴しよう。それにしてもミレイナが押し切られるとは、な。何者だ、その営業部長は？」

「セイエイさん、ありがとうございます！」

落ち込んでいたミレイナに顔に大輪の花が咲く。

「カーリン営業部長は凄い美人さんで頭も切れるスーパーレディです！でもセイエイさんを狙っている訳ではないと思う・・・ので大丈夫だと思います！」

「当たり前だ！」

客間でのそんなやりとりがしばらく続いたが、マリナの診察は終わらなかった。

今は刹那とミレイナがキッチンで昼食の支度を行っている。ミレイナと相談した結果、中華になったようだ。

ミレイナは、先ほど客間でクアントの改修計画をついに切り出すタイミングを失っていたがこのチャンスを利用してリベンジする。

チラチラッと刹那の顔を見てはプイツと顔を背ける。

それを繰り返して『セイエイさん、用事があるから話しかけて欲しいです』というサインを繰り返して送る。

ミレイナの改修計画には資金や技術的難関も幾つかあったが、それよりも改修中の代わりのMSの準備も課題に挙がっていた。以前ソレストルビーイングが運用していたMSで現在の刹那が使用できそうなMSは一機もない。

エクシアR3等の今では博物館コースのMSも秘匿されていたが、それでは何か有事があった際には代用となりえないのだ。

「何か俺に言いたいことがあるんじゃないのか？」

そんなミレイナのサインに遂に刹那が気がつく。

「（やっと気がついてくれたです。イスマイルさん相手だったら
トランザム状態で早いでしょうねえ）」

セイエイさん、ELSダブルオークアンタの改修案を持ってきたの
で後で見えて貰いませんか？」

マリナとの扱いの差に不満があつたが、顔には出さずにこやかに受
け答える。

「うん？ダブルオークアンタの改修計画案か。クアンタに改修は必
要なのか？・・・うっ」

刹那が手に持っていた大皿を突然落とした。マリナが盲目のため落
として割れるような陶器の皿は使っていないが、皿に盛られていた
野菜炒めが床に散乱する。

「！！セイエイさん、大丈夫ですか、突然どうしたんです！？」

ミレイナが苦しむ刹那に駆け寄るが刹那は両手で頭を押さえている。

「（うう、突然、強力な、これは脳量子波！？この家の中から？）」

刹那は倒れ込みそうになるが、強靱な精神力で体を支える。ミレイ
ナは肩を貸し刹那を助けるが次の瞬間

「刹那！マリナさんが、マリナさんが！早く来て！」

フェルトの悲鳴に近い叫び声が寝室から聞こえてきた。

刹那はミレイナの肩を借りながらもマリナの寝室に辿り着く。

胸を押さえ、顔から大量の油汗を流して苦しむマリナの姿がそこにはあった。

口には酸素吸入器が付けられていた。

「マリナ、マリナしっかりしろ！」

刹那はベッドの上で苦しむマリナに駆け寄ると必死に呼びかける。

「グレイスさん、これは一体どうしんですか？」

ミレイナも普段と違う刹那の様子に驚きながら診察用端末のコンソールを必死に叩くフェルトに質問する。

「ミレイナも来てほしいのね。丁度良かった」

フェルトはミレイナの顔を見て少しだけ不安が和らぐ。だが、

「刹那、ミレイナ、私もわからないの。マリナさんの診察が終わり、着替えを手伝っていたら、突然胸を押さえて倒れ込んだの。検査では胸には特に大きな異常はなかったはずなのに」

フェルトは焦りの表情で診察用端末のコンソールを叩き再度チェックを行うが、異常が発見できない。

「グレイスさん、王宮には？」

「アザディスタン王宮には連絡済み。移送用の輸送機を至急回すということだけど、アザディスタンの市街地は砂嵐ですぐには輸送機を発進できないの」

GNDドライブの開発が民間でも可能になった現在であるが、輸送機などでGNDドライブを使用している機種は大半が軍用が占めており、民間用に転用されてた機種は数が少ない現状だった。

「うう・・・せ、刹那、刹那は・・・ど、こ？」

マリナが苦痛の表情で必死に刹那を探す。

「マリナ！俺はここだ。俺はマリナの側にいる。しっかりしろ、一体どうした！」

刹那がマリナの呼びかけに必死に応える。マリナは胸を押さえていた右手を両肩を押さえる刹那の手の上に重ねる。

「せ、刹那。み、みんなを連れて、今すぐ・・・、逃げて・・・邪な・・・気配が・・・近づいて、来る」

マリナは苦悶の表情を浮かべながらも必死に刹那に伝える。

「マリナ！マリナ！しっかりしろ」

普段の冷静な刹那でもマリナの異常事態に取り乱してしまう。

「つつ、つつ、せ、刹那、い、痛っ・・・い」

「刹那、落ち着いて！」「セイエイさん、ちょっと落ち着いてくだ

さいですう!」

マリナを押さえる手に力が入りすぎていた。刹那が冷静を取り戻す。

「すまない。つい力を入れてすぎてしまった」

刹那はマリナに頭を垂れる。

「ハアハア、だ、大丈夫。気にしないで」

マリナは荒い呼吸ではあったが、刹那の心配を和らげようと頑張つて笑顔を見せる。

「本当にすまない。マリナ、それで邪な気配とは……いったい何だ？」

「わからない、私も良くわからないの。で……も、ハアハア、とても危険な……ものが近づいてくるのを……感じたの……うう」

そうは言うがマリナには心当たりがあった。今朝の夢に出てきた『悪魔』である。

それを刹那達に話すべきか悩んでいたのだが、苦しみながら刹那達に話しかける。

「うう……せ、刹那、フェルト、ミ、ミレイナさん……に、逃げて……あれは……ELSとは違う……」

最後の力を振り絞って刹那達に伝える。

「マリナ、もう良い！喋るな！それに俺は俺たちはどんな事があってもマリナの側を離れない」

「そうよ、私達はマリナさんの側を決して離れないわ」

「そうです、私達がマリナさんを守り抜くです」

フェルトもミレイナもマリナに呼びかける。しかし、刹那は違和感を感じていた。

「（マリナは脳量子は使えないはず。しかし、今は強力な脳量子波をマリナから感じる。そしてELSとは違う？どうしてマリナがそんな事をわかる？）」

窓の外が少し賑やかになる。

ELSクアンタが右手にGNソードVを携えて急降下着陸してきたからだ。しかし、マリナの症状を知ってか静かに地面に着地する。

GNドライブ搭載機だから出来る芸当だ。

ELSクアンタはすぐに片膝を付き、左掌を降ろし刹那の搭乗を待ちかまえた。

「クアンタか！？一体どうしたんだ、俺はまだお前を呼んではいないが？」

その光景に刹那が一番驚いた。クアンタが自分の意志で武装した状態で現れたのだ。

アザディスタン王宮の病院まで搬送するために刹那が呼び寄せたのではない。第一、搬送するだけならGNソードVは無用のはずだ。

その時、マリナのバイタルをモニタリングしていたフェルトの通信

用デバイスに緊急着信が入った。
フェルトはこんな時に！訝しがるが相手を確認するとヴェーダからだ。

「やあ、フェルト久しぶり」

相手はフェルトやミレイナにとってはあまり会いたくない相手、リジエネ・レジエッタであった。

テイエリア・アーデと同じ塩基配列を持つイノベイドであったが、性格はテイエリアとは正反対で取っつきにくく二人は苦手だ。なるべくなら話したくない相手である。ましてマリナが苦しんでいる時であればなおさらだ。

「リジエネさん、お久しぶりです。フェルトです。今日はどうかいたしましたか？ただいま取り込んでいまして、出来れば後でお願いしたいのですが」

それでも冷静を装いながらフェルトは答える。

「そうかあ、今の君たちに非常に関係のありそうな話だったんだけど、それなら後にしよう」

リジエネはフェルトの対応を見越していたように対応する。こう言えばフェルトは必ず食いついて来ると計算済みだ。

「リジエネ、何かあったのか！こちらも緊急事態だ。手短かに教えてくれ」

刹那がフェルトのモバイル端末を奪い取ると早口で話しかける。

「これはこれは、刹那・F・セイエイ。そうカリカリしなくても今教えてあげるよ。」

「早く頼む。こちらは一刻も争う事態になっている」

刹那は苦しむマリナの頭を優しく撫でながら、口調には焦りの色が見えた。

「まったく君はELSと融合した今もせっかちなね」

「・・・リジエネ・レジエッタ。俺はかまわんが、クアンタはGNバスターライフルでソレスタルビーイング号のヴェーダの区画だけ撃ち抜く用意をはじめたが良いか？」

外ではクアンタが宇宙空間のソレスタルビーイング号を狙撃するために背中 of 触手がソードビットを再現、GNバスターライフルの形状に展開をはじめていた。

超長距離狙撃を行うためGNドライブの出力が上昇しているのが家の中から確認できるほどだ。

さすがにクアンタ単独で本当に狙撃することはないだろうが、マリナがこの状態ではどうか怪しい。なお、クアンタのGNソードVは進化を遂げており曲線射撃どころか障害物を回避して背後から狙い撃つ事すら可能である。捕捉さえできれば地球の裏側でも狙撃出来るのだ。

「ああ、本当に君たちは、似たもの同士だねえ。勘違いしないでほしいね。僕は君たちと事を構える気はないよ。」

リジエネはクアンタにロックオンされているのを確認すると呆れたように返す。

「それならば！早く教えてください」

横でやりとりを聞いていたミレイナも語気が強くなる。

「わかったわかった。教えるよ。火星の軌道上に小型宇宙船と思われる物体がワープアウトしてきた。地球連邦は緊急調査隊としてMS調査小隊を派遣したんだけど、小型艦と遭遇したという通信を最後に連絡を絶ったのさ」

「!!!!!!」

刹那・フェルト・ミレイナに戦慄が走る。突然現れた外宇宙からの来訪者。

マリナが伝えた「ELSとは違う」という相手。

ミレイナは先ほどクアンタに話した「もしも手に負えない状況になったら」という言葉を思い出す。リジエネは続ける。

「小型宇宙船は短距離ワープを繰り返しながら太陽系を移動中だ。まるで何かを探しているようなワープだね。だが、徐々に地球に近づいてきている。僕の計算ではまもなく月の軌道上に現れるころだ」
刹那は目を閉じ何かを考えはじめた。

「火星に緊急派遣できる小隊ということは、ガデラーザ級とプレイヴの混成小隊！」

フェルトが漏らす。

「はいです。両機ともサキブレと同じくELS搭載型の最新鋭モデ

ルです。パイロットはイノベーター搭乗を前提に作つてある機体です。それが連絡を絶つたということとはただ事ではないです！」

ガデラーザ・ブレイブ共に51年前のELS防衛戦で初陣を飾つたMAとMSである。ELS戦後は幾度の世界大戦の危機が訪れたが、結果的には軍縮が進み、MSの開発スパンは現代の兵器と同じスパンまで落ち着いてはいた。それでもガデラーザ・ブレイヴ共に改良発展型されており、ブレイヴに至ってはシングルドライブではあるが数少ない純正太陽炉を搭載した可変MSに進化していた。

地球連邦軍は最新型ガデラーザ1機と同じく最新型ブレイブ2機による調査隊を派遣したわけだがそれが連絡を絶つたのだ。フェルト達が狼狽するのも頷ける。

刹那が目を見開く。その瞳は鮮やかな光彩を放っていた。

刹那は苦しむマリナの元に行き、マリナを優しく抱きしめ、耳元でささやく。

「マリナ、俺とクアンタは少しの間だけマリナの側を離れる。かならずマリナの元に帰ってくる。帰ってきたらまた一緒に花畑を散策しよう」

刹那はマリナの額に口づけを行う。

「駄目、せ、刹那、いけ、ません。わた．．私を置いて早く逃げて．．．』彼ら』の．．ひょう、て．．きはわた．．し、せ、つな
た、ちはかん．．けない．．」

マリナは苦痛の表情を浮かべながらも刹那の手を強く握りしめ再考を促そうとするが、今にも意識を失いそうでうまく言葉にならない。マリナは何かを知っているようだが、今はそれを聞き出している時

間はない。

それに刹那が先ほどまで感じていたマリナからの脳量子は弱くなっていたのだ。

マリナをモニタリングしているフェルトも、ついに刹那に出撃を促す。バイタルサインが危険域に近づきつつあるのだ。

「刹那、私とミレイナがマリナさんを看ているから、早く行って！
王宮の輸送機もこちらに向かっているわ」

「そうです、セイエイさんはクアンタで出撃してください。私達二人でイスマイルさんを守るです。ELSダブルオークアンタのバツクアツプは地上から私が行います！」

ミレイナも刹那の出撃を促す。

「ありがとう。二人ともマリナを頼む。リジエネ、ワープアウト予想ポイントを送ってくれ」

「すでにクアンタには送信済みだよ」

刹那は最後にもう一度マリナを抱きしめると、寢室の窓から一気に外に出た。

「（……………だめ、刹那……………行ってはだ……………め。悪魔はとても、危険……………の）」

マリナの叫びはついに刹那には届かなかった。

ミレイナも先ほどメンテナンス用に使用した端末を再び取り出し寢室のテーブルに展開する。

マリナの寢室が前線基地と化した。

刹那はクアンタ乗り込むとすぐにGNドライブの粒子生産量を上昇させる。

「セイエイさん、ELSダブルオークアンタのサポート回線オンラインです。発進いつでもどうぞ」

ミレイナからの通信がクアンタに届く。

「刹那・F・セイエイ、ダブルオークアンタ、マリナの苦しみを解き放つ！」

クアンタも刹那に應えるようにツインアイを強く輝かせ、大量のGN粒子を放出させてついに大空へと飛翔する。

重力をまるで引きちぎるような速度で急上昇を続けるクアンタよりソードビットが放たれた。

ソードビットはクアンタよりも早い速度で前面に展開すると瞬く間にワープゲートを形成する。

「ワープ目標、宇宙船ワープアウト予想付近。ワープアウト後、対話を試みる！」

クアンタはそのままワープゲートを突入し宇宙空間へと一気に躍り出る。

先ほどまで居た花々が咲き乱れるマリナの別荘とは違ってかわって、星々が瞬く大宇宙が広がっていた。

「（何故マリナから脳量子波が感じられたのか？しかし、接近中の宇宙船からはELSと違い脳量子波は感じられない。何が起きている？ELS達も知らない相手なのか？それよりもなぜELS達はおびえている？）」

ヴェーダの予想では間もなく宇宙船もワープアウトして来るのだが、意外な展開が待ち受けていた。

「セイエイさん！緊急事態です！」

第3話「ELSダブルオークアンタは伊達じゃないです！」（後書き）

次回予告

ヴェーダの予想を覆して突如ワイプアウトした謎の宇宙船。

GN-X部隊を悪鬼が襲いかかる。

そして刹那とクアンタに最大の危機が迫る！

後書き

読んでいただきありがとうございます。

第3話は4回リメイクしました。

第2話の話が膨らんでしまったので、第3話は予定の2倍です。

そのため第4話に追いやられた人々が3人ほど。

SSって難しいですね（^^；

さて、第一章も後2話で終了（予定）です。

第4話「くたばりそこないの女に加護を持つ騎士が現れたか」(前書き)

オリジナル設定オンパレードの第4話始まります。

第1章も残り2話です。

第4話「くたばりぞこないの女の加護を持つ騎士が現れたか」

その建物の一室には多くのモニターやコンソールが並び、世界各地の映像や軌道エレベーターから宇宙空間の様子までが映し出されている。

その内の一つのモニターには、ガデラーザとブレイヴの小隊が謎の宇宙船の奇襲を受けて撃墜される映像がリピート再生されていた。この映像はヴェーダによる情報統制のためまだ出回っていないはずである。

それよりも、一番大きいメインモニターには刹那とクアンタが宇宙空間へ向けて急上昇していく様子すら映し出されていたのだ。

『やはり、彼は彼女を救うため行ってしまいました』

「はい」

モニターを見ていた少女が、傍らに立つ長身の男に話しかける。

『司令。もう一度確認します。ここで彼らは死ぬのです』

「はい。それが彼らの運命と伺っております」

『繰り返し確認しますが第三者による介入の恐れは？』

「はい。何度も申し上げたとおり、『奇跡』は起こせません」

『そう・・・刹那・F・セイエイとマリナ・イスマイルの運命の

糸は間もなく途絶える事になりますね』

男の立ち位置からは小柄な少女の表情を伺うことができないが、悲しんでいることだけは十分に理解できた。ため息をつくと今度は男の方から話し始める。

「ただ、」

『ただ？』

「ただ、彼らが自分たちの運命に抗い自ら未来を切り開くことが出来れば、運命の歯車を狂わせることが出来れば、そこに付け入る事が出来れば・・・あるいは」

『運命を変える事が出来るかもしれない、ということですか』

「それでも可能性は限りなくゼロに近い。」

『そうですか・・・』

「はい」

少女は振り向くと男性を気にせず管制室の出口を目指す。

「どちらへ？」

『彼らの死に様を見届けに。せめて別れの一言ぐらい・・・伝えても良いでしょ？』

「・・・わかりました。すぐに準備をさせます」

『急いでください』

少女が退室すると今度は別の女性が入室する。女性はハイヒールの踵をカツツと鳴らし男に敬礼をするが開口一番

「司令？ 姫様が怒って出て行かれましたが、また要らない事を言っただんじやないでしょうねえ」

凄い剣幕で『司令』と呼ぶ男に対して迫る。

「私は運命から逃げられる確率は限りなくゼロに近いと申し上げただけだ」

「はあ、まったく。それでは姫様も怒ります。でも、そういう司令は限りなくゼロに近い方に賭けていますよね」

「フン、奴らが生き残れば我らの仕事は減る。死んでも予定通りの仕事量で済むはずだ。それよりも報告は？」

「（まったく貴方は何時も素直じゃないんだから）司令の言いつけ通り、姫様の運命にオーバーホール済みのアレの取り付けが終わりました」

男の顔がニヤリと笑ったように見えた。

「良いタイミングだ」

「は？」

「こちらの話だ。姫様に準備が出来たと伝える」

ミレイナからの一報で事態は急転した。

「セイエイさん！緊急事態です。宇宙船はワープを突如終了。ワープアウト後、付近を航行中の地球連邦軍の戦艦に衝突しました！もう無茶苦茶です」

時間は刹那が宇宙空間にワープする前まで遡る。

連絡を絶った小型宇宙船調査隊の搜索と増援のため、地球連邦軍はナイル級戦艦を緊急出動させていた。ガデラーザをも曳航できる巨大戦艦である。現在は同じく緊急出動要請を受けたMS部隊と航路上でランデブーする手筈だった。

緊急要請を受けたMS部隊とは、GNビームライフル、NGNバズーカ、GNロングバレルビームライフルで武装し、長距離侵攻用にGNブースターと粒子増加タンクを装備した重装備型GN-X VI部隊である。
総数12機、パイロットは皆イノベーターであり、GN-X VIもパイロットに合わせてカスタマイズが行われている。

GN-X VI部隊はナイル級戦艦にて合流後、刹那同様にヴェーダの予想ワープアウトポイントに急行、『遊軍機』と協力して宇宙船を挟撃する作戦が軍本部より発令されていた。

ただし友軍機の正体がソレスタルビーイングのガンダムという事は聞かされていない。勿論、刹那もGN-X部隊との挟撃作戦は聞かされていない。

「隊長、質問してもよろしいですか？」

「7番機、今は作戦行動中だ。個人的な質問は慎め」

「も、申し訳ございません」

GNロングバレルビームライフルを装備したGN-X7番機のパイロットが部隊内通信で隊長機に通信を入れるが、副隊長機から遮られた。しかし、

「まあそういうな。7番機、作戦行動中であるが、質問を許可する」

「ハ、隊長ありがとうございます。我々がワープアウトポイントで遭遇する友軍機というのはどの部隊ですか？我々より先に急行できる友軍部隊はこの近くにはいないはずですが……。第一、我が部隊だけで対応できるではありませんか」

「フム、私も友軍機としか聞かされていない。しかし、我々と共同作戦が行えるだけの機体となると最新鋭機だろう。それも、かなりの戦闘能力を持った、な」

老練な隊長は何か心当たりがありそう表情を浮かべながら応える。もともと音声通信のみで映像は部隊内には送られていないが。

「ありえませんが！GN-Xと互角に渡り合えるMSを私は知りません。それは我々が一番よく知っている事ではありませんか。たとえば相手がブレイヴEIでも模擬戦で我々のGN-XVIは後れをとるようなことはありません！」

「残念だがそのブレイヴイーが撃墜された。ガデラーザも奇襲を受けて撃墜されたのだ」

「……信じられません。ガデラーザとブレイヴチームを壊滅させるなんて何かの間違いです」

「残念ながら本当だ。だから俺たちで仇討ちをしてやるってわけだ」

「……了解。鼻持ちならない奴らでしたが、それでも我々の仲間です。仲間の仇を必ず討ちましょう」

7番機のパイロットは若いのだろうか血気盛んなようだ。

「そうだな。副隊長、戦艦からの通信は入っていないか？着艦コーズを仰ぎたい」

ナイル級戦艦が出すGN粒子の光を肉眼でも確認できる距離に近づきつつあったのだが、通信が入らない。

「こちらからも呼びかけを行っていますが、返信がありません。レーザー通信に（ザーラー）」

直後、酷いノイズが入り交じり通信が途絶えてしまう。

「（副隊長、どうした？通信が切れてしまったが通信機の故障か？）」

「（原因がわかりません。部隊内通信も行えなくなりました。レーザー通信に切り替えます）」

すぐに脳量子波で通信を行えるのがイノベーターの利点であったが、機体のデータリンクは別の話だ。

ナイル級からもレーザー通信で部隊に通信が入り着艦許可が下りる。その時、

「隊長！」

後続の10番機から通信が入った。

9時方向の宇宙区間が歪むと宇宙船がワープアウトしてきた。

「まずい、衝突コースだ。各機、着艦中止、戦艦から離れる！」

ヴェーダの予想を裏切るように宇宙船がワープアウトしてきたのだ。宇宙船は前方にGNフィールドのようにエネルギーフィールドを発生させるとナイル級戦艦のカタパルトデッキ側面に一直線に突っ込む。

「な、馬鹿なラム戦だと!？」

ナイル級戦艦の艦長は緊急回避を命じるが間に合わない。

太古の昔、水上艦が船首水線下に角を取り付け敵艦隊に体当たりした戦法だ。

それをこの宇宙船は行ってきたのだ。

戦艦にすさまじい衝撃が走る。宇宙船の体当たりにより戦艦前方のカタパルト部分と後方のデッキ・コンテナ部分が大きく割け、真っ二つにされてしまった。

「た、隊長!戦艦が、轟沈します!」

GN-X部隊の隊員達から動揺の声が漏れてくる。

「司令本部聞こえるか？戦艦が敵宇宙船の体当たりにより撃沈した！おい、本部応答せよ！本部！」

副隊長機が地球連邦軍本部に通信を入れようとしますが、やはり繋がらない。

「隊長、本部とも通信できません」

「何！？（この一連の通信障害はこの宇宙船からのジャミングか？）副隊長はそのまま呼び出しをつづける。11番機・12番機は戦艦の乗組員の救助に向かえ、残りはあの宇宙船を沈めるぞ！」

「了解」

宇宙船は戦艦の爆発の中から悠々と現れると今度はGN-X部隊に向けて舵を取る。

「戦艦の仇を取るぞ。全機、対艦ミサイル発射！」

GN-Xの長距離GNブースターにはハードポイントが取り付けられており、任務に応じて武装を交換できるようになっている。

今回は対艦ミサイルと多連装GNミサイルポッドを装備していた。この対艦ミサイルは51年前の作戦時に大型宇宙船の迎撃に出撃したGN-X部隊が粒子不足で宇宙船の攻撃に失敗した教訓から装備されたミサイルである。推進力にGN粒子を使用しており一時的ではあるがトランザム並みの急加速を行えるため一度ロックオンされたら並の戦闘艦では逃げるのが困難である。

合計10発の対艦ミサイルが迫るが宇宙船は真つ正面からミサイルに突進する。血迷ったのか？とGN-X部隊の隊員が思ったとき宇宙船の多数の砲門から豪雨のようなレーザーマシンガン・ビラルケマが発射された。次々と対艦ミサイルが打ち落とされミサイルの爆煙で宇宙船が見えなくなってしまう。しかし、GN-X部隊はイノベーターパイロットである。すぐに宇宙船が煙の中を動き始めていることを察知する。

「各機、敵艦艇は健在だ。あいつのレーザー兵器を食らうとGNフィールドでも一溜まりもない。一旦、距離を置いてロングレンジから攻撃を行う」

隊長の命令で一斉に散開する。GNブースターは粒子増加タンクと組み合わせる事によりフェリー航行だけではなく高機動戦にも利用できるのだ。

「ミサイルは落とせたが、こいつならどうだ！」

GNロングバレルビームライフルを装備した7番機が煙の中から姿を現した宇宙船の右舷に一撃を浴びせる。連射速度を落とした代わりに一撃の破壊力が大幅にあがっている。対艦・要塞攻撃に特化したビームライフルだ。

だが、ビームは直進し右舷にあたる直前で巨大な可動式ブレードで反射させられてしまった。

「な、俺たちのディフェンスロッドと同じ技術かよ!？」

宇宙船に装備されていた可動式ブレードはアクティブバインダーと呼ばれる装備であったが、GN-X部隊のパイロットは知るはずも

ない。

「ビーム兵器が駄目なら！」

宇宙船の正面に回り込んだGN-X2機がNGNバズーカを発射する。NGNバズーカは物理弾頭を発射することが可能だ。

両機が発射したのは散弾である。流石のアクティブバインダーでも防御しきれず何発かは宇宙船の前面装甲に命中するが、散弾では威力が弱いため宇宙船の装甲を貫通することが出来ない。

今度は宇宙船は全方位にレーザーマシンガンを発射しながら急加速してきた。

「なんて加速力だ！6番機・9番機逃げろ！」

宇宙船の正面に展開しNGNバズーカを発射していたGN-X2機だ。

「くそつたれ、散弾を使い果たした」

NGNバズーカを撃ち尽くした6番機が毒づく。

「俺のを使え」

9番機がNGNバズーカを投げる。6番機が新しいNGNバズーカを受け取り宇宙船に狙いをつけたが、すでに間に合わない距離に宇宙船が迫っていた。

「隊長、つわあ」

宇宙船は前面にエネルギーフィールドを展開し6番機に体当たりを

しかけたのだ。ナイル級戦艦を轟沈させるエネルギーフィールドだ。GN-Xはバラバラになり爆散する。

「6番機！敵艦艇が逃げる。後方から集中して攻撃を行うぞ」

「コマンダー、機動兵器が追尾してきます。振り切る事も可能ですが？」

GN-X部隊が追撃する宇宙船のブリッジ。この宇宙船は4人の彼らによって操艦されたいた。

中央に座り操艦を担当する『彼』は6本の指でコンソールを叩きながらブリッジの一番後ろに座る『彼ら』の司令官に指示を仰ぐ。

『いや、しばらく追い駆けっここに付き合っつて貰おう。エネルギーの回復はどうか』

「高速機動には差し支えませんが、破壊砲へのエネルギーチャージ完了は発射ポイント到着に間に合いません」

『そうなるともう少し時間稼ぎが必要か』

「コマンダー、それでしたら我々が機動兵器の相手をします。コマンダーは発射ポイントへ向かって下さい」

操舵を勤める彼の両脇に座っていた『彼ら』が立ち上がり指揮官に進言する。

『お前達二人で大丈夫か？』

「相手は進化が始まったといえ、まだ『人間』です。相手が人間であれば戦いようもあります」

『わかった。ただし、巫女に加護を受けた騎士が現れたらすぐに報告しろ』

「了解」

彼らは背中の翼を誇るように広げながら手にしたライフルを構え指揮官に応えるのだった。

宇宙船は追撃してくるGN-X部隊をまるで無視するように地球に舵をとり、更にスピードを上げる。

「逃げ切るつもりか！だがこちらは下駄（GNブースター）付きだ。逃げられると思うなよ！」

GN-X部隊は空になった粒子増加タンクを切り離すと更に加速する。その時、宇宙船の後部ハッチが開き始めた。

「隊長、敵宇宙船は艦載機を発進させる模様です」

「阻止しろ！4番機、7番機、後部ハッチを狙え。発進する所を狙うんだ」

「Yes, Sir! 必ず仕留めて見せます。5番機、8番機、観測データをこちらに寄こしてくれ」

GNロングバレルビームライフルを装備する7番機と4番機が狙撃体制を取る。5番機、8番機は精密射撃用の観測レーダーを装備しているのだ。

だが、宇宙船はハンターに狙われているのを知ってか知らずかジグザグに回避運動をとるような事もせず、一直線に地球を目指す。更に加速する。

「（このままだとランザムによる加速が必要になってくる。早くハッチを開けやがれ）」

4番機のスナイパーがそう思ったとき、ハッチが完全に開いた。

「「今だ!」」

誰もが4番機、7番機のGNロングバレルビームライフルが必殺の一撃が発射すると思った。

しかし、

「4番機、7番機!今だ撃て!何をしている!発砲しろ!発砲しろ!艦載機が出てくるぞ」

副隊長が4番機、7番機に必死に命令をする。しかし、両機とも構えたまま一向に発射しない。

「おい、4番機、7番機、応答しろ、どうした?トラブルか?」

隊長機も通信を入れるが応答がない。嫌な予感が頭をよぎるが、すぐに現実になる。

コックピットのモニターに4番機、7番機の生体反応が途絶えた事

を示す警告が表示されていたのだ。

生体反応が消失した4番機と7番機は無人のまま軌道を外れ始める。彼らは電子スクープ越しに見てしまったのだ。ハッチから出てくる『彼ら』の目を。

事態が飲み込めないGN-X部隊の隙をついて、後部ハッチから宇宙空間の闇にとけ込むような翼を持った漆黒の人型が飛び出してきたのはまさにその時だった。

「ミレイナ、連邦軍の被害は？」

「衝突された戦艦は被害甚大で轟沈。退艦命令が出されています。現在、生存者の救出作業中です。ポイントを送ります」

刹那はミレイナから送られてきたポイントに目をやる。現在のクアンタの位置からそう遠くはない。すぐに刹那はクアンタを衝突ポイントへ転進させる。

「セイエイさん、最新情報です。宇宙船から艦載機が発進。現在、MS部隊と交戦を開始しました」

最悪な連絡だった。それはELSとは違い兵器を運用している高度な文明を持つ異星人だということだ。

こちらに対して敵対心を持っているとなると対話の難易度が跳ね上がる。いや、そもそも対話が成立するのか怪しくなる。

「艦載機の映像は？こちらに回してくれ」

ミレイナからの敵艦載機の映像が送られてくるがジャミング酷い。しかし、そこには黒い物体が通り過ぎた残像だけが映っていた。

「ヴェーダによる画像処理でもこれが精一杯です。特殊なジャマーがあるのかわかりませんが、映像が妨害されています」

ミレイナからの弁明を聞きながら刹那は応える。

「ジャマーだけではないかもしれない。相手は超高速で機動している可能性がある」

「……！現在交戦中のMS部隊のパイロットは全員イノベーターです。相手を捕捉できないわけがありません！」

刹那の予測にミレイナが反論する。確かにミレイナの反論もわからなくもない。イノベーターの反応速度は尋常ではない。

ましてイノベーターの彼らが操るMSは、イノベーター用にチューニングされたGN-X V Iだ。

「ミレイナ、残念だが刹那の言うとおりだ」

リジエネから割り込み通信が入る。ヴェーダの予測が外されたせいか、機嫌はよろしくない。

「リジエネ、まさか」

「そのまさか、だよ。交戦中のGN-Xの半数以上が墮とされた。これでは時間稼ぎにもならないよ。宇宙船は、艦載機2機を発進させた後、地球に向かっている」

緊急出動要請で出撃した長距離GNブースターを装備したGN-Xが12機が宇宙船を交戦していたのだが、2機は戦艦の乗組員の救助に、10機が追撃を行ったのだがその半数、つまり5機撃墜されたというのだ。

「し、信じられないです」

このリジエネの報告にさすがのミレイナも動揺が隠せない。

「刹那、宇宙船が人類に敵対行動をとった今、地球連邦は宇宙船を敵と判断した。しかし、救援部隊を送るうにも迎撃に間に合わない。彼らの救援と宇宙船の追撃をお願いしたいが出来るか？」

リジエネからの提案にミレイナは躊躇する。クアンタは本来はソレスタルビーイング所属機。

公式には51年前の大戦で対話のため行方不明になった機体である。クアンタが長い対話の旅を終えて地球に帰還していることを知るのには政府関係者でも一握りしかないはずだ。アザディスタン王国の王室の人間も極一部の者しか知らない。ミレイナは非常時とはいえ一時的に地球連邦の戦力として組み込まれるのは抵抗感があった。

「了解した」

しかし、刹那は快諾する。

「君ならそう言ってくると思ったよ。でも、安心したまえ。君達の存在はヴェーダで消し去る」

別の見方をすれば、刹那が宇宙船を退けてもその手柄は地球連邦の手柄になるということだ。

GN-X部隊は必死に宇宙船の艦載機と戦っていた。

GN-X VIとイノベーターで構成されたエリート部隊であったが、宇宙船から発進した2体の敵性物体の前になす術もなく次々と味方機を失っていた。

GN-X3番機が高速にランダム機動を行う敵艦載機に向かってGNビームライフルをフルオートで発射するが当てることができない。イノベーターのエリート部隊でさえ敵艦載機を追尾しきれないのだ。いや、正確に言うとGN-Xが追従できないのだ。

逆に独特のフォルムを持つ敵艦載機が手にするライフルから反撃の一撃がGN-Xを襲う。

「隊長！き、機体が制御できません！」

糸の切れた操り人形のようにGN-Xがコントロールを失うと、二射目が胴体を射抜く。

「3番機！今すぐ機体を捨ててすぐに脱出しろ！」

3番機のパイロットはコアファイターで脱出を試みるが、敵艦載機はコアファイターごと真つ二つに叩き切ってしまった。

「3番機……こ、この『悪魔』め！」

「隊長！奴らは、速すぎます！トランザムでも捕捉できません。」

隊長だけでも離脱して下さい」

2番機がGNブースターのハードポイントに取り付けられている多連装GNミサイルポッドからGNミサイルを一斉発射する。

GNミサイルの大軍が敵艦載機2機に襲いかかるが、手にするライフルをバルカンモードに切り替えると次々と撃ち落とし始めた。

「そのミサイルは貴様らへの牽制だ。今です！離脱して下さい」

突如、敵艦載機の周辺をスモークが覆う。GNミサイルの中に粒子攪乱ミサイルを紛れ込ませてあったのだ。

「副隊長、離脱はお前も一緒だ。馬鹿なことはやめろ！」

「私が時間を稼ぎます。我々の仇を必ずお願いします！」

副隊長は隊長機に敬礼をすると、長距離ブースターを切り離し、GNビームサーベルを抜刀してスモークの中に特攻する。

「トランザム！」

隊長機は自機後方の煙の中で小さな爆発と大きな爆発が数回起きたのを確認すると無意識のうちにコックピットを叩いていた。

それには部下を見捨てた自分への怒り、悔しさ、無念、敵への憎悪、様々な感情が籠められている。

「クソ！クソ！クソ！『悪魔』共め、部下の命の代償は必ず償って貰うぞ」

しかし、突然GNブースターが撃ち抜かれ爆散する。爆発により機

体バランスを失うが幸いにも大きなダメージはなかったようだ。

「な、何！攻撃だと！？どこから？」

正面モニターを凝視する。そこにはライフルを構える敵艦載機の文字通り悪魔のような姿があった。

「奴は、先回りしていたというのか？信じられん、何というスピードだ。ぐあッ」

機体が激しく揺さぶられる。後方から攻撃され肩に装備されていたGNシールドを吹き飛ばされたのだ。

「ク、後方からも。副隊長、やはり駄目だったか」

ついに追撃部隊のGN-X10機が隊長機を残して全て敵性物体によって壊滅させられてしまった。

わずか2体の悪魔の仕業である。敵艦載機は余裕を見せつけるようにゆっくりとこちらに近づいてくる。挟み撃ちにするつもりだ。

「『悪魔』共、来るならこい！この命に代えても部下の敵を取らせてもらおう！」

隊長機は擬似GNドライブの出力をあげるとGNバスターソードの切っ先を悪魔に向ける。

残りのGN粒子を全てトランザムに回し、特攻を行うつもりだ。

2体の悪魔は隊長機の覚悟をまるで小馬鹿にしたように腕を組みこちらの様子を見ている。前方の1体がその手にしたライフルとソードを兼ね備えた物体をわざとゆっくり構え始めた。まるで射的の的

を射るように片手で構え挑発してきたのだ。

「どこまで我々を馬鹿にしたら気が済むのだ！だが・・・その余裕も今、終わりにしてやる。トランザム！！」

GN-Xが爆発したような加速でGNバスターソードを振りかぶり悪鬼達に切りかかる！

しかし、悪鬼の1体がライフルでGNバスターソードを易々と受け止めると、何とGNバスターソードを弾き飛ばしてしまった。

「かかったな。それは困だ！」

GN-Xの腰にマウントされたビームサーベルを抜き去り素早く悪鬼の脇腹へと突き刺す！

トランザム中の高出力ビームサーベルはどんな装甲でも貫き通すのだ。

まるで巨大な針を突き刺された生き物のように苦しみもがく。

突き刺したビームサーベルを引き抜き、トドメの上段からの一撃を振り下ろす。

「これでトドメだ！」

悪鬼が真っ二つに斬られた！

・・・ハズだった。

「な、何！？」

GN-Xのビームサーベルからビームが出ていなかったのだ。ビームサーベルの束だけを振り下ろした形だった。

「これは……どういうことだ！？まだ粒子切れにはならないはずだ」

突然の事態に一瞬呆然とする。

異常事態を把握できずにはいたが、危険を察知してすぐにGN-Xを離脱させる。

しかし、トランザム中であつたハズの機体が重い。いやトランザムが解除されていたのだ。

突如コックピット内にアラームが鳴り響く。操縦桿を動かすが機体が反応しない。

悪魔が動かなくなつたGN-Xを睨みつけると怒り狂つたようにライフルを構え、斬りかかつてきた。死を覚悟する。

「……俺は部下の仇を取ること出来なまま死ぬのか……」

そのライフルが振り下ろされようとしたその瞬間、粒子ビームが悪魔を撃ち抜き上半身を吹き飛ばした！

「……友軍機？誰だ？」

モニターに映る友軍機のGN粒子の輝きを見て目を見開いた。

「あの粒子の色は、純正GNドライブだと！」

もう一体の悪魔が粒子ビームの方向にライフルを発射するが、緑の粒子を放つ『それ』は全て回避する。

二発目の粒子ビームが放たれた。悪魔もGN-X以上の機動力で回避運動を取るが粒子ビームは吸い込まれるように曲線を描きながら

正確に右腕をライフル共々吹き飛ばす。

「・・・なんて凄まじい威力と命中精度だ。誰だ一体？」

首を動かすことすら出来なくなったGN-Xの目の前を緑のGN粒子を放つ『それ』が凄まじいスピードで駆け抜け悪魔を追撃する。ELSダブルオークアンタが51年ぶりに戦場に舞い戻ったのだ。

「ダブルオークアンタ、目標を駆逐する！」

「コマンダー、例の騎士が現れました。すでにこちらは一人倒されました。予想以上の戦闘能力です」

『くたばりぞこないの女の加護を持つ騎士が現れたか』

ナイル級戦艦にラム戦をしかけ撃沈させた宇宙船のブリッジである。

「しかし、巫女の加護により我々の力が通用しません。コマンダー！私に出撃の許可を下さい」

『それは許可できない。仲間を殺されて悔しい気持ちは私も同じだ。私が行こう。私が奴の息の根を止める。貴様は予定通り攻撃を仕掛ける』

「コマンダー・・・了解しました。仲間の無念を晴らしてください。私は破壊砲の射程に入り次第、攻撃を開始します」

『頼んだぞ。このチャンスを逃すわけにはいかない。何としてもあ

の女の魂の輪廻転生を阻止するのだ』

逃げる悪魔の翼をGNソードVの一撃が貫く。

あれほどGN-X部隊を翻弄し常に優勢を保っていた悪魔が、たった一機のMSの参戦で形勢逆転したのだ。

悪魔は片翼を失いバランスを崩したところで、最後の―撃を見舞われてしまう。

「こいつらは何だ？MSのような機械でもなかった。それにあの姿形は？」

この時、刹那はダブルオークアンタと自信に起きている不思議な現象とマリナの危篤をまだ知る由もなかった。

第4話「くたばりぞこないの女の加護を持つ騎士が現れたか」（後書き）

次回予告

遂に刹那とマリナの前に姿を現した悪魔達。

刹那とマリナは悪魔達にどう立ち向かうのか？それとも悪夢が現実のものとなるのか？

後書き

次回で第1章終了です。

第4話は4回リテイク、GN-X部隊の活躍を多めにしました。

次回はクアンタと悪魔指揮官の一騎打ち。そして、あり得ないラストと第2章へ続きます。

ところでGN-X 4番機と7番機のパイロットの生体反応が無くなった。死亡した件ですが、一睨みされてフロートテンプルのダイバーのように魂を飛ばされてしまいました。相手は悪魔。サタンです。つまり悪魔指揮官というのはサタンコマンダーです。普通のMSでは勝てません。

というわけで誰かMH持ってきて！。

第5話「刹那、私は貴方を愛していました」(前書き)

第5話で第一章が終了です。

場面展開が多いので読み辛いかもしれませんがご了承下さい。

第5話「刹那、私は貴方を愛していました」

刹那が宇宙で悪魔達と戦っている頃、フェルトとミレイナはマリナの蘇生に全力を尽くしていた。

アザデイスタン王宮の医療チームも駆けつけてはいるが、時間の問題だった。

「マリナ！マリナ、目をあけて！お願い、呼吸をして」

フェルトが必死の形相で心臓マッサージを行う。

「イスマイルさん、まだセイエイさんは帰って来ていません。だから、だから！息をしてください」

「マリナ、オキロ、マリナ、オキロ、メヲサマセ、メヲサマセ」

ミレイナも八口もマリナの耳元で必死に呼びかける。

刹那が宇宙船の悪魔と遭遇したあたりからマリナの呼吸が停止したのだ。

「お願い、お願い！お願い！！マリナ、呼吸をして、マリナア！」

私はゆっくりと瞼をあける。遠い昔光を失ったはずの私。ぼんやりと何かが見えてきた。

小さな光が瞬いている。私を包み込むように無限に広がる大宇宙。

私は夢と同じように宇宙空間に漂っていた。夢と同じく何も着いていない。

体も若返っている。

「これは夢の続き？夢の続きであれば私はあの悪魔に殺されてしまった」

「それでは『現実』？わからない。でも、刹那に危機が迫っている事は間違いありません」

マリナ・イスマイルは自分自身が不思議な状態であるにもかかわらず、落ち着いていた。

まるで、いずれこうなることが判っていたかのように。

マリナは刹那を探す。見るのではなく、刹那を感じるのだ。

「見つけた！刹那のガンダム！」

動けなくなったGN-Xにトドメの一撃を加えようとしていた悪魔をクアンタが狙撃する所だった。

「刹那、駄目！あれに近づいてはいけません。目を合わせただけで魂を吸い取られます」

マリナはクアンタの元へと向かう。そのスピードはクアンタを遙に上回っていた。

「良かった。今度は間に合う」

マリナはダブルオークアンタに近づくと背中からそっと憑依する。まるで刹那に知られないように。

「刹那は私の命に賭けて守り抜きます」

「GN-Xのパイロット、応答しろ。こちらは地球連邦軍『所属機』だ」

刹那は大破したGN-Xのパイロット、先ほどまでエリート部隊を率いていた隊長機に通信を入れる。

「友軍機だと！？（あの顔はどこかで見たことがあるぞ、まさか？）俺は夢でも見ているようだ」

「戦艦の乗組員の救助は完了した。コアファイターで脱出は可能か？GN-X2機がこちらに向かっている」

ナイル級戦艦の乗組員救助を行っていたGN-X11番機と12番機だ。

「粒子残量が心許ないが、コアファイターで脱出して部下に捨て貰うことが出来るかもしれない」

「了解した。奴らの増援が来る前に脱出しろ」

「わかった。コアファイターで脱出する」

刹那はGN-Xからコアファイターが分離するのを見届ける。

「GN-Xのパイロット、最後に聞いておきたい。奴らは何者だ。あの姿形は『悪魔』にしか見えなかった」

「俺も判らない。俺たちは奴らに手も足も出なかった。俺は部下の仇も討てなかった。何なんだあいつらは！何の目的でやってきたんだ？クソツ」

「そうか……。だが、今は部下の分まで生きる事を考える」

「……そうだな。救援に感謝する。『ガンダム』、俺たちの仇を討ってくれ」

コアファイターが戦場から離脱するのを見届けると刹那は宇宙船の後を追うべく転進する。

だが、すぐに刹那の追撃は阻止される事となる。長距離からクアンタに向けてレーザーマシンガンが発射されたのだ。

次々と降り注ぐレーザーマシンガンの雨をクアンタは回避するが、刹那はそれが牽制でしかないことはわかっていた。本命の攻撃は別にあると。

「その通り、本命はこちらだ」

手前の空間がぐにやりと歪む。

大型の悪魔が斧スバルクを構えてワープアウトしてきたのだ。

ガシンン！

クアンタは辛うじて奇襲攻撃をGNソードVで受け止めるが、はじき飛ばされてしまう。

普通のイノベーターでは受け止めることも出来ず叩き斬られていたであろう。刹那はクアンタの姿勢をすぐに立て直しGNソードVの鋒を悪魔に向ける。

「何者だ！何の目的があつて地球にやつてきた」

悪魔はクアンタに対峙すると動きを止めた。先ほどの悪魔達より一回り大きく、また軍服のようなものも着ていることから上位だといふことがつかえる。

「我はサタン・コマンダー。我の目的は退魔の巫女の魂ただ一つ」

クアンタの通信回線を使わずに直接、脳量子波で悪魔は話しかけてきた。これには刹那も驚く。

「サタン・コマンダー？退魔の巫女だと？」

「貴様が知らぬはずがあるまい」

サタン・コマンダーが斧を構え再び突進してくる。斧の一撃を再びGNソードVで受け止める。今度ははじき飛ばされずに粘り勝った。

「俺は退魔の巫女など知らない」

「何を馬鹿な。退魔の巫女の加護を受けているお前が言う台詞か！」

サタン・コマンダーは力に任せてクアンタを突き放す。

刹那はGNソードVをライフフルモードに切り替えるとサタン・コマンダーに向かって射撃を試みる。

しかし、ビームが当たる直前、サタン・コマンダーの姿は消えてしまった。

「ワープとは違う！？後ろか！」

刹那は咄嗟にクアンタを反転させると強烈な殺気の方角にGNソードVを切り払う。

「流石は巫女の騎士。これなら部下がやられるわけだ」

そこには斧を盾にしてGNソードVを防ぐサタン・コマンドーの姿があった。

「俺は巫女の騎士ではない。ソレスタルビーイングのガンダムマイスターだ！」

「しらを切るか。ならば、その証拠を見せてやるっ」

刹那はサタン・コマンドーから一瞬異様なオーラのようなモノがクアンタに向けて放たれたように見えた。

『いけない!』

刹那は聞き覚えのある女性の声を聞いた。

次の瞬間、刹那はクアンタのコックピットから信じられない光景を目にする。

「マリナ!?!」

『刹那とサタン・コマンドーが戦闘に突入したようだな。次元航行艦の動きは?』

「はい、司令。サタンの次元航行艦は単独で地球に向かっています」
多くのモニターやコンソールが並ぶ一室。数名のオペレーターが司令と呼ばれる長身の男の指示でコンソールを叩いていた。

「司令、『ドウター』が次元航行艦の攻撃目標を予測しました。司令の予想通り、やはりアザディスタン王国です」

「フン、やはりマリナ・イスマイルの住居を狙うか。攻撃ポイントはどうだ？」

「ドウターは宇宙空間もしくは衛星軌道上からの攻撃がもつとも有力と予測しています」

「次元航行艦の乗員は4名だ。攻撃に失敗した場合は直接の地上戦も想定できる」

その一言でオペレーター達に緊張が走る。

「まさか、カミカゼ、ですか？」

「さもありなん。サタン共も、はじめから無事に帰れるとは思っていないだろう。次元航行艦の最大射程からアザディスタンへの攻撃ポイントを割り出せ」

「すでに割り出し済みです。姫様のディステイニーに攻撃ポイントも転送済みです」

「手回しがいいな。地球連邦軍の動きと姫様のディステイニーの偽装は？」

「軌道エレベーター『ラ・トゥール』常駐のGN-X小隊にスクランブルが発令されました。しかし、次元航行艦の阻止には間に合いそうもありません。姫様のディスティニーはヴェーダへの偽装は完璧です。地球連邦軍『所属機』として処理されるはずですよ」

『ウム。連邦政府にも伝える、アザディスタン王国が攻撃される恐れがあるよ』

軌道エレベーター、ラ・トゥールに常駐するGN-X VIE2個小隊合計6機が、ナイル級戦艦を撃沈させた宇宙船を迎撃するべく発進していた。

GNブースターによるトランザム中である。

「せめて粒子増加タンクを付ける事が出来れば長距離トランザムが使えるのに」

「隊長、無理を言わないで下さい。下駄を履けただけマシだと思いますよ」

GN-X小隊はスクランブル発進のため下駄、つまりGNブースターしか取り付ける時間がなかったのだ。粒子増加タンクを装備していないためGNブースター胴体内粒子タンク分の中距離トランザムしか行うことが出来ないのだ。

「隊長、後方より友軍機が接近中！」

「何、トランザム中の俺達に追いつけるのか？まさか、ブレイヴの

野郎共か!？」

「こ、これはブレイヴエエではありません。ブレイヴエエの高々度迎撃パッケージより速い!？」

「一体、どこのどいつだ」

「ヴェーダへ機体照合しましたが、該当ありません」

「新型機だというのはか？まさか、噂のガンダムという奴か？」

「隊長、コールサインがわかりました。『ゴールド・ソード』最近、登録された機体のようです」

「『金の剣』だと？馬鹿にしゃがって。国民の税金で作ったMSを何だと思ってやがる。一言文句を言ってやる!」

「後方より急速接近！並びます!!」

GN-X小隊の後方から『それ』は一気に迫るとGN-X小隊の先頭を飛行する隊長機に併走する。

「どこのどいつだ！名を名乗・・・れ!？」

ギロリ!

と『それ』の鋭い眼光が隊長機を睨む。MSのアイセンサーとは違う。

黄金色に輝く機体の巨大な頭部に、人間の眼と同じ物が2つ着いていたのだ。

その眼差しから背筋に冷たいものを感じた。

「（これは、文句を言ったらやばい・・・）」

『それ』は一気に加速するとあっという間に見えなくなってしまう。

「隊長、3倍以上の速度で離脱していきました」

「GN粒子の光も見えませんでしたね・・・」

「強力なジャミングで映像の記録に失敗しました」

「なんだっただ？あれは」

刹那は驚愕する。

刹那の目の前には両手を広げ、サタン・コマンダーから放たれた邪悪なオーラから身を挺して守るマリナの姿がそこにあっただのだ。

何も身につけず若い頃の姿に戻り妖精のように透き通ったマリナの姿は刹那には神々しく見えた。

「なぜ、マリナがここに!？」

『刹那ごめんなさい。私は貴方を死なせたくないの』

「ほう、これは巫女自ら現れるとは。だが、いつまでそうやっていられるかな？我にはわかるぞ。貴様の魂が間もなく燃え尽きることを」

サタン・コマンダーから再び異様なオーラがクアンタに放たれる。

『きゃあー!』

「マリナ!」

苦しむマリナと同調するようにクアンタのコックピットに警告アラームが一斉に鳴り響く。

急激にクアンタのGNドライブの粒子生成量が低下し始めたのだ。クアンタの機動力が一気に低下する。

「GNドライブが緊急停止!?!リポーズとも違う!一体これは!?!」

永久機関ともいえるGNドライブが異常停止したのだ。GNドライブが停止すること等あり得ないことだ。

思わず動揺する刹那に一瞬隙が出来る。それを見逃すサタン・コマンダーではない。再び斧を振り下ろす!

ザクッ!

クアンタの右腕が宇宙を舞った。

刹那とサタン・コマンダーが戦いを繰り広げている頃、悪魔達の宇宙船は地上に攻撃を仕掛けるために攻撃ポイントに向かっていた。

「コマンダー、間もなく攻撃ポイントに到着。破壊砲のエネルギー充填完了まで残り120秒、119秒」

「（了解。こちら巫女と騎士にとどめを刺す）」

サタン・コマンドーのラッシュをクアンタは必死で回避する。右腕を切り落とされながらも、更にGNドライヴの粒子生成量不足で行動が制限されていたが、クアンタにはもう一つの動力を有していた。

それはクアンタに融合しているELS達である。元々ELS達が51年前に量子波に惹かれて地球を訪れたときに、トランザムを使用したMSでも逃げる事が出来ない程の機動力だった。そのELSの特性を動力に切り替えてクアンタを操縦しているのだ。しかし、そこには重大な制限もある。GN粒子を使用する兵器をはじめトランザムやクアンタムバースト、粒子化も行えないのだ。

「マリナ、大丈夫か！しっかりしろ」

『ごめんなさい、刹那。いずれ話をしないといけないと思っていたのに、こうなってしまうました。どうしても私は刹那を死なせたくなかったの』

マリナはクアンタのコックピット、刹那の膝の上に抱かれていた。その体は今にも消えてしまいそうな程透き通っている。

「・・・マリナの気持ちはわかった。もう良い、喋るな」

『刹那、私はもう助かりません。私が悪魔を抑えます。その隙に貴方が悪魔を倒して下さい』

「！！馬鹿なことを言うな！俺がマリナを守る」

だが、再びクアンタはサタン・コマンダーの斧を受けてしまう。回避が間に合わず左膝から下を切り落とされてしまった。

「貴様らの魂は現世に転生できないように消し去ってやる。それにもなく私の部下が、巫女の肉体も吹き飛ばす。これでもうこの世界に再び転生することも戻ること出来なくなるのだ」

「何！まさかフェルトとミレイナ達にも！？」

マリナはついに決心する。

『刹那、私は貴方を愛していました』

刹那の両手から擦り抜けるようにマリナは起き上がると、刹那の唇に自分の唇を重ねる。物質的な重なりではなかったが、刹那は不思議とマリナの温もりを感じ取れた。

「マリナ！やめろ！」

『悪魔よ！私も刹那も貴方たちには屈しません』

マリナは再びクアンタの前に立つ。

宇宙船は遂に攻撃ポイントに到着する。艦首から必殺の破壊砲を展開する。

「目標補足。エネルギー充填完了まで残り60秒、59秒」

『ディステイニー、バスターロックを確認』

ブリッジで悪魔が破壊砲のカウントダウンを続ける。操舵を務める悪魔のコックピットには攻撃目標が表示されていた。

中東、アザディスタン王国。その中のマリナと刹那の別荘である。今、フェルトとミレイナがマリナの蘇生を行っている、その場所である。悪魔達は宇宙空間から破壊砲で粉々に吹き飛ばすつもりなのだ。

『オーバーホールを終えてから試射を行っていないの。エネルギーの逆流があるかもしれないわ。過電圧に注意して』

「エネルギー充填完了まで残り45秒、44秒」

『コンタクト、ダウン』

「40秒、39秒」

『エネルギーチャンバー内で正常に加圧中』

「31秒、30秒」

『ライフリング回転開始、シアアの解放タイミングはディステイニーに一存』

「20秒、19秒」

『ディステイニー、トリガーをこちらに』

「15、14、13」

『当たれえ!!』

「10、9、8、7、6、5!!高エネルギー体接近!?バスター砲だと!うわあ!!」

宇宙空間に巨大な光の玉が現れる。

宇宙船が地上に向けて破壊砲を発射する直前、彼方より飛来した破壊砲バスター砲の砲撃を浴びて蒸発したのだ。

「何!応答しろ!バスター砲だと言うか!?何者だ!」

突如、刹那と対峙していたサタン・コマンダーが狼狽する。刹那とマリナはこの隙を見逃すことはなかった。

クアンタは失った右腕を『呼び戻す』。背中 of 触手が右腕からGNソードVを受け取ると悪魔に向けて突撃する。

「最後の悪あがきか、馬鹿め。返り討ちにしてくれるわ!な、体が動かない!?!」

「トランザム!!」

刹那とマリナの魂の叫びとも言えるトランザムアタックがサタン・コマンダーに一撃を加える。

「ば、馬鹿な、貴様らは運命に逆らったというのが」

クアンタはGNコンデンサーに残っていたGN粒子を全て使い果たしGNソードVもその剣の輝きを失い、砕け散った。

「だが、その代償は、償って貰う！」

サタン・コマンダーは肩から胸に斬られながらもクアンタに向けて最後のオーラーを放つ。

「それは貴様だ！」

「刹那！」

サタン・コマンダーはマリナではなく刹那自信にすべてのオーラーを放ったのだ。

しかし、間一髪の所でマリナが楯になる。マリナの体を鋭い刃と化したオーラーが貫く。

「きゃあああ！」

「マリナ！」

「ク、巫女よ、どこまで邪魔をする気だ。だが、それだけの力を使った今、貴様も間もなく……」

すでにマリナの体の輪郭が消え始めていた。

再びサタン・コマンダーが斧を振り上げようとした瞬間、その腕に一本の剣が刺さる。

これは刹那の仕業ではない。

『お喋りの悪魔というのは聞いたことがありません』

「グ・・・や、やはり、貴様のし、わざか」

刹那は剣が飛来した方向を見ると一機のMSがこちらに接近してくるのがわかった。

「あの機体は？」

そのMSは全身に黄金色の装甲を纏い、背中には二つに折りたたまれた大砲のようなものを装備していた。

黄金色のMS、刹那の脳裏には過去にソレスタルビーイングを壊滅に追いやった国連軍との戦いの中で遭遇した金色のMSが浮かんだが、すぐにそれとは違うことが確認できる。

金色ではなく『黄金』、それも半透明の装甲である。巨大な頭部にはまるで血のように赤い十字架が、両肩にも同様に赤い帯のような物も描かれている。

それは現存するMSには無い独特なオーラを放つMSだった。

「（あれはMSなのか!?!）」

『これを』

脳量子波で少女のような声が伝わる。黄金のMSは腰に下げている一本の剣をクアンタに投げ渡す。

「やめる、やめてくれえ!」

クアンタは左腕で剣を受け取るとサタン・コマンダーに斬りかかり最後の一撃を浴びせた。

サタン・コマンダーはついに胴体を切断され、その体が消滅を始め

る。

「我が負けたというのか・・・騎士よ、巫女を失った貴様にも、せいぜい地獄を味わって貰おう。グハハハ、グエ!?」

サタン・コマンダーは負け惜しみと断末魔を残してついに宇宙から消滅していった。そこには何も残らなかった。刹那はハツと我に返る。

「マリナ!」

クアンタを見守っていたマリナだったが、その表情は暗い。

「刹那、ごめんなさい。『私は貴方を守れなかった』」

「何を言うんだ。マリナが守ってくれたから、俺はこうして生きている。生きているんだ!」

『マリナさん、貴方は、貴方達二人の運命を変えたのです。それは貴方もわかっているはず。だから、だから、そんな悲しい顔をしないで...』

黄金のMSの搭乗者だろう。少女の声でマリナに対して脳量子波で話しかけているのが刹那にもわかった。

「二人とも、ありがとう」

マリナは少しだけ微笑むと両手を広げる。マリナの頭上に光が差し込む。まるで天国への道標のように。

その神秘的な光景に刹那はマリナとの永遠の別れを察知する。

「マリナ！行かないでくれ！」

「刹那、私は貴方に出会えて幸せでした。今度生まれ変わることが出来たら、貴方の側にずっと一緒に……」

『マリナさん！』

その時だった。

今まさに昇天しようとしたマリナの足下に黒く渦巻く空間が発生するとマリナを吸い込んだのだ。

「きゃあああああ！」

「マリナ！」

『これは、次元回廊！？』

クアンタと黄金のMSが一気に動く。

クアンタが左腕を伸ばし、マリナを掴もうとするが、マリナの魂はクアンタの手をすり抜け落ちる。

マリナを飲み込むと空間はすぐに閉じてしまった。

「マリナアアアア！」

刹那の悲しみの叫びがELSを通して全宇宙空間に響き渡った。

そして、黄金のMSの中で少女は見てしまったのだ。空間の底に広がっていた『あるモノ』を。

『（そ、そんな、まさか、あれは、ジョーカー宇宙だといっの！）』

「次のニュースをお伝えいたします。アザディスタン王国では先日、『老衰のため』亡くなられたアザディスタン王国第一皇女、マリナ・イスマイル様の国葬が厳かに行われております。現代の聖女として国内外の人々から愛され親しまれたマリナ・イスマイル様の突然の訃報に多くのアザディスタン国民が悲しみに暮れています・・・」

こうして悪魔達の来襲は『地球連邦軍』の活躍により無事退けられる事となったが、連邦政府は今回の来襲について、公式に発表を行うことはついになかった。

また、アザディスタン王国第一皇女マリナ・イスマイルの死は『老衰』として発表されたのであった。

第1章 離別・完

第5話「刹那、私は貴方を愛していました」(後書き)

次回予告

マリナの死に悲しみに暮れるソレスタルビーイングのメンバー。
そんな中、マリナの国葬に参列した刹那はあの女性に再会する。

別次元に飛ばされたマリナを待ち受ける運命とは？

そして謎の少女が口にしたジョーカー宇宙とは？

GNドライブが停止したELSダブルオークアンタは復活できるのか？

「第2章 MISSION START!」お楽しみに。

後書き。

まずはじめに。いやー長くてごめんなさい。ここまで読んでいただいた読者の皆様、本当にありがとうございます。

オリジナル設定だらけで始めてしまった本作品ですが、導入部分となる第1章がついに終わることが出来ました。

他の作者様だと1話〜2話で終わらせる導入部分をまるまる5話も使ってしまった。20話〜25話位の作品なのに(予定)

次回から、粗筋通り刹那とマリナ様が再びイチャイチャするための物語の始まりになります。

二人がイチャイチャするためにはきっと様々な障害が待ち受けていることでしょう。

あーんな騎士だったり、こーんなMHだったり、えー！な神様かもしれませぬ。予定は未定。

ですがマリナ様はこの後しばらく出てきません。だから二人が再開したときには勢い余って押し倒すかもしれませぬ(どちらが?)

次回投下は未定ですが、第2章も引き続きよろしくお願いいたします。

第6話 ミレイナ・レポート（前編）（前書き）

第1章のエピローグ兼第2章の導入部分は前編・後編に分けさせて貰いました。

泣き顔のミレイナが出てきて面食らう事になる。

「グスン、アーデさん、ごめんなさい、ミレイナも、どうして良いのかわからなくて、ごめんなさい、ヒック」

「ミレイナ、謝らなくても良い、それに泣いてばかりではわからない。少し、落ち着いてくれ」

「ごめんなさい、ちょっと、落ち着く時間を下さい。イック」

「（はあ、この娘は幾つになってもこうなのだろうか）」

「アーデさん、何か言いました？ヒック」

「いや、何でもない。それよりも、そろそろ落ち着いたか？地球で何かあったんだな!？」

「・・・はい、です。実は・・・」

物語はマリナが次元回廊に落ちたところまで遡る。

「マリナアアアア!」

刹那はマリナを助けられなかった自分に絶望していた。
クアンタもサタン・コマンダーとの戦闘で満身創痍だ。

GNソードVも砕け散り、永久機関であるGNDドライブ6号・7号も原因不明の異常停止状態。

サタン・コマンダーによる切り落とされた右腕、左足はELSによる癒着が始まっていたが、内部構造の復旧には時間が必要だった。

『刹那・F・セイエイ』

黄金のMSの搭乗者が脳量子波で刹那に問いかける。とても悲しそうな声色だ。

「・・・お前は一体何者だ！何故俺とマリナを知っている！！」

『私は、貴方達二人がサタンに殺される運命を見届けに来ただけ。だが、貴方達は運命に抗い自分たちで未来を切り開きサタンを倒してしまった』

刹那は驚く。助けに来たのではなく、自分とマリナが殺される運命を見届けに来ただけだと。

「では、何故俺に剣を渡した？この剣がなければ奴は倒せなかった・・・」

クアンタは剣を手に取り、再び黄金のMSに投げ返す。

先ほどから黄金のMSからは敵意を感じることがなかったからだ。だが、全てを信用しているわけではないが。

『貴方達が私を呼び寄せたのです。だからこのディステイニーも貴方達に力を貸す事を了承したのです』

「ディステイニーだと？」

その時、クアンタのリーダーが接近中のMSの機影を捉えた。ラ・

トウールから出撃したGN-X V I 2個小隊である。更に遠くではあったがGN-X小隊に補給するための輸送艦も発見された。GN-X小隊はランザムによるスクランブル発進を行ったためGNブースター胴体内のGN粒子を使い果たし、現在は自機の疑似GNドライブの粒子のみで飛行していた。そのため到着まで多少の間があったが、見つかる厄介だ。

「刹那、話は後で。私に掴まって」

黄金のMSデイスティニーはクアンタに手を差しのべる。

「この宙域から離脱します」

刹那は一瞬躊躇するが、すぐに意図が理解できた。

「こちら刹那・F・セイエイ、リジエネ応答しろ。アンノウン（宇宙船）から出撃した『艦載機』は全て撃破した。」

刹那はヴェーダのリジエネに通信を入れるとすぐに返答が来た。

「刹那・F・セイエイか？随分やられたようだな。だが、宇宙船の方も撃破したと報告が入っている。詳細は判らないがとりあえず危機は去ったようだ」

「了解した。それではこれより『友軍機』と共に帰投する。後の処理は任せる」

「・・・わかった。協力に感謝する」

リジエネとの通信が切れる。

「刹那？」

「お前も地球連邦軍『所属機』だろう。コソコソ逃げる必要はあるまい。だが、お互い姿を見られるのはまずいようだな」

「！・・・確かにそうね」

刹那は先ほどのリジエネとの通信の最中に、デイスティニーをヴェーダに照会していたのだ。

勿論、リジエネも照会内容について把握していたが、今はそれについては触れなくておくことにした。

クアンタが損傷を免れた左手でデイスティニーの手を掴む。

デイスティニーのパイロットはクアンタが掴むのを確認するとデイスティニーを一気に加速させた。

刹那もその機動力に呆気にとられる。あっという間にGN-X V Iの機影がレーダーの範囲外に消えていったのだ。

「デイスティニーのパイロット、質問して良いか？」

「はい。全てを答えることは出来ませんが」

「あの悪魔は一体何だ？サタンコマンダーと名乗っていたが機械ではなかった」

「そう・・・魔界から現れた本物の悪魔と言っても信じてくれるかしらっ」

「・・・今は、信じらそうだ。だが、どうしてマリナの命を狙った

「退魔の巫女と奴らは言っていた」

『それは私の口からはお答えすることが出来ません。ごめんなさい』

「それではマリナはどこにいった？あの宇宙空間を知っているのか？」

『！（やはり彼もジョーカー宇宙を見ていたのね）・・・ごめんなさい』

デイスティニーのパイロットは小さな声で刹那に謝る。刹那はその声に何か悲しみがこめれているように感じる。

「（このパイロットと関係のある宇宙なのか）」

刹那は先ほどからクアンタを曳航するデイスティニーを見つめていた。

GN粒子の放出も発見できず、地球上のどのMSとも違う構造。巨大な頭部や装甲の彼方此方に施された装飾の数々。そして半透明の黄金の装甲。

対話の道中で幾つもの人型機動兵器と遭遇、時には望まない戦闘に巻き込まれる事もあったが、そのどれとも違っていたのだ。

刹那はクアンタが収集するデイスティニーの情報に目を見張る。

「（この機体の動力源は一体・・・）」

『刹那、そんなに見つめられると恥ずかしいです』

「あ、すまない」

デイスティニーのパイロットからの不意の一言に刹那は慌ててしま
う。

『刹那、貴方はこれから選択を迫られます。マリナさんのお陰で折
角手に入れた命を大事するのか、それとも命を捨てる覚悟があるの
か』

「それは、どういう事だ？」

『マリナさんを助けるためには私達の世界に足を踏み込まないとい
けません。ですが今の貴方では助け出すことは不可能です。それは
自殺行為に等しい』

「な!？」

刹那はデイスティニーのパイロットの言葉に驚愕した。

デイスティニーは加速をやめてクアンタの手を離す。地球が見える
距離にまで来ていた。

『私は強制しません。私達の世界に足を踏み込むのも貴方の自由。
貴方に時間を与えましょう』

「お前は一体！」

『私の正体を知ってしまえば後戻りは出来なくなります。今は私は
貴方の味方です。私としては貴方を死なせたくはありません。これ
は本心です』

デイスティニーが距離を取り始める。

「待つてくれ！」

だが、その時クアンタに通信が入った。

「刹那！お願い、返事をして」「セイエイさん！セイエイさん！」

相手はフェルトとミレイナだ。

『刹那、ここから大気圏に突入すればアザディスタン上空に降下出来ます。次に会うときまでに答えを用意しておいて下さい』

刹那がディステイニーのパイロットを呼び止めようとするが、ディステイニーはすぐに別ルートで大気圏に突入してしまった。現在のクアンタでは追跡することも出来ない。

「(トレースも計算済みか。リジエネ、聞こえているな?)」

「(刹那・F・セイエイ、聞こえているよ。あの『機動兵器』の追跡はヴェーダが引き受けた)」

「(頼む)」

刹那はリジエネとの通信後、フェルトとミレイナに応答する。

「こちら、刹那・F・セイエイ。二人ともどうし」

刹那はそこで言葉を止めた。刹那の脳裏にマリナが謎の空間に吸い込まれ消えていった光景がフラッシュバックする。

「フェルト、ミレイナ、すぐにそちらに向かう」

刹那はクアンタを大気圏に突入させアザディスタンを目指す。

刹那は、クアンタを着陸させるとすぐにコックピットハッチを開き外に出る。向かった先は……

「マリナ！」

マリナと暮らしていたあの一軒家だ。

刹那は家に入ると一目散に治療が行われていたマリナの寝室に向かう。アザディスタン王国から派遣された医療スタッフも到着していたが皆、沈痛な表情で刹那を出迎えた。周りからはすすり泣くような声も聞こえる。

「刹那……」「セイエイさん……」

寝室に入るとフェルトとミレイナが刹那に駆け寄ってきた。

二人とも泣きはらしたのだろう目が真っ赤だ。

刹那は二人を優しく抱きしめるとベッドに寝かされているマリナの元に向かい、ついに対面する。

「ごめんなさい、刹那。私達、マリナさんを、助けられなかった」

「私もイスマイルルさんの手を握って、意識がなくなりそうな度に何度も何度も声をかけて、その度にイスマイルルさんは握り替えしてくれていたのに……」

刹那はもう一度二人を優しく抱き寄せる。

「俺はマリナだけではなく、フェルトとミレイナにも助けられていたのか……」

刹那がポツリとつぶやく。

「え？」

「刹那、息をひきとる前、最後にね、マリナさんが見えないはずの目を開けて微笑みながら私達にこう言ったの」

「『二人とも、ありがとう』って」

「（！！フェルトとミレイナにもマリナは……）」

刹那はマリナを見つめる。その顔は微笑んでいるように刹那には見えなかった。

刹那の頬に何年ぶりかの暖かいものが伝わる。

「マリナ……」

数日後、アザデイスタン王国からマリナ・イスマイルの死亡が公表された。死因は『老衰』とされた。

連邦政府には地球連邦軍MSと悪魔達の戦闘は報告されていたが、すぐに情報統制が行われた。また、サタンコマンダーとの戦いの最中に起きたマリナ失踪に繋がる不思議な事象については報告されていない。

マリナの死は国内外にショックを与えることになるのだが……。

刹那はマリナの国葬に参列するためアザディスタン王国首都に来ていた。

フェルトとミレイナも参列を希望していたが、刹那の話とクアントの状態を見てキャンセルすることになる。

現在クアントは秘密ドッグに運ばれミレイナ達の分析が行われているはずだ。

マリナの葬儀には国内外から多くの参列者が集っていた。国民だけではなく、マリナの元から巣立っていった多くの子供達や、アザディスタン復興に際してマリナに共感して協力してくれた国や企業など様々な人々が参列していた。

そんな中、刹那は不思議な気持ちでマリナを見送っていた。

マリナの肉体は目の前の棺に納められていたが、マリナの魂は別の宇宙に飛ばされてしまったからだ。

「（俺は果たしてマリナの魂を救い出すことが出来るのだろうか・・・）」

葬儀が終わり刹那は王宮の一室に足を運ぶ。そこには今、刹那がどうしても会わないといけない人物が待っていたからだ。

マリナの元に一緒に住むように進言してくれた人物。そしてマリナの親友だったメガネの似合う女性。

刹那は扉をあけるとその女性は椅子に座りながら刹那を待っていた。シーリン・バフティヤールだ。

『こんにちは、刹那・F・セイエイ』

「シーリン・バフティヤール、お元気そうで何よりだ。」

彼女は地球連邦議会の議員時代から中東方面特使としてマリナを支援していた。高齢となった今でも貧困国の援助等で精力的に活動するなど、ミレイナの会社との接点も少なくはなかった。

『こんな機会で貴方に会いたくはなかったけど、話とは何かしら？』

「俺は・・・マリナを助けることが出来なかった。許せるものではないと思うが許して欲しい」

刹那はシーリンに対して深々と頭を下げる。突然の刹那の謝罪にシーリンは困惑するのだが

『貴方は何を馬鹿なことを言っているの。そんな事はないわ』

「だが、事実だ。俺はマリナに助けられ、こうして生き延びることが出来た」

『マリナは自分の運命を全うしたの！貴方に責任はないの』

「だが」

『刹那・F・セイエイ！それ以上続けるのなら私も怒るわ。貴方はマリナの気持ちを考えてことがあって！』

一向に話の见えない刹那に対して、ついにシーリンが声を上げる。刹那と悪魔達の戦闘記録は連邦政府の極一部しかアクセスできないからだ。

それでもマリナの魂が突如消えたことについては報告されていない。

『刹那が地球に帰還してマリナと一緒に住むようになって、どれだけ彼女が幸せになったのか貴方にはわからないの!』

『貴方が地球から遠く離れたELSの母星で対話を行っていた50年、彼女も貴方と同様に戦っていたの』

「それは理解している」

『彼女は一個人の幸せを放棄して一生をアザディスタンの復興に捧げたわ。苦しい道を自ら歩んできたのは彼女も一緒』

事実マリナは女性として一人の母親ではなく国民の母親になることを選んだため生涯独身を貫き通した程だ。

『そして、多くの協力や賛同を得て、やっとアザディスタンが復興したの』

『その代償に彼女が失ったものも決して少なくなかった。復興のため彼女は個人の幸せを全て注ぎ込んだのよ』

『だけど、神様はちゃんと彼女を見ていたわ。最後の最後で彼女に素晴らしい幸せを与えてくれた』

シーリンは刹那の顔をキツと睨むが、すぐに優しい顔になる。

『それは貴方よ。刹那・F・セイエイ。神様は貴方を彼女の元に帰してくれた。だから、もうそんな事は言わないで頂戴』

流石の刹那も何も言い返せない。

『だけど、ちょっと意地悪な神様ね。50年なんて言わずに5年でマリナの元に帰してくれても良いのに』

「重ね重ねすまない。許してくれ」

『！・・・もう、貴方は。私では駄目ね。ほんと、マリナに怒って貰って欲しいわ』

刹那と話をすると大抵こうだ。話が食い違つて口論なるか、一方的にシーリンに怒られるパターンになる。

そしてマリナが仲裁という介入を行い、シーリンはその度にマリナと刹那の夫婦漫才を見せつけられていたのだった。

それを思いだしたのだろうか、シーリンは目尻にたまつた涙をハンケチで拭い去る。

『マリナの血筋について？』

刹那は先の悪魔達との戦闘でサタンコマンダーが口にしていた『退魔の巫女』についてシーリンに尋ねる必要があつた。

だが、シーリンに戦闘の様子を話すわけにはいかないし、それこそ『マリナの魂が謎の空間に吸い込まれました』とは口が裂けても言えなかつた。そのためマリナの周辺から質問する。

「マリナは皇女に選ばれる前は普通の家庭で育つたと聞いていたが」

『ええ、確かにそうよ。彼女は元々は音楽が好きだったから大学でも音楽を専攻していたわ』

「だが、王制復活に伴い王族の血を引く彼女は皇女に選ばれた」

『何が言いたいの、刹那？』

シーリンは怪訝な顔をする。

「現在のアザディスタン国王はマリナの血筋とは違う」

『・・・確かに違うわ。今の国王は所謂分家ね。マリナは姉妹が居ないからマリナの家系は途絶えてしまったわ』

シーリンは刹那の顔を見るとため息をつく。

「？」

『何でもないわ。続けて』

「マリナの血筋について何か他に話はないのか？例えば特別な血筋だったとか・・・」

その瞬間、刹那にはシーリンのメガネが一瞬光ったように見えた。

『・・・例えばどんな？』

何かシーリンの表情が硬い。刹那も感じ取り慎重に言葉を選びながら話をする。

「例えば、王族の血筋というがマリナは女性だ。女性が政治に関わる事が許されなかったアザディスタンで何故マリナが皇女として役目を果たさないといけなかったのか。困窮した経済、保守派と改革派の対立、彼女が背負うには重すぎる責務だった。他にも理由があるのではないかと思っただけだ」

『刹那、マリナを買い被りすぎよ。彼女は王族の血筋だっただけ。他には理由はないわ』

「……そうか」

『まっつよ』

シーリンは年老いたとは思えない眼光で刹那を睨む。だが、以外にも刹那の方から視線を外す。

刹那はシーリンの側に行き、一片のメモを手渡す。

『これは？』

「俺の連絡先だ。しばらくアザディスタンを離れないといけなかった。何かあったらここに連絡して欲しい」

『……わかったわ』

「シーリン・バフティヤール、今日は久しぶりに会えて嬉しかった」

『私もよ。マリナと三人だったらもっと良かったけど』

刹那はシーリンを優しく抱きしめると部屋の出口に向かうがシーリンに呼び止められた。

『まっつよ』

「何だ？」

『刹那、一つだけ忘れないで置いて欲しいことがあるの』

「？」

『それは、マリナが独身を貫き通したこと。彼女は確かに女性としての幸せよりも国の幸せを選んだ』

『だけど、他にも理由があったのよ』

「・・・理解しているつもりだ」

刹那は力なく言い残すと退室していった。シーリンはそんな刹那の後ろ姿を見て悲しい気持ちになる。

『（マリナが選んだこととはいえ、どうして神はマリナの血を残すことを許されなかったのだろうか。マリナと刹那ならどんな試練でも乗り越えられたかもしれないのに・・・）』

朝靄の中、刹那はスメラギ・李・ノリエガに会うため、とある施設に向かっていた。そこはドーバー海峡が良く見える丘の上に建っている。

刹那は乗ってきたバイクを駐輪すると施設の正面玄関ではなく、面会者用の入り口から施設に入った。

面会の手続きを済ませるとスメラギの部屋に向かう。そう、ここはスメラギが入院している介護施設である。

「（リーサ・クジヨウ・・・この部屋か）」

ソレスタルビーイング解散後に再び元の姓であるリーサ・クジヨウに戻ったスメラギであったが、戦後ソレスタルビーイングでの評価や（政府の宥和政策の一環でもあったが）数度の大戦を阻止した功績を称えられ外宇宙航行艦にまでその名が付けられた。

しかし、現在はこの介護施設に入所している。

スメラギの病室は個室ではなく相部屋だった。刹那は病室にしては随分厚い扉を開けると部屋に入った。

「おはよう、刹那・F・セイエイ。だが、女性の部屋に入るときはノックをするのが礼儀というものだ」

スメラギのパートナーである女性がベッドから上体を起こし刹那を注意する。

刹那・F・セイエイと呼ぶこの女性とは……。

「おはよう、カティ・マネキン。すまない。俺はいつもノックを忘れてしまうな」

スメラギ・李・ノリエガの好敵手であり、良き理解者でもある地球連邦軍元准将カティ・マネキンである。現在は二人仲良く示し合わせたように入所していた。刹那が地球に帰還した時に初めてスメラギの病室を見舞いに来たときもカティに怒られたものだ。シーリン同様、刹那の正体を知る数少ない人物である。

「まあ、私もクジヨウも慣れたがな。それよりも、マリナ皇女が亡くなれて……お前も辛かっただろう」

「心配させてすまない……それよりもスメラギ・李・ノリエガは？」

刹那はスメラギのベッドが空になっている事に気がつく。

「先ほどまで居たんだがな。クジヨウは『朝の散歩』だろう。悪いが探してくれないか？」

「彼女はまた抜け出したのか」

スメラギは朝食が終わると度々病室を抜け出してはカティを困らせていた。逃亡には車椅子を使っているのだが、ミレイナ製のGN型番で始まる車椅子である。機動性には定評があった。

しかし、刹那も慣れたものでスメラギの逃亡先はわかっている。海がよく見える屋上だ。

「やはり、ここに居たのか。おはよう、スメラギ・李・ノリエガ」

『おはよう、刹那。遅かったわね。病室の窓から貴方がバイクで来るのを見つけたから、ここに来たのよ』

刹那はスメラギの車椅子を押しながら屋上を回ることにする。

『フェルトから簡単な話は聞いているわ。クアンタとマリナさんの件で私に会いに来たのね？』

「それもあるが、スメラギ・李・ノリエガの顔も見なかった」

『あら、お上手。マリナさんの教育の賜ね。こんなシワシワのお婆さんの顔が見たかったなんて、冗談でも嬉しいわ』

刹那は屋上に設けられたベンチに座りスメラギと相對すると、マリナの診察からサタン・コマンダーとの戦闘、黄金の機動兵器『ディ

ステイニー』との遭遇まで、一通り報告した。

「クアンタの状態だがGNDドライブが停止した状態だ。ミレイナの言葉によると『凍結された』ようだと言っていた」

『私もフェルトから聞いたときは信じられなかったけど、刹那の今の話を聞いたらGNDドライブの異常停止も何だか信じられる話ね。悪魔が出てきてマリナさんを狙うなんて、宇宙人が現れるSFの世界から一気におとぎ話の世界へ吹っ飛ばされた感じよ』

刹那はスメラギの言葉に内心苦笑した。対話の道中で様々な世界や文明を見てきた者としては、自分の中では『それが日常』になりつつあったからだ。

「クアンタのGNDドライブは度重なる改良で互換性が無くなっていく。もっとも載せ替えようにもツインドライブ専用のGNDドライブも簡単には調達できないがな」

近年GNDドライブが民間企業でも製造できるようになってはいたが、擬似ではない純正GNDドライブは連邦軍でも極わずかししか配備されていない状況だ。更に純正ツインドライブ対応となると絶望的だ。

『それと、マリナさんが『居なくなってしまった』この状況で、悪魔達がもう地球には来ないとは誰も保証できないわ』

「悪魔達と戦えるMS、パイロットは極わずかだろう。いや、現在の地球連邦軍には居ないかもしれない」

『……刹那は悪魔達が言っていたマリナさんの加護を信じるの？』

「信じるも何もマリナに助けられていなかったら俺は悪魔に殺されていた」

『そうか、マリナさんの加護を受けられないこの状況ではお先真っ暗ね』

スメラギは溜息をつくとき空を見上げる。

『マリナさんはこの宇宙のどこかに居るのかしらね』

『それで『退魔の巫女』についてだけど何かわかった？』

「ヴェーダにも該当する情報は見つからなかった」

『そうなると古い民間伝承とか土着信仰かもしれないわね』

刹那は先日シーリン・バフティヤールに会った際に何かを隠している雰囲気を感じてはいたがスメラギには報告しなかった。刹那はシーリンから話してくれるだろうと信じていたからだ。

「俺達を助けてくれた黄金の機動兵器ディステイニーだが、こちらについてはわかったことがある」

第6話 ミレイナ・レポート（前編）（後書き）

次回予告

ミレイナからティエリアへの報告は続く。

刹那達が掴んだディスティニーの情報とは？

一方その頃、刹那達ソレスタルビーイングを調査する謎の組織があった。

後書き

次回、第7話はFSS、ガンダム00双方のファンからブーイングが来るかもしれませんが、物語上どうしても必要なので書かせて貰います。

それにしても、この物語には女性が多く登場します。ここだけ見れば昨今のゲームやライトノベルの展開なのでしょうが皆高齢です。ガンダム00勢では80代は当たり前前、最年少のミレイナでも60代です。ELS大戦後は平均寿命が100歳位まで延びていると思っただけだと助かります。

FSS勢は年齢3桁の方が多いですがジョーカー太陽星団の人々の寿命は地球人の年齢の3〜4倍の設定だと思いましたが、ガンダム00勢とFSS勢で年齢のバランスは何とかとれるかなあという所です。 約2名除く。

第7話 ミレイナ・レポート（後編）

そこは、とある建物の屋上。

郊外が見渡せる屋上でひとりの少女が空を見上げながら嘆いていた。

『（やはり、刹那は助けに行くのでしょうか。だが彼が生還できる可能性は低い）』

少女は空を見上げながら、死地に赴く剣士を憂う。

『（それとも二人はあそこで運命を受け入れた方が良かったのでしょうか）』

『（いいえ、それは駄目。死んでは何もならない。あそこで死んでいたら彼らの運命は終わっていた）』

少女は空から地表に視線を落とす。眼下には町並みが広がっている。

『（生きているからまだ運命は続けられる。でも、彼らのこれから先の運命は予測が出来ない。・・・それは私も同じ・・・）』

少女は町並みを見渡しながら考える。

『（私が420年前、初めて地球を訪れた時から運命が変わり始めていたのかもしれない）』

「お嬢様〜！」

少女は声のする方向に振り返る。スーツの女性が屋上の出入り口か

ら少女の方に駆け寄ってくる。

「お嬢様、お待たせいたしました。会議も終わりましたので、デブリーフィングを始めたいと思います」

「はい、わかりました。イエッ」

スーツの女性が少女の唇に人差し指を押し当てる。

「『お嬢様』、私は『今は』ソーニャ・カーリンです」

『ふにゃ〜ごめんなさい。お姉様』

「お嬢様！」

『ひ〜、ごめんなさい。カーリン部長』

女性は少女を建物の入り口に促す。

『（私の本来の運命では、2185年に目覚め、ソーニャ・カーリンと『大尉』と出会うはずだった）』

『（だが、私は100年近く早く目覚め『彼』と出会ってしまっ。2188年に『彼』の同士の探査船と一緒に宇宙に上がる）』

少女は傍らを歩くスーツの女性を見る。

『（そして、今、私の側にいるソーニャ・カーリン部長は『私の姉』だ）』

「お嬢様？私の顔に何か？」

『カーリン部長はいつ見ても綺麗だな、って思って見ていました』

「あら、社長みたいな事を言っんですね」

『（うー、あの顔でそんな事言うのは、ムツツリスケベの証拠です）』

「ところで、お嬢様、一つお伺いしても良いかしら？」

『はい？何でしょう？』

「どうしてデイスティニーを『金の剣』としてヴェーダに登録させたのかな？って」

『昔、地球でお世話になった時、私のお世話をしてくれた方々がデイスティニーを見てこの名前を付けました』

「そうだったの。私はあの時のコードネームだと思っていたわ」

「……金の剣。それは星団歴2998年惑星ジュノーでのコーラス王朝とハグーダ帝国の最終戦争において、『銀の剣』と共にデイスティニーが投入された際のコードネームだった。

『考えることは、皆同じなのかもしれませんね』

「クス、案外そうかもね」

少女とスーツの女性は社長室の扉を叩く。

「ログナー社長、ラキシスお嬢様をお連れしました」

「ソレスタルビーイング『所属機』だと!？」

外宇宙航行艦スメラギのティエリアの船室。

ミレイナの報告にティエリアが驚きの声をあげた。

『はい、です。ディステイニーはヴェーダにソレスタルビーイング所属機として登録されていました』

ティエリアは頭を抑えながら自らに冷静になるように言い聞かせるが、明らかに動揺していた。

「ミレイナ、待ってくれ。ヴェーダを掌握している僕やリジエネでも、そんな機体は知らない!」

ティエリアはヴェーダに計画されていなかった『トリニティ』による武力介入を思い出させたが、ミレイナの説明で更に驚くべき事実を知ることになる。

『これは巧妙に仕組まれた、ある意味システムトラップです。トラザムシステムとツインドライヴシステムを私達に伝えた、あのシステムトラップにそっくりです』

「まさか、イオリア・シュヘンベルグか!」

『流石アーデさん、大正解です! ややこしい話ですが、ディステイ

ニーを運用する組織はヴェーダに何らかの方法で不正アクセスし、ディステイニーを地球連邦所属機、コールサイン「ゴールド・ソード、金の剣」として不正登録しました。実は、これがシステムトラブルのトリガーになっていました。ヴェーダには既に「ゴールド・ソード、金の剣」は登録されていたのです」

「な、そんなことが!?だが、地球連邦軍のMSが機体を照会したときは『地球連邦軍所属機』として照会されたという記録もある。それに!」

テイエリアが手元の端末からヴェーダにアクセスして『金の剣』を照会するが、やはり『地球連邦軍所属機』とだけ照会され簡素な情報しか表示されない事をミレイナに伝える。

『アーデさん惜しい!です。ヴェーダはディステイニーの情報について上書き禁止、その代わり重複登録するようになっていました』

「重複登録だと?それでは、どうやってオリジナルの情報にアクセスする?そうか、GNDライブ!」

『またまた大正解。やっぱりアーデさんは素敵です』

「ミレイナ、茶化さないでくれ。だがあの時クアンタのGNDライブは壊れていたはずだ」

『ELSダブルオークアンタのGNDライブは原因不明の凍結状態ですが、6号、7号は死んではいません。ダイアグノスから問い合わせればちゃんとお返事します。正確にはGNDライブによる認証だけではなく、IFF敵味方識別装置の信号とは違う信号による照会方法を使うことではじめて正しい情報にアクセスが可能になりま

す。これらの条件が揃わないと、不正アクセスで重複登録された偽の情報か、まったく情報が表示されません」

刹那が、デイスティニーと共に撤退する直前、デイスティニーから発せられる地球連邦軍が採用しているIFFを使ってヴェーダに照会していた。しかし、刹那は照会情報に違和感を感じていたのだ。ダブルオークアンタもリジエネの手により地球連邦軍MSとして偽装登録されていた。見る人が見ればそれが偽装だとわかる。デイスティニーの照会画面もダブルオークアンタ同様に偽装されていることに刹那をはじめリジエネも気がついていたのだ。

「相手も特殊な機体識別信号を発信しているというが、デイスティニーにはGNドライブは搭載されていない」

「発見できたのは偶然だったのです。グレイスさんが、ELSダブルオークアンタが収集したデータの解析にヴェーダを利用したことで偶然見つけた事なのです。データの一部がデイスティニーを照会するためのキーになっていました」

それは、偶然の発見だった。秘密ドッグに搬送されたクアンタだったが、コックピット内部で戦闘記録や収集したデータを解析していたフェルトが、クアンタに搭載されていたヴェーダのターミナルユニットを経由した調査を行っていたところ、突如クアンタのコックピットにデイスティニーの情報が表示されはじめたのだ。

「照会するためのキー？」

「ELSダブルオークアンタの収集したデータにデイスティニーの両脚から発信される不可解なノイズを確認できました。ELSダブルオークアンタからヴェーダにそのノイズの解析を依頼したところ

「デイスティニーの情報が表示できたわけです。それがこれです」

「ティエリア側のモニターにデイスティニーの情報が表示される。」

「情報の登録者は、イオリア・シュヘンベルグ！」

流石のティエリアもいい加減驚き疲れる。イオリア自らがデイスティニーを調査して登録したことになるのだ。

「さて、ミレイナ！そうなるとデイスティニーは2000年以上前の機体になるぞ」

「私もグレイスさんも何度もデータを検証しました。こちらのデータも偽造されたモノじゃないかと思っただけでも調査をしましたが、偽造されたデータという証拠は見つけられませんでした……。デイスティニーは本当に2000年以上前から存在している可能性が高いです」

「……」

ミレイナの回答にティエリアも言葉に詰まる。

「悔しいですが、デイスティニーはパパ達を作ったガンダム以上です……。」

そう言うとミレイナは黙ってしまった。ミレイナはすでに自分なりにデイスティニーの分析を終えているのだろう。両親が遺した最高傑作と言えるELSダブルオークアンタを遙かに凌駕するデイスティニーの前に自分の非力さを思い知ったのだった。

だが、ミレイナは知らない。人間が作った対話のためのモビルスー

ツ・ガンダムと、神様が一人の少女にせがまれ、神様本人も知らず知らずに強力に作り上げてしまった黄金の巨人・デイスティニーを比べること自体が間違いであることを。

ティエリアもミレイナの心情を察していたが、ミレイナにかける言葉を見つけられなかった。

デイスティニーに関する情報は、デイスティニーのパイロットからのヒアリングと、イオリアの独自調査報告という内容だった。ティエリアは報告書を読みすすめる。

西暦2090年、イオリアはバルト海の船旅の途中、『必然』的に海底に鎮座していた黄金に輝く巨大人型ロボットを発見する。

翌年イオリアとその友人は私財を投じ、巨大ロボットをサルベージしイオリアの隠れ家のドッグに回航することになる。

巨大ロボットは海の底に沈んでいたはずであったが、その表面には一切のフジツボや貝類が付着していないどころか錆等も発見されなかった。

イオリアと親友であるE・A・レイが本格的な調査を開始しようとした矢先、巨大ロボットの頭部から一人の少女が姿を現したのだ。

「デイスティニーの頭部に記されていた情報？これは地球の文字なのか!？」

デイスティニーの細部には漢字・アルファベット・数字など地球で使われている文字が記されていたのだ。

だが、イオリアとE・A・レイはデイスティニーは地球外で作られたことを直感する。

「少女の名前はラキシス、この巨大ロボット・デイスティニーのパイロットか」

『とても可愛い女の子です』

モニターには栗色の髪の毛をしたショートカットの少女がイオリアとE・A・レイに囲まれた写真が表示されていた。

「巨大ロボットは、モーターヘッド、ナイトオブゴールド・ラキシス。別名をデイスティニー・ミラージュ。2988年惑星デルタ・ベルンでロールアウトされる。設計者は天照帝、アマテラスのミカド副座式だがラキシス単体でも行動可能？」

「（追撃神？ミラージュとは？幻想？惑星デルタ・ベルンというのは刹那の報告にあった、宇宙空間にあるのだろう。また天照帝と記されているが、だからと言ってこの人物が地球出身の人間ではないだろう・・・）」

ティエリアは次にイオリアがラキシスとの会話から得られた情報に目を細める。

「1945年、デイスティニーと共に地球を訪れる。当時、第2次世界大戦に枢軸国側に参戦後、再び宇宙に戻るその時までナイトオブゴールドと共にバルト海で眠りについた！？そして、2090年イオリアと出会うために自ら目覚めた？イオリアが必然と言っていたのはこのためか！」

次にデイスティニーの簡単ではあったが性能が記されていた。

「全高およそ17m、MSと同じ大きさだが重量は144tか。出力は推定3兆3千億馬力以上！？信じられん・・・桁間違いではないのか？」

「主力兵装はスパッド？とスパイド2本？スパッドは光学サーベルのような物か？スパイドは実剣か。刹那に投げ渡したのがスパイドか」

ここでティエリアはディステイニーの兵装に疑問を感じる。

「ディステイニーにはビームライフルのような射撃武器は見あたらない。そしてレジエネの報告にもあった巨大な大砲、バスターランチャー。アンノウンを蒸発させるほどの破壊力を持っているようだ。射撃兵装がこれしか無い。この機体は格闘戦に特化しているのか？」

ティエリアはディステイニーの桁違いのスペックに呆れていると

『ディステイニーはエンジンも凄いです』

「うわぁ！」

いつの間にか復活したミレイナがティエリアの分析に割り込んできた。

『先ほどのアーデさんにノイズというか信号の発信源は両脚だと話をしましたが、ディステイニーの両脚にエンジンがマウントされていました』

「まさかツインエンジン！？」

『デュアルツイスターというシステムらしいです。更にディステイニーにマウントされているエンジンはGNドライブのように半永久

機関のようです。頭部にも同様の小型エンジンが搭載されているようですが、イオリアの調査でも用途は不明でした」

「・・・ミレイナ、辛いだろぅが、ミレイナがディステイナーがガンダム以上と判断した根拠を話してくれないか」

『はい、ラ・トゥールから発進したGN-X小隊を追い越した機動性や、クアンタを地球まで曳航する機動力も凄いです、それを裏付ける記録がヴェーダに残っていました。低軌道ステーションの観測カメラに地上から飛び立ってくる物体が撮影されていました。ジヤミングにより詳細はわからないのですが、ミレイナはディステイナーが地球上から自力で飛び立ってきた時の映像だと判断しました、です』

「だが、高々度迎撃パッケージなどの追加兵装の可能性も考えられないか？」

事実、ソレスタルビーイングもキュリオスガスト等が大型GNバーニアを装備して高々度迎撃ミッションを行っている。また、単独での大気圏離脱も可能であった。

『機動力だけなら確かにGNバーニア、GNブースター等の下駄を履かせる等の方法がありますが、それでもGNブースターの三倍の性能は無視できません。次にこの映像です』

ミレイナがテイエリアに見せた映像は、クアンタのカメラアイが捉えた映像だった。肩から胸をGNソードVで斬られたサタン・コマンドーが斧を振り上げて最後の反撃を試みる場面だった。

『これは後でELSダブルオークアンタの記録を調べてわかったこ

となのですが、ここでセイエイさんも反応してELSダブルオーク
アンタの操縦を始めています。しかし、それよりも速くセイステイ
ニーの実剣が悪魔に刺さります』

「！」

『この事から、セイステイニーとセイステイニーのパイロットも、
セイエイさんとELSダブルオークアンタを遙かに凌駕している事
がわかります』

「……」

『……以上がヴァステイ家完敗の理由です』

再びミレイナがしくしくと泣き出してしまった。

泣き出したミレイナを余所に、ティエリアはここで現在のセイステ
イニーのパイロット誰なのか疑問になった。

「（刹那の話では女性の声だと言っていた。まさか彼女は2000年
以上生きているのか？）」

「（彼女は宇宙にあがるその時まで、とイオリアに語っていたが、
彼女は何時宇宙にあがった？今日まで地球に隠れていたとは思えな
い。すると……）」

『……アーデさん、乙女が泣いているのに放っておくのは失礼で
す！』

どうやらティエリアの気を引くための嘘泣きだったらしい。

「ミレイナ、エウロパのミッションについて再度ヴェーダに問い合わせしてくれないか？」

エウロパとは西暦2187年木星有人探査計画のため地球を旅立った大型船だ。だが、計画は失敗する。しかし、それは地球側で偽装した情報だった。本当の目的は木星の高重力下でGNドライブを開発することだった。西暦2314年にELSがエウロパに擬態して地球に襲来することになるのだが……。

『ほえ？……はいはい、わかりました。アーデさんはいつもマイペースですね。』

「ああ、わかっていると思うがELSダブルオークアンタ経由と通常の二通りの方法で頼む。そうしないと……。」

『（今の「ああ」ってどっちの意味ですか！？）トラップを発動させる必要があるということですね』

すぐにミレイナから答えが返ってきた。

『アーデさん、特に情報の差異は見あたりませんですう……』

「気のせいだったか……。」

『あ、ちょっとまってください。パイロードの情報がELSダブルオークアンタ経由だと違いがあります』

ミレイナが何かを発見したようだ。

『ELSダブルオークアンタ経由の情報ではエウロパのパイロード

が150t程増加されています。これってまさか・・・」

「恐らくミレイナの考えているとおりだと思う。やはり、彼女、いやディステイニーはエウロパを利用して宇宙にあがったのか！そして何らかの理由があって再び地球に戻ってきた」

『アーデさん、ちょっと待って下さい。ラキシスさんは100年以上も生きています！』

「ミレイナ、地球の常識で考えない方が良いでしょう。1945年から2090年まで海の底で眠っていた人物だ。それに1945年以前はどこかに別の宇宙を旅していたらしい」

『それではラキシスさんの年齢って・・・』

「失礼な言い方だが、4桁以上もありえるかもしれん」

『そんな！？ラキシスさんは、どうみても10代の少女にしか見えません』

同じ女性としてミレイナは絶句する。そもそもラキシスが女性なのかという問題もあるのだが。

「しかし、今頃になって地球に現れた？何のために？彼女は刹那とマリナ・イスマイルの死を見届けにと言っていたが・・・うん、ミレイナどうした？」

『アーデさんは、ラキシスさんやディステイニーの事を考えるのが楽しそうですね。ミレイナは不満です。アーデさんは、ガンダムが負けて悔しくないのですか？』

先ほどから黙々とデイスティニーの情報を精査し考察するティエリアに対してミレイナが口を尖らせ不満をぶつける。

「なんだ、そんなことか。それで不機嫌だったのか」

「なんだとは何ですか！アーデさんはそれでもガンダムマイスターですか！」

「僕もイアンやミレイナが手塩にかけて作ったガンダムが負けて悔しいさ。だが、ミレイナ、君はガンダムを絶対無敵のスーパーロボットと勘違いしていないか？」

「え？」

『驚いたわ。イオリア自らの情報登録とは。それにしても、パイロット混みでガンダム以上の性能とは・・・頭が痛いわね』

場面は再びスメラギの介護施設。

「ラキシスが『自殺行為』だと言っていた理由がこれだ」

デイスティニーの情報には、ラキシスからヒアリングした惑星デルタ・ベルンをはじめ、ジョーカー宇宙やジョーカー太陽星団についての情報も記されていた。

デイスティニーはジョーカー太陽星団ではモーターヘッドという戦闘兵器に属している事がわかった。

刹那もスメラギもマリナが飛ばされた宇宙は、デイスティニーが製造されたジョーカー宇宙、それもジョーカー太陽星団だと睨んでいた。そこではデイスティニー以外のモーターヘッドもいるはずだ。万が一クアンタとモーターヘッドが対峙した場合、最悪のシナリオも考えられる。

GNドライブ6号・7号が停止し、ELSのみの動力ではクアンタがモーターヘッド相手に太刀打ちできないのは誰の目にも明らかだった。いや、そもそもクアンタが完全な状態であったとしてもモーターヘッドに勝てる気がしない。

スメラギはイオリアの情報に記されていた騎士とファティマという項目も気になっていた。

『それで刹那はどうする気？マリナさんを追いかける気？』

「うん？スメラギ・李・ノリエガ。特別にどうということはない。ELSとの対話の道中、俺とティエリアとクアンタは強大な力の前に何度も倒され、その度に這い上がって、そして未来を切り開いて来た。だからこうして地球に帰って来ることが出来た。今回も何とかなると俺は信じている」

刹那の発言にスメラギは目を丸くする。

『いくら何でも今回は無理です！』

ミレイナがティエリアに食ってかかる。

「ミレイナは刹那とクアンタを信じられないのか？」

しかし、ティエリアは平然としている。

『信じる、信じないの話ではないです！ディステイニーの性能がジョーカー宇宙でどのレベルなのかわかりませんが、それでもジョーカー宇宙の科学力は現在の地球の科学力を凌駕しています。それに、モーターヘッドの搭乗者である騎士とファティマが厄介です』

モーターヘッドを操る、騎士とファティマについてもイオリアの情報には記されていたが、ミレイナの常識を超えていた。

騎士とファティマが操るモーターヘッドについてイオリアも技術者として驚異を感じていた。イオリアの情報には単独でディステイニーを動かすラキシスについて、彼女が騎士なのかファティマなのか明記されていないかった。記されていない理由に『ある単語』を使いたくはなかったとだけ記されていたが。

「僕も今の刹那がモーターヘッドを相手に立ち回れるとは思っていない」

『だったら』

「司令、私は刹那さんをジョーカー太陽星団に送り込むのは反対です。今回ばかりは刹那さんでも生きて帰ってはこれません！」

『お嬢様、今の私は社長です』

「あ、ごめんなさい」

ここでもミレイナと同じく刹那を心配する女性が居た。

旧AEU領、西ヨーロッパの都市にある新興企業の社長室。そこでは、デイスティニーのパイロットであるラキシス、この企業の社長であるログナー、そして秘書ではないが部長のソーニャ・カーリンが、先日のサタン襲来時のデブリーフィングを行っていた。そう、彼らこそが刹那達の戦いをモニターし、ヴェーダをクラッキングしてデイスティニーの偽情報を登録した集団である。

ジョーカー太陽星団に魂が飛ばされたマリナ・イスマイルを救出するために、刹那を派遣するかどうかで、ラキシスとログナーが対立していたのだ。当然、ラキシスは派遣には反対していたが、意外にもログナーは刹那の派遣には賛成していたのだ。

「社長はどうして刹那さんが生還出来ると思っっているんですか？モーターヘッドの恐ろしさは社長もわかっているはず」

『確かにお嬢様の言うとおり刹那とGNT-0000 ダブルオークアンタでは我がミラージュどころか、星団3大モードヘッドの足下にも及びますまい』

「だったら」

『だが、俺は（彼は・あの馬鹿は）ガンダムマイスターであると同時に、今はガンダムだ（だ、です）』

スメラギ、ミレイナ、ラキシスに、刹那とティエリア、そしてログナーが答える。

「……」（刹那、遅しくなっただわね。意味がわかりません、です。司

令までソープ様みたいな、訳わからない事を言わないでください！

「」

ログナーの社長室。

『カーリン営業部長、刹那とクアンタを倒すのに最良と思われるモーターヘッドをあげてくれ』

「はい、社長。L・E・D・ミラージュとインフェルノ・ナパームの使用を推奨します」

「！」

ログナーの問いにカーリンは即答する。その答えにラキシスは驚いた。

L・E・D・ミラージュとは天照帝が開発したジョーカー星団最強のモーターヘッドである。完全な殺戮マシンで騎士とファティマは操縦者ではなく安全装置でしかないという。わずか15騎のL・E・D・ミラージュで惑星一つを制圧したという。また、インフェルノ・ナパームとはレッドミラージュが使用する火炎放射器だ。射程150mの火炎放射能力を有しその炎はモーターヘッドだけではなく靈魂などの靈的な存在も焼き尽くす。

『雷丸では駄目なのか』

「はい。GNT-0000 ダブルオークアンタであればモーターヘッドの機種は問いません。ホードミラージュでも撃破可能です。しかし、サタン・コマンダーとの戦闘記録を解析した結果、GNT

- 0000「E」ELSダブルオークアンタ相手ではL・E・D・ミラージユのインフェルノ・ナパームの使用を推薦します」

「イエツタ姉様・・・どうして」

「お嬢様、ジョーカーのモーターヘッドは『モーターヘッド』戦を考慮して設計されています。モーターヘッドより劣るモビルスーツ相手では問題ないでしょう。ですがL・E・D・ミラージユはモーターヘッド戦は所謂『おまけ』。本来の目的はお嬢様のご存じの通りです。それにお嬢様、今の私はソーニャ・カーリンです」

「姉、じゃなかった、つまり、カーリン営業部長はELSダブルオークアンタはモビルスーツではないと？」

「ええ。能力に開きがありますが、GNT-0000「E」ELSダブルオークアンタはお嬢様のデイスティニーに近い存在だと私は解析しました」

ラキシスはその一言に衝撃を受けた。

デイスティニーが躊躇せずELSダブルオークアンタに実剣を渡したのは何かを感じたのではないかと思っただからだ。

「それだけではない。ELSダブルオークアンタ、ええーい、面倒くさいからクアンタだ。刹那もクアンタもELSと融合している。モーターヘッドと接触した場合、ELSがモーターヘッドを取り込む恐れがある。最悪、騎士とファイティマ毎な」

社長室が静まりかえる。モーターヘッドの擬態。擬態した瞬間、ELS達はその情報を共有する。もし、モーターヘッドが取り込まれ、大量のELSモーターヘッドがジョーカーに出現したら・・・

『だが、その可能性は低いだろう。刹那がジョーカー太陽星団相手に積極的に喧嘩を売る理由がない』

確かにその通りである。ELSとの対話の道中、刹那達から攻撃を仕掛けたことは一度もなかったのだ。

「ですが、社長。だからと言って刹那とELSダブルオークアンタがモーターヘッド相手に生き残れる保証にはなりません」

ラキシスが食い下がる。

「確かにお嬢様の仰るとおり、刹那さんとELSダブルオークアンタはマリナさんの加護を受けていなければサタン・コマンダーに殺されていたでしょう。サタンに殺された者は魂は永遠に魔界を彷徨うとも言います。社長と違い、ELSと融合した刹那さんでも復活は出来ないかもしれません」

『マリナ皇女の加護がなければクアンタではサタン・コマンダーを倒すのは不可能だったでしょう』

刹那達は知らないことだが、サタン・コマンダーを相手に出来るのは、ジョーカー太陽星団でも僅かしかいない。その内の一人が、今ここにいるログナー社長であった。

しばらくの沈黙の後、ログナーが切り出した。

『お嬢様の刹那を思う気持ち、ログナー確かに理解しました』

ログナーがラキシスに頭を下げる。

「ログナー社長！考えを改めてくれるんですね！？」

『お嬢様、それではこうしましょう。ミレイナ『博士』と刹那は近々我が社を訪れる予定です』

「はい、お二人とも来週の創立記念パーティーに招待しています」

『ですが、お嬢様、彼らの意志を尊重することも大事です。パーティーの時に、私が刹那の実力を試して彼を説得してみましよう。それから彼らに自分たちがジョーカー太陽星団で通用できるのか判断させてはどうですか？つまり、ちょっとだけ騎士戦を体験してもらい、考えを改めて貰うのです』

「（騎士戦の体験という部分が若干ひっかかりますが・・・）わかりました。その方法でお願いします」

ラキシスもログナーの提案を受け入れる事にした。今度はラキシスがログナーに軽く頭を下げる。

『お嬢様、そんなことをされては困ります』

だが、言葉と裏腹にログナーの口元が若干緩んでいたことを見逃すカーリンではない。

「（あれは絶対何かを企んでいるわ。刹那さん、ラキシスごめんね、ごめんね、うちのマスターを許してね）」

心の中で必死に謝るカーリンだった。

外宇宙航行艦スメラギ。

『アーデさんはセイエイさんの意志を尊重するんですね？』

「ああ、刹那の意志を無視できない」

『アーデさんに負けました。セイエイさんのやりたいようにやらせます』

「ミレイナ、僕はそれだけが理由で刹那の意志を尊重しているわけではないぞ」

『?』

「ミレイナならクアンタをモーターヘッドと互角に渡り合えるようにパワーアップしてくれると思っているからさ」

『きゃー、アーデさんはこのタイミングでなんて事を言っんですか』

「ミレイナでも無理か？」

ティエリアが、ミレイナに笑顔で問いかける。

『……ずるいです。わかりました。ええわかりましたとも！ヴァステイ家の底力をお見せするです！』

ほとんど、やけくそ気味で答えるミレイナであったがその顔には自

信が現れていた。

ティエリアはそんなミレイナから、ミレイナの父親、イアン・ヴァステイの面影を見るのだった。

「（ミレイナ、君達親子の作り上げたダブルオークアンタには異世界の技術者達の夢や希望の未来にかける思いが込められている事を忘れないで欲しい。君なら必ずその思いを実現できると僕は信じている）」

再びログナーの社長室。

ラキシスは退室しており、社長室にはログナーとカーリンの二人だけだった。

そこには社長と部長という関係ではなく、まるで夫と妻という顔をした二人が居た。

『当面の問題は、刹那がマリナを連れ戻すまでの間、サタン共と戦う組織をどう作るかだな』

ログナーは先ほどラキシスにはああは言ったが、やはり刹那をジョーカー太陽星団に派遣するつもりだった。

「はい、マリナさんが不在ですので、いつサタンの侵攻があるかわかりません」

『イノベーターでもサタン相手に完敗だった。イノベーターでも騎士の代わりにならないか・・・』

「マスターその比較は間違いです。そもそも外宇宙での異種との対

話のために人類が進化したイノベーターと、戦闘を目的に作られた騎士ではスタートラインが違います」

「・・・地球側でサタンと戦える人材のリストアップを続けてくれ」

「はい、承知いたしました。マスターお聞きしても良いですか？」

「うん？」

「マスターはクアンタをどう評価していますか？」

「・・・化け物だな」

「え？」

「進化の止まらない化け物だ」

「それは、どういう意味ですか？」

「そのまんまの意味だ。モーターヘッドはジョーカー太陽星団では確かに強力だ。だが、ナ・イ・ンも言っていたがそれは現在のジョーカー太陽星団での話だ。AD世紀のマシメサイアと騎士に比べれば劣る。それにジョーカーはサタン共と同じく進化の袋小路に突入し、緩やかに退化の道を歩み始めている」

事実、最強のモーターヘッドであったが星団歴4000年前後から寿命から次々と不稼働になっていく。また、騎士の血も薄まり騎士の弱体化や、ファティマも寿命を迎え始めていた。反面、刹那やELSダブルオークアンタには寿命という言葉がなかった。だが、それでも現在の刹那とELSダブルオークアンタには優位性はあまり

見られなかった。

「ジョーカー太陽星団出発までに、どこまでELSダブルオークアンタを改良できるかが鍵ですね」

「最悪、現地改良も視野にいれないとな」

「それでは、マスターのミレイナ『博士』の評価は？」

「・・・そうだな」

ログナーはカーリンに4本の指を見せたが、最終的に5本全ての指を見せる。

「それは・・・シグナル・ボーダー5本ということですね？」

シグナル・ボーダーとはジョーカー太陽星団で技術者が身分を示すための飾り紐である。1本線は大学教授等の博士、医師、2本線で大学学長等、3本で医師や博士などの複数の技能を持つ技術者に与えられる。4本線でモーターヘッドやファティマのマイスター、5本線でモーターヘッドやファティマの制作者であるマイトにあたる。つまり、ログナーの評価ではミレイナは5本線のマイトになる。

「ああ。60歳を過ぎたいえ、地球連邦軍の技術者で彼女に匹敵する人材は居ない。だいたい、普通の技術者がELSダブルオークアンタの整備なんて出来るわけないだろう。あんな化け物を平気でメンテナンスや改良出来るのは、ミレイナ博士と、うちの陛下ぐらいだ」

「ああ確かにソープ様がクアンタを見たら悶絶しそうですね。お父

様が生きていたら、刹那さんも危ないです」

カーリンがサラツと凄いことを言っただけ。

『それに彼女にイレーザーエンジンなんて見せてみる。嬉々として解析・改良を始めるぞ』

「・・・はい、承知いたしました」

カーリンはニツコリとログナーに微笑む。つまり、そう言うことだ。

「所でラキシスには、話をしなくても良いのですか？」

『何の話だ？』

「お惚けにならないで下さい。私達が地球に居る理由です」

第7話 ミレイナ・レポート（後編）（後書き）

次回予告

スメラギの右フックが炸裂する。

そして、シーリンの口から語られるマリナの秘密とは。

後書き

第6話の後書きの通り、双方のファンからブーイングがきそうな内容でした。

MHとMSの性能差、騎士とイノベーターの能力差、そして刹那とELSダブルオークアンタの立ち位置を紹介する大事な話でしたので、あえて書きました。ただ決してFSSage、ガンダム00s ageということではありません。

また、立ち位置を細かく書いてしまうと後の展開に困るので、ぼかしているのもそのためです。

前編より後編が長くなってしまいました。そのため一部のエピソードは第8話に持ち越しになりました。

第2章はあと3話で終わるのですが、もしかしたら8話と9話の間に1話だけ寓話を挿入するかもしれませぬ。

実はミレイナの方が主人公刹那よりも高い評価だったのはやり過ぎた気もしますが、ヴァステイ家の人々ならMHでも作れそうです。

今回から普通にMHとかマイスターとかマイトとかFSS用語が登場しますが、解説を始めると物語が進まなくなるのでなるべく行わない方針です。

第8話 退魔の巫女（前書き）

第6話から引きずっている問題に今回はある程度終止符が打たれます。

せつさんはマリナとのこれからの関係に悩んでいます。それは「キャツキャウフフ」についてのお話です。

第8話 退魔の巫女

スメラギは病室の窓から、介護施設の駐車場からバイクで出て行く刹那を複雑な気分で見送っていた。

「クジヨウ、また刹那はどこか遠い所にも『対話』に行くのか？」

同室のカティ・マネキンが夫が剥いたリンゴを食べながらクジヨウことスメラギに声をかける。

『ええ、今回ばかりは刹那でも難しいミッションになりそうなの・
』

「ふーん、あのガンダムでもねえ。はい、ハニー、アーンして」

カティの夫、パトリックが剥いたリンゴをフォークに挿して差し出す。

パトリック、旧姓パトリック・コーラサワー、ソレスタルビーイング武力介入第1被害者であり、刹那の初陣で戦った旧AEU MSイナクトのパイロットだ。それ以降、ソレスタルビーイングとそれは深い縁を持つようになるが、現在は入所しているカティの介護で時々見舞いに顔を出していた。

『貴方たちは、ホント、いつまでも新婚さんみたいね』

スメラギは、右手をさすりながら先ほどまでの刹那との出来事を思い出し溜息をつく。

スメラギは車椅子から立ち上がり、刹那の胸倉を掴みこつ叫ぶ。

『刹那、貴方本気で言っているの!?!』

「本気だ。俺と一緒にではマリナは幸せになれない」

数分の前、刹那から発せられた意外な一言が今回の事態を招いた。

「俺はマリナを助け出しにジョーカー太陽星団に乗り込む」

『うん、私は反対しないわ』

「だが、マリナが地球へ戻るかはマリナの意思に優先する」

『え?』

「もし、マリナが地球への帰還を希望し、地球へと帰還した後、俺は、俺はマリナと別れようと思う」

この刹那の一連の発言にスメラギは耳を疑った。特に最後の「マリナと別れようと思う」等あり得ない発言だった。

『どうして?どうして、急にそんな悲しいことを言うの!?!』

「よく考えた上での決断だ」

『決断?』

「マリナの国葬の時に、シーリン・バフティヤールから言われたこ

とだ。

『マリナが独身を貫き通したこと。彼女は確かに女性としての幸せよりも国の幸せを選んだ。だけど、他にも理由があったのよ』

今の俺にはどうすることも出来ない」

『それはマリナさんが刹那を待っていたから・・・』

「今の俺にはマリナの愛に答えてやることが出来ない」

『？何を言っているの。刹那』

刹那はスメラギを真っ直ぐ見つめる。

「スメラギ・李・ノリエガ、俺は先日マリナの国葬に参列した。その時に俺はマリナの肉体が棺に入れられ安置される所を見届けた」

「だが、マリナの魂はジョーカー太陽星団に飛ばされてしまった」

『ええ』

「ジョーカー太陽星団でマリナの魂がさまよい続けるのだろうか？そもそも、あちらにはマリナの肉体はない。では、マリナの魂の拠り所は？どうやってマリナの魂は肉体に宿ることが出来るのだろうか？」

『・・・』

「仮に、『転生』という形でマリナの魂がジョーカーの人々の肉体

に宿ったと仮定する。イオリアの情報ではジョーカーの人々も基本的に地球人と変わりがない、人間という事が分かった」

『ええ、資料ではそうなっていたわね』

「以前のようにマリナが俺を愛してくれただとしても、俺はもう人間ではない。もし、マリナが若い姿で俺を愛してくれただとしても、俺はマリナの愛に応えることが出来ない・・・」

そして、スメラギが車椅子から立ち上がり刹那の胸倉を掴んだのだ。つた。

「俺はマリナの幸せを優先する」

バチーン！

スメラギの右フックが刹那の顔面にヒットする。

『何がマリナの幸せを優先するよ！貴方が側に居ないでマリナさんの幸せはないわ』

だが、刹那もスメラギのパンチを喰らっていても動じない。

「俺が若いマリナを愛すれば、マリアの命に関わる恐れがある」

『どういふことよ！？』

「俺はELSと完全に融合した『新種』だ。普通の人間であるマリナの卵子に俺の精子が仮に受精できたとしても、マリナの子宮に着床出来るかは未知数だ。最悪の場合、母胎にも影響があるかもしれない

ない」

51年前のELS大戦後、イノベーターと人間、一部分だけのELSと融合したハイブリッドイノベーターと人間の夫婦が居なかったわけではない。当然、子供も生まれているケースも数多く報告されていたが、少数ながら死産したという報告もまったく無かったわけではなかった。

まして刹那のように完全にELSと融合した『新種』と人間の事例はない。刹那の存在は公にされていなかったがヴェーダ上は『刹那』という種族に分類されている。この新種『刹那』が人間の卵子に受精できるかどうか？そんな事が政府の耳に入ったら刹那とマリナは研究施設に送られてしまうだろう。

『だから、マリナさんを地球に連れ戻した後で別れるというのね』

「・・・そういうことだ」

バチン！

再びスメラギの左フックが刹那の顔面にヒットするが、やはり刹那は動じなかった。

『馬鹿も休み休み言いなさい』

「これがマリナの命を救うための最良の選択だ」

『それは貴方一人の勝手な選択よ。そこにマリナさんの気持ちも、今こうしている間にもダブルオークアンタを必死に改良しているミレイナやフェルト達の気持ちを踏みにじる発言よ』

「だが！」

『それに、刹那。貴方はE L S達の気持ちを考えたことがあって？』

「E L S達の気持ち？」

スメラギは、やっぱりね。という顔で溜息をつく。

『刹那、本来の体に戻ってご覧なさい』

「？」

刹那はスメラギの発言の真意が読み取れなかったが、体を人間の肌からE L Sと融合した証である、本来のメタルの肌に戻す。刹那は公共の場では不要な混乱を避けるため人間の肌に偽装していた。

『マリナさん、留守中にごめんね』

スメラギはそう言つと刹那をぎゅーつと抱きしめる。

「スメラギ!？」

スメラギの突然の抱擁に刹那は驚くが、スメラギは刹那の胸に顔を埋める。まるで恋人にすぎる乙女のように。

『刹那、暖かいわね・・・』

「スメラギ・李・ノリエガ・・・」

刹那は自然とスメラギの髪に指で梳かす。それはいつもマリナにし

ていたように……という自覚は刹那にはなかった。

『刹那が対話から帰ってきてすぐの頃、ここにお見舞いに来てくれた時の事を覚えている？』

「……カティ・マネキンにノックをしなかったため殴られたことは覚えている」

『もう、馬鹿。そうじゃないわよ。あの時も刹那に抱きついたわね。あの時の刹那は体が冷たかった』

「すまない、ELSと融合したことにより金属体質をそのまま出していたかもしれない」

『それは違うわよ。自分でもわからないの？』

「どづいことだ？」

刹那は首をかしげる。

『次にマリナさんとお忍びで見舞いに来たときも覚えている？』

「マリナを勝手に連れ出したため、後でシーリンに怒られたな」

刹那の胸の中で呆れかえりながらスメラギは続ける。

『……あの時も刹那に抱きついたけど、刹那は体は暖かったわ』

「ELSとの体温調整がうまくいっていたのかもしれない」

『馬鹿。またまた大外れ。本当に自分でも分かっていないようね』

「？」

スメラギは、刹那の首の後ろに回すと刹那の耳元で囁く。

『刹那は毎晩マリナさんと同じベッドで寝ていたでしょ？』

「！」

どうしてそれを！？と驚く刹那を余所に、スメラギは溜息混じりで返す。

『恋人や夫婦なら普通の事よ』

刹那とマリナの寝室は別々である。特にマリナのベッドは特注品だという事は解説したが、刹那はマリナが寝付くまでマリナに添い寝していた。マリナが寝入った後で、刹那は自分のベッドに戻っていたが、マリナがわがままを言った場合は朝まで一緒だった事も何度もあった。勿論、スメラギはフェルトからの報告ではなく、一般論として刹那に話していた。

『そして、マリナさんはベッドの中で刹那に、こつやってぎゅーつと抱きついて寝ていたのね』

刹那を抱きしめるスメラギの腕に力が入る。

『刹那の体の温もりはマリナさんの温もりから学んだものだからよ』

「なに？」

『つまり、マリナさんの温もりをELS達が覚えたのよ。だから刹那の体にも温もりが宿ったわけ』

スメラギは刹那の目を見つめる。

『貴方と融合しているELS達がマリナさんと別れることが最善と
思つかしら？』

その問いに刹那は言葉が詰まった。ELS達と対話したという自負が刹那にはあつたが、それが根底から崩れるかもしれないのだ。

『刹那、確かに貴方がマリナさんの大切にしている気持ちもわかるわし、マリナさんを失いたくないから、自分から身をひこうという気持ちもわかるわ。だけど、マリナさんは貴方がそんなことで悩んでいると知ったら悲しむでしょうね』

スメラギは刹那から離れ、再び車椅子に腰を下ろす。

『刹那、貴方にミッションを伝えるわ。ジョーカー太陽星団に乗り込んで、転生したマリナさんを見つけ出して、押し倒してきなさい。たとえ神様が許さなくても私が許すわ！そして、マリナさんの愛の大きさを実感してきなさい。それも対話よ。そして、自分があの時はこんな小さな事で悩んでいたのかと思いきなさい。わかった？』

再び病室。

『（自分でも支離滅裂な事を言っちゃったわね。でも、刹那。貴方の幸せがマリナさんの幸せだということに気がついて）』

スメラギは窓から空を見上げながら二人の行く末を案ずるのだった。

刹那はスメラギと別れた後、ミレイナの会社のオフィスに身を寄せていた。

ミレイナの会社が介護用のサポートデバイスを販売していることは前に述べたが、会社の設立にはもう一つの目的があった。それは、ソレスタルビーイングメンバーの雇用先の確保である。

ソレスタルビーイングの隠れ蓑と言ってしまえば実も蓋もないが、先の悪魔との戦闘で大破したダブルオークアンタは事実、ミレイナの会社名義の倉庫で修理が行われていた。

刹那は社長室でミレイナと面会していた。

『セイエイさん、これが以前お話しした、創立記念パーティーの招待状です』

ミレイナの会社を鼻屑にしている取引先からの創立記念パーティーの招待状だ。この段階では、ミレイナも社長のログナー以下、ソーニヤ・カーリンの正体を知る由もなかった。

『セイエイさんは勿論、出席してくれますよね？』

「・・・考えておく。ところでミレイナ、クアンタの状況はどうだ？」

『（うう、逃げられたです）大破した部分の修理は続行中です。GNドライブ6号・7号は停止した状態です。依然として原因はわかりません。現在、ELSダブルオークアンタはGNドライブを使わない駆動方式を研究中です』

ミレイナの発言に刹那は驚く。

「ELSによるコントロール以外の方法あるのか？」

『ELSコントロール強化と新機軸の二通りを研究中です。コックピットシステムの入替えも視野に入れて作業を進めています』

「コックピットシステムの入替え？脳量子波だけではないのか？」

『GNドライブ復活後はセイエイさんが、ELSダブルオークアンタを操縦することになりますが、従来の操縦方式ではセイエイさんとELSダブルオークアンタにタイムラグがあります。モーターヘッドの資料では、操縦する騎士の動きをトレースできるコックピットが採用されていることがわかりました。これらを踏まえて、コックピットシステムを新しく作り直します』

「そんな事が可能なのか？」

『セイエイさんにピッタリなコックピットシステムを開発するので期待して待っていてください』

ミレイナは自信たっぷりな刹那に答えるが、刹那にはミレイナのその表情から疲れを感じ取っていた。恐らくまともに寝ていないのだろう。

『ですが、セイエイさん、これは暫定的な措置です』

「暫定的な措置？」

『ガンダムは元々はGNドライブから発生するGN粒子を動力源として開発されています。確かにELSダブルオークアンタはそういう意味ではGN粒子以外の動力源でも活動可能になっていますが、GNドライブでの活動を100とするならばELSによるコントロールはせいぜい60程度です。現在、100になるべく近づけるべく改修作業を行っていますが、ミレイナ達でも80が精一杯です』

「武装システムの問題もあるか」

『はい。GN粒子を使用する兵装は使えません。それ以外にも粒子テレポートも使用できませんし、トランザムもクアンタムバーストも使用できないのは痛いです』

「モーターヘッドとの戦いもそうだが、ジョーカー太陽星団でも悪魔と出会ったら戦いは避けられないだろう」

『セイエイさん、無理をしないで下さい』

ミレイナも刹那がそれでもジョーカー太陽星団に行くのはわかっているのだが、つい口に出してしまう。

『ところでセイエイさん。先日、スメラギさんの所に行っていたとき何かありました？』

「・・・何かとは？」

スメラギからミレイナに話がいったのか？と刹那は若干焦る。

『ELSダブルオークアンタをメンテナンス中に一瞬だけ勝手に起動したんです！幸い、オーバーホール中で分解状態でしたので八口達や作業員に怪我はなかったですが、胴体から外されていた手足が勝手に動き出したときはビックリしました』

刹那はドキツとした。もしかして、スメラギに詰め寄られたときの事かもしれないと思った。

『セイエイさんだけではなくダブルオークアンタもELSと融合していますから、セイエイさんに何かあったのかな』と思ったのですから。それで、何もなかったんですね！？』

「・・・ない」

ミレイナは目を細めて刹那の顔をまじまじと見る。

『わかりました。』今回は『セイエイさんを信じるです』

刹那はミレイナに見抜かれているのではないかと思った。

「（スメラギの言うとおり、クアンタもELS達もマリナと別れるのは反対か）」

『そうそう、今朝セイエイさんにお手紙が届いたです。差出人はバフティヤールさんです』

ミレイナは刹那に手紙を差し出す。電子メールではなく、紙の手紙だ。

「シーリン・バフティヤール！」

刹那が手紙を受け取るとその場で開封し、内容に目を通しミレイナに渡す。

「・・・ミレイナこれを」

『私も見ても大丈夫なのですか？』

ミレイナは刹那から手紙を受け取る。手紙には日時と場所、4桁の数字で2319とだけが記されていた。

『セイエイさん、これってヴェーダ対策？』

「恐らく。ヴェーダによる通信傍受の対策だと思われる。ミレイナ、その4桁の数字について身に覚えがないか？」

『うーん、すぐにわかりませんが、西暦のような気もしないでもないですが・・・。この待ち合わせ場所はどこですか？』

「そこは俺達の因縁の場所だ」

『?』

「その場所で初めて俺はマリナと出会った」

それから数日後。イギリス某所。

この場所は58年前、刹那が無差別テロの犯人を追っている最中にマリナに助けられ、マリナと共に訪れた場所だ。刹那ははじめはマリナに対してカマル・マジリフと名乗っていたが、ついにはコードネームである刹那・F・セイエイを名乗ってしまった因縁の場所である。

「（俺もマリナもあの頃は若かったな）」

刹那は当時を思い出す。

『ごめん、ごめん、待ったかしら？』

「え？」

刹那は、突然声をかけられ振り返る。そこには長い黒髪が美しい小柄な女性が立っていた。

『あーごめんなさい、人違いでした。私よく間違えるんです。本当にごめんなさい』

女性は頭を下げひたすら謝る。突然の出来事に刹那も対応出来ない。

「いや、間違いは誰に出もあることだ。俺も気にしていない。ん？」

そんな刹那の背後から近づいている人物が居た

『待たせたわね。どうしたの？』

シーリン・バフティヤールである。刹那は振り返り状況を説明する。

「いや、今、こちらの女性の知人に間違われてしまったようだ」

『？貴方しかいないように私は見えるけど！？』

「何！？」

刹那は再び女性の方を見るがすでに消えていた。

「馬鹿な、消えた！？」

『刹那どうしたの？』

「・・・いや、シーリン申し訳ない。俺の気のせいだったかもしれない。場所を変えよう」

『？』

刹那はシーリンの手を引き場所を移動する。

「（あの女は何者だ？気配を消して俺に近づき、そして姿を消した・・・）」

その刹那とシーリンを建物の屋上から観察している人影があった。それは先ほど刹那に声をかけた小柄な女性である。

『刹那・F・セイエイとシーリン・バフティヤールを確認っと』

女性は携帯端末を操作しどこかに連絡をとる。

『司令、二人を確認しました。あと、シーリン・バフティヤールを尾行してきた政府関係者は眠って貰いました』

『え？それ、やりすぎ？減棒？マジですか！え〜〜〜〜』

端末の向こうの司令こと、ログナーは頭を抱えていた。

「クニヤジコーワ家は昔から変わらんな・・・」

シーリンは刹那の運転するオースチンの後部座席に座っていた。刹那は制服に制帽、そして手袋をはめている。端から見ると、ご婦人のお抱え運転手にしか見えなかった。

『急に呼び出して悪かったかしら？』

シーリンは刹那に話しかける。

「問題ない。それよりも連絡を貰えて嬉しかった」

刹那はルームミラー越しにシーリンの見るが、心なしか表情が曇っている。

『・・・刹那、私から先に質問をして良いかしら』

「ああ」

『ありがとう。マリナが亡くなったあの日、貴方はどこで何をして

いたの？』

「！」

『（やっぱり）アザディスタンの医療スタッフに確認したら貴方はマリナの死後現れた、というのは本当だったのね』

「・・・すまない」

刹那はシーリンに地球でのマリナの最後を見届けられなかったことを責められるのではないかと思った。

『ううん、違うの。それで私が怒っているとかではないの』

「・・・」

『貴方がマリナの側を離れないといけない程の事があった、のね。それを教えて欲しいのよ』

「・・・だいたい察しがついていないか？」

『貴方の口から聞きたいの。元政府関係者の私でも規制がかかっていて情報が得られなかったわ。何かあったのね？』

シーリンは過去のツテでマリナが亡くなった当日の事を調べていた。悪魔達との戦闘はヴェーダによる規制がかかっていたためシーリンは調べることが出来なかった。ナイル級戦艦の撃沈は航海試験中の『不幸な衝突事故』として報道されていたが、それ以上の情報にはたどり着けなかったのだ。

しかし、シーリンは別ルート、それは連邦政府軍関係者の遺族手当

の届け出が急増していることから何かあったと悟ったのだ。悪魔による攻撃で戦艦やMS部隊が壊滅したのだ。遺族も相当数にのぼる。そして、マリナが危篤状態での刹那の出撃とマリナの国葬での刹那の謝罪。
それらの点と点を結べば全体像が見えてくる。

刹那はシーリンに全てを話すべきか考えていた。マリナの親友であるシーリンには全てを話した方が良くはないかと考えてはいたが、あまりにも荒唐無稽な話である。一般人には受け入れられないのではないかと思っていた。だが、決断できない刹那を余所にシーリンが口火を切った。

『例えば、悪魔が現れマリナを殺しに来た、とか』

「!」

ルームミラー越しに刹那の一瞬の表情の変化をシーリンは見逃さない。そして、更にシーリンの口から耳を疑う単語が出てきた。

『退魔の巫女マリナ・イスマイルを殺しに悪魔が来たのね』

もう隠せない。刹那はそう思った。道路脇に自動車を止めると、後部座席のシーリンに振り返る。

「全てを話そう」

『私も、ね。刹那・F・セイエイ』

刹那とシーリンは季節外れであったが砂浜に来ていた。海風が強く、波も高い。

万が一に備えて、二人とも自動車からは降りていなかった。ただ、話がしづらいたためシーリンは助手席に移動していた。

刹那はあの日起こった出来事を全てシーリンに話した。だが、ディステイニーとラキシスに関する情報については伏せていた。シーリンは刹那の話聞き終わると静かに涙を流し始める。

「シーリン・バフティヤール、これが俺が謝った理由だ」

『もういいわ、やっぱり貴方は悪くない』

「・・・」

『それよりも、マリナが生きてもかもしれない、という望みが私は嬉しいの。貴方のおかげね』

「だが、まだマリナが飛ばされた宇宙までの航路がわからない」

『大丈夫。マリナと刹那ですもの。きっと二人は再会出来ると私は信じているわ』

シーリンは目元をハンケチで拭いながら刹那に笑顔を見せる。

「シーリン・バフティヤール、何故俺をそうまで信じる？貴女はこの話を信じているのか？」

刹那は疑問に思った。普通の人間であれば魂が別宇宙に飛ばされてしまった話など信じられるわけがない。別の宇宙でマリナが転生しているかもしれない。

そんな話は気が狂った男の世迷い言だと思われるだろう。だが、シーリンは刹那の話を全て受け入れ、そこから希望を見いだそうとしているのだ。

『だって貴方はマリナの運命の人ですもの。貴方は悪魔達との戦いに生き残って、悪魔からマリナを守ってくれた』

シーリンが最上級の笑顔で刹那に即答する。

その一言が雷のごとく刹那の全身を貫く。刹那は先日スメラギに話をしたマリナとの別れ話を思い出した。

「・・・シーリン・バフティヤール、俺は人間ではない。ELSと融合した新種だ」

『?どうしたの突然。私も知っているわ』

「もし、転生したマリナとやり直すことが出来たとしたら」

『・・・私は応援するわ』

シーリンはアツケラカンと答える。

「だが、俺とマリナとの間に子供をもつことが出来ないだろう。最悪の場合はマリナの命に関わる」

刹那はスメラギがそうだったように、シーリンからも罵声が浴びせられるだろうと覚悟した。しかし、意外な答えが返ってくる。

『そうね、貴方の精子とマリナの卵子では受精しないかもしれない。それにマリナの子宮に着床出来るかどうかかわからないわ。もし、マ

リナが妊娠したことが政府関係者の耳にでも入ったらマリナは研究施設に連れて行かれ、生まれてくる子供は最悪モルモットにされるかもね』

まさかのシーリンの返答に刹那は驚く。

「ならば、シーリン・バフティヤール！だから俺は、俺はマリナと・・・」

そこで刹那の口が動かなくなってしまった。正確に言うとは体が動かない。ELS達が刹那の行動を制限し始めているのだ。

『だから、俺はマリナと安心して暮らせる世界へ旅立つ。という所かしら？私としては、ちょっと寂しいわ』

「！」

シーリンからの言葉は刹那とELS達には衝撃的だった。

『きつと、マリナから子供の話は切り出されていないと思うから、今、貴方に話すわ』

『貴方がマリナと同棲できるように手続きをする時、マリナと二人で話し合ったことがあったの。もし、マリナが刹那との間に子供が欲しくなったときに、どんな事態が考えられるか、どう困難を乗り越えるかを』

刹那は体内のELS達がシーリンの言葉を待っていることに気がついていた。

『マリナはある理由から卵子を凍結保存しなかった。当時は今から子供をもうけるのは不可能と想っていたわ。だから、あくまでも仮定の話としてだけど』

『マリナと私はE L Sと融合した貴方の精子をマリナが受精できるかどうか疑問だった。もし妊娠できたとしても母胎にどう影響するかわからない。最悪、命を落とす危険性もあるかもしれない。それに、連邦政府もイノベーターやハイブリッドイノベーターの人権問題に取り組んでいるけど、一枚岩ではないわ。マリナを研究と称して拉致する連中が居ないと限らないし、最悪、命を狙われるかもしれない』

シーリンは一瞬だけ車窓から外の風景を見ると溜息をつく。

『でも、その話し合いは無駄だった。結局はマリナの惚気話に変わったわ』

「？」

刹那もE L S達も疑問に思う。

『マリナがね』

「でも、私はそれほど心配していないの。いずれ時が来れば自然と刹那の子供を身ごもるような気がします。それに、刹那に融合しているE L S達も命の尊さや生命の神秘さを理解してくれる良い機会だわ」

って言うのよ。これには参ったわ。仮定の話だって言うのに、マリナはこれから貴方の子供を身ごもる気満々だったわ』

「マリナ・イスマイル・・・」

刹那がマリナの名前を口にしているが、それは刹那の意志からなのか、ELS達の意志なのかわからない。

『おまけに』

「もし、私に何かあったら刹那とガンダムがただ指をくわえて見ているわけないでしょう」

だって。マリナはお婆ちゃんになったと思っていたら、すっかり夢見る少女に戻ってしまっていたわ』

シーリンは当時を振り返りながら思い出し笑いをしていた。

『刹那、どうしたの？』

シーリンと対照的に刹那とELS達は固まっていたのだ。

「（俺は、俺たちは、マリナと・・・）」

刹那はマリナとの生活を振り返っていた。

シーリンの言うとおり、マリナとは『対話』をしていたつもりだったが、彼女とはこのような話は一度も行ったことがなかったのだ。マリナは刹那とELS達を全幅の信頼を寄せている。そんなマリナを裏切るような考えをもった自分自信に嫌悪する。しかし、そんな刹那をELS達がマリナの言葉で元気づけた。

「（もし、私に何かあったら刹那とガンダムがただ指をくわえて見

ているわけないでしょう)」

マリナの言葉が刹那とELS達の中で何度も何度も繰り返される。

「・・・そうだ・・・俺が・・・俺たちが！・・・ガンダムだ！！」

『刹那！？どうしたの突然』

刹那からの突然の魂の絶叫にシーリンが驚く。

「シーリン・バフティヤール、ありがとう」

『？？どういたしまして！？』

刹那の目は先ほどとは違い虹色に輝いていた。

「シーリン・バフティヤール、今度は俺の質問に答えてくれ」

今度は刹那がシーリンに質問する。

「手紙に書かれていた『2319』の意味と、『退魔の巫女』の事だ。やはり、マリナの家系には何かあるのだな」

『その質問に答える前に、私こそ貴方に謝らないといけないわ。国葬の時に嘘をついたことについて。ごめんなさい』

シーリンは刹那に頭を下げる。

「いや、謝らないでくれ。あの時は事情があつて話を出来なかつたと俺は理解している」

『貴方はいつも優しいのね。刹那・F・セイエイ』

「それで2319、こちらでも調べてみたが何もつかめなかつた」

『そうでしょうね。貴方たちソレスタルビーイングが関わるような大事件はなかつたもの』

「やはり西暦か！」

『ええ、貴方がELSとの対話のために地球を旅立ってから5年目の事よ』

「2319年、マリナが倒れた年」

『ええ、そして私達が悪魔と遭遇した年』

ELS大戦後、マリナと私はシーリン・ハフティヤールアザデイスタンだけではなく、中東全域の復興に努めるために世界各地を飛び回っていた。旧ユニオン領の経済特区日本での滞在先の出来事だった。

「マリナ、外務大臣との午後の面会時間が変更になつたわ。少し時間が出来たから今のうちに休憩を取りましょう」

『ええ、シーリン、そうする、わ』

ゴン。次の瞬間、マリナが急に倒れた。

「マリナ、ちょっとどうしたの!? マリナ、返事をして。マリナ! マリナ! 誰か来て!」

マリナは倒れたときに頭を打ったのか返事をしなかった。すぐに病院に搬送されたわ。

長い時間、精密検査が行われ、私達が医師と話が出来たのはその日の夕方のことだった。

「ドクター、マリナの様態は?」

「貧血から来る失神です。ですが、倒れたときに頭を打っています」

「え?」

「・・・現段階では皇女の意識がいつ回復するかはわかりません」

医師はそう言って私から目を背けたわ。

「ドクター! マリナは、マリナ皇女はこれからのアザディスタンに必要な人なのです!」

「我々もそれは分かっています。ですが・・・」

その晩、私は意識を失ったままベッドで寝かされているマリナの手を握っていたわ。

「マリナ、貴方はアザディスタンに必要な人材なのよ。貴方じゃないと駄目なの。それに、彼はまだ帰ってきていないでしょう? 元氣

な姿を見せないと駄目よ。だからお願い目を開けて頂戴」

でも、マリナは答えてくれなかった。

次の日、私はマリナの入院手続きや今後の会談スケジュールの変更やら手続きに忙殺されていた。

当時のアザディスタンの病院よりも設備が良かったから、そのまま入院させることにしたの。

オースチンの車内。

「これはニュースで報道されたから記録に残っているわ」

「ああ、ヴェーダにも当時のJNNのニュース映像が残っていた。そして病院火災か」

「でも、本当は違ったの」

マリナが入院してから一週間が経過した。マリナの意識は回復も悪化しなかった。だけど、あの晩、マリナの容態が急変したの。

「ドクター！これはどういう事です！？皇女は貧血だったのではないのですか？」

「我々も急変の原因がわかりません。最善を尽くしているのですが、現在の医療技術でもわからないのです」

頭の中が真っ白になったわ。突然、マリナの死が現実のものとなったのだから。

私はその晩もマリナの病室に泊まり込んでいた。

「マリナ、貴女も眠り姫という年でもないでしょう？ 好い加減、目を覚ましてくれないかしら？ でも、王子様のキスで起きるならELS達に彼の行き先を聞きに行くんだけどね」

呼吸器を着けられたマリナは返事をしなかったわ。気がついたら、いつしか私もマリナの手を握ったまま寝ていたの。

突然の雷の音で目が覚めたの。雨音もなく、辺りは不気味なほど異様なほど静まりかえっていたわ。

さらにマリナに取り付けられたバイタルモニターも消えていた。

「？ 外に誰か居るの？」

雷の光でカーテンの外に何かの影が見えたの。

その時のマリナの病室は20階の個室だったわ。外に人が居るわけ無いのに。

私はカーテンを開け外を見た。外を見た瞬間、声が出せなかった。それは骨と皮だけの姿格好をしたモビルスーツぐらいの巨大な物体だったわ。それが翼を広げ、宙に浮かんでいたの。

あれは正に『悪魔』だった。手にした長い筒のようなもの、いえ、武器を私に向けてこう言ったわ。

「退魔の巫女の力が弱まっている今が好機だ」

B級映画の悪役の台詞に聞こえたわね。

私はすぐに窓から離れて、マリナをベッドから連れて逃げようとし

たの。
意識を失っているマリナをどうやって車椅子に乗せたかは覚えていないけど。
でも病室のドアに手をかけたけど開かなかった。ロックされていたの。

「お願い、ここを開けて！誰か居ませんか！」

ドアを何度叩いたかしら。次にすぐにナースコールを呼んだわ。でも、繋がらないの。

それに、あれだけの巨大なモビルスーツ位の大きさの物体が動いていけば、病院だけではなく、深夜といえども街中が騒ぎになるはずでも静かだった。まるで世界に私とマリナだけが取り残されたような感覚だったわ。

「無駄だ。巫女共々、今楽にしてくれようぞ！」

悪魔はマリナの病室の窓ガラスを粉々にしたわ。私はガラスの破片がマリナに刺さらないように病院の廊下側に逃げ込んだの。でも、ドアはロックされているから逃げられない。
そして悪魔の手が病室に入り込んできたの。私とマリナを捕まえようと6本の指が迫った時、

『エクスシアの名において退魔を命ずる』

マリナが突然喋ったの。

「エクスシア!？」

刹那は聞き覚えのある名前に驚きの声を上げる。

「貴方のガンダムのコードネームと似ているわね。続けるわ」

悪魔の手が私達に迫った時、凄い轟音と共に、悪魔の手は病室から引き抜かれたわ。

私は恐る恐る病室の外を見たの。

雷雲の中から白いモビルスーツが降りてきたの。

「刹那!？」

はじめは刹那、貴方がガンダムで駆けつけたと思ったのよ。
でも、違ったわ。GN粒子も放出されておらず、何だか偉そうな態度で降りて来たんですもの。

サタンは奇襲攻撃を受けて病院の駐車場に叩き落とされていた。二つの羽をもがれた格好だ。

そのサタンの足元に、やはり巨大な機動兵器が空から降りてくる。

「エクシアめ、召喚するなら時と場所を選びやがれ」

機動兵器の操縦者達はサタンに一撃を食らわした巨大な剣を構え直す。

「マスター、エクシアさんとの契約を確認しましたが『いつ・い

かなる時も』になっています」

「イエッタ、そんな事はわかっている。だが、サタンと戦うなら装備というものがあるだろう」

巨大な機動兵器は純白の装甲の彼方此方に装飾が施されていた。肩には巨大なプレートが取り付けられており、左肩前プレートと、右肩後ろのプレートには黄金の翼と角を生やした獅子のような巨大な装飾が描かれていた。

左腕にセットされた巨大な盾にも装飾が施され、赤い十字架が描かれている。まるで、式典の最中から抜け出てきたような出で立ちだった。

「スパイドを持って出撃できただけでもマシです。これが、けん玉フレイルだったら格好が付きません」

機動兵器は地上に降り立ち、病院を背にサタンと向き合う。

「貴様は何者だ！？巫女の加護を受けた騎士か？」

サタンは機動兵器を睨み付けるが、操縦者達は怯まない。

「今晚の当直医さ」

「ふ、ふざけるな」

サタンはバックステップで一旦距離を取る。

「サタンはこいつ一匹か？イエッタ、伏兵の可能性は？」

「装備からすると、特殊潜入工作人員と思われる。周囲にサタン・コマンダーの反応はありません」

「巫女の方が弱まっているときに来やがったわけか。刹那の奴め」

「マスター、わかっていると思いますが、『ストライクル』の装甲は飾りですから戦闘機動は、最小限にしてください」

サタンは手にした火炎放射器を急襲してきた機動兵器『ストライクル』に向ける。

「チィ、式典用のベイルでは防げない」

だが、ここでストライクルが火炎放射を回避すると病院に直撃してしまう。そうなれば、マリナを含めて入院患者は一瞬のうちに蒸発してしまうだろう。

ストライクルは盾で火炎放射を防ぐのをあきらめ、手にした剣で風を起こす。いや、風というレベルではない。

ソニック・ブレード、真空斬りだ。ソニック・ブレードによって火炎放射器から放たれた火球は火炎放射器ごと斬り裂かれる。しかし、火の粉が病院に飛び火してしまった。

「マスター！」

「イエッタ！病院が丸焼きになる前に、さっさと片付けて結界をぶち壊すぞ」

ストライクルは手にした剣を鞘に収める。サタンも、ソニック・ブレードによって破壊された火炎放射器を投げ捨て、帯剣していた剣に手をかける。居合いの構えだ。ストライクルの背後では火災が広

まっっており、一刻の猶予もない。サタンが剣を抜く瞬間！

「ブラインド・ソード！」

ストライクルの居合いが悪魔のそれを勝った。剣を抜く瞬間に放たれた超高速のショックウェーブがサタンを切り裂く！

「ば、化けものめ・・・」

サタンは体を切り裂かれながらも食い下がる。

「鏡を見てから言え」

グサツ！ストライクルはサタンの頭部に剣を突き刺しながら答える。

「・・・巫女の命が、尽きる時、必ずや、殺して・・・くれようぞ。グエ！」

サタンは断末魔の声を上げて跡形もなく消えてしまった。

それは一瞬の出来事だった。

悪魔が放った火球が粉々に消し飛び、白いモバイルスーツが悪魔を切り裂いたのだ。

ジリリリーン！

だが、火災報知器の音で私は現実に戻される。

悪魔が放った火球が粉々になったが、その時に飛び散った火の粉が

病院に引火したのだった。

「マリナ！」

先ほどと違い再びマリナは答えなくなった。早くマリナを連れて逃げないといけない。だがここは20階だ。

廊下に出るドアのロックは今度は解除されていたが、扉が僅かしか開かない。それどころか、扉から煙が部屋に入ってきたのだ。

「ゴホッ、ゴホッ」

煙で咳き込む私。このままではマリナを連れて逃げる事が出来ない。

「手に乗れ」

部屋の外に白いモバイルスーツが来ていた。手を差しのべ、私達にそこに乗れというのだ。

私は躊躇しなかったわ。悪魔よりもマシだと思ったのもあるけど。

私はマリナを何とか掌に乗せて病室を脱出したの。

「マスター、式典用装甲のおよそ7割が今の剣技と火炎放射器の熱で溶けています」

彼女はコンソールパネルに表示されるダメージ情報を主に伝える。彼らの駆る『ストライクル』は式典用の装甲が装備されている時の名前である。その元となっている機体は凶悪極まりない機体だが、式典時は通常装甲の代わりに、装飾が施されたペラペラの装甲に交

換されているのだ。実戦投入する時は式典用の装甲が外されて本来の装甲に取り替えられるのだ。

「始末書で済む問題ではないな、イエツタ。エクシア達を助けたら、一旦病院から離れるぞ。この世界の機動兵器と遭遇する方が問題だ」

彼らの駆る『ストライクル』は元々はL・E・Dと呼ばれる機体である。その彼らと機体性能を持ってすれば地球連邦軍のMSが束になっても勝つ事は難しいだろう。しかし、彼らの目的はサタンとの戦いである。

「私も賛成です。ジャミングを開始。マスター、離脱コース表示します」

ストライクルは、マリナとシーリンを駐車所に下ろした。

「貴方たちは一体!？」

私は白いモバイルスーツに呼びかけたわ。だが、白いモバイルスーツは無言で飛び去ってしまった。

「白いモバイルスーツか・・・何か覚えていることはあるか？」

刹那はシーリンに確認する。刹那の中ではモバイルスーツではなく、モーターヘッドではないかと予想していた。

デイスティニー以外のモーターヘッドも地球に居る可能性が出てきたのだ。

「昔の話だからよく覚えていないけど、GN粒子が出ていなかったことと、凄いメカニカルノイズだった事を覚えているわ。カタロンのモビルスーツの整備工場でもあんな音は聞いたことがないわ」

私達が駐車場に降ろされた後、すぐに消防車や救急車が到着して救助がはじまったわ。

避難中に怪我人が出たけど、死者が出なかったのは奇跡ね。

『・・・ここは？』

マリナが目を覚ます。

「マリナ！良かった気がついたのね」

『シーリン？どうしたの？それにここは？』

「どうしたの？じゃないわよ。良かった目を覚ましてくれて」

思わず泣いてしまったわ。歳をとると涙もろくなるのよね。

マリナはあの火災の後、すぐに別の病院に移された。その翌朝だったわ、マリナが目を覚ましたのは。

結局、元居た病院は火災により一時閉鎖。建物の周辺も原因不明の損壊で酷い状況だったわ。

恐らくあの悪魔と白いモビルスーツのせいね。

でも、不思議だったのは誰も悪魔と白いモビルスーツが戦っていたのを見ていなかった事。

「マリナ、貴方は倒れて病院に運ばれたのよ」

『・・・ごめんなさい、シーリン。良く覚えていないの。また、貴女に迷惑をかけたのね』

「気にしないで。マリナは快復することだけを考えて」

マリナの健康状態は問題なかった。まるで急変していたのが嘘だったように、頭を打った後遺症も検査では確認されなかったわ。

「シーリン・バフティヤール、マリナが快復できたのは貴女の看護のおかげだと俺は思う。ありがとう」

「そんな事無いわ。でも、そう言っていただけだと嬉しいわね。続けるわ」

刹那はここまでの話を一切マリナからは聞かされていなかったのだ。

マリナの退院の最後の日に、私とマリナは病院の屋上に来っていたの。

「マリナ、一つお願いがあるの」

『シーリン、今更何を改まってそんな事をいうのかしら？私と貴女の中じゃない』

「・・・そう、だったわね」

「マリナ、『エクスシア』という人を私に紹介してくれないかしら？」

私はマリナには悪いけどカマをかけさせて貰ったの。

その時、マリナの顔色が一瞬だけ変わったのを私は覚えている。

『・・・それは無理だわ』

「どうして？」

『その人はもう居ないの』

「もう居ない？」

『エクスシア王女は我が家の古いご先祖様だから』

「！そう、それでは無理ね」

『シーリンはエクスシア王女をどこで知ったの？王女は何世紀も前の人よ』

「・・・」

『アザディスタン王国は新興国だけど、王家の血は何世紀も前から脈々と受け継がれてきたの。イスマイル家は古い家なの』

『エクスシア王女は中東王家の出身だった。とても綺麗な女性で、明るく国民にも愛されていたそうよ。そんな彼女にはある伝説があるの』

「伝説？」

『彼女は歴訪で諸外国を訪れると、必ず気前よく資金援助を行っていたそうなの。災害で苦しむ国があれば、自ら足を運んで喜んで復興資金や物資を援助したわ』

「今のアザデイスタンは逆ね」

これにはマリナも苦笑する。

『そう、当時の中東はオイルマネーで潤っていたからお金はあったの。当然、王女の外交を面白くない人々も多かった。一部の王家の人間や大臣達も面白くなかったそうよ。でも、王女は「いざれ石油が枯渇し、新しいエネルギーが登場した時、我が国は成り立たなくなるでしょう。だから、今のうちに世界に貸しを作っておく」って日頃から周囲に話していたの。でも、どう考えても貸しの方が大きすぎて王女は歴訪は縮小され、お目付役が大勢同行するようになったの』

「それでは私達は王女の代わりに取り立てているのね」

『そうかもしれないわ』

マリナの顔に笑顔が戻ったと思った次の瞬間

『でも、この伝説には続きがあるの』

マリナの表情が曇り始める。

『エクスシア王女が、歴訪中の被災地訪問で事故に巻き込まれたことがあったの』

「まさか、その事故で亡くなったの？」

『いいえ、王女は亡くならなかった。しかし、同行していた当事国の関係者や王家の人間、王女を除く大勢の人が亡くなったそうよ。王女は事故現場にほど近い場所で発見されて助かったそうなの』

「それは良かったわ。王女は悪運が強いのね」

シーリンも安堵するが、マリナの表情は更に曇る。

『ただ問題があったの』

「問題？」

『事故の直前「悪魔に攻撃されている」という通信記録が残っていたの』

「悪魔!？」

私は先日の悪魔の襲撃を思い出した。体に悪寒が走る。

『只一人生還した王女だったけど、悪魔と遭遇した話は誰にもしなかった』

「どうして？」

私はマリナに詰め寄ったわ。悪魔と遭遇した私としては非常に興味

があつたから。

『?だって、悪魔と言っても誰も信じてくれないわ。それどころか王女が気でも違ったのか?と思われてしまうでしょう?』

「・・・」

確かに当事者以外は悪魔なんて言っても信じて貰えないだろう。私は自分が『当事者』だと言うことを忘れていたわ。

『でも、以前から王女を良く思っていない人々が「王女が悪魔と契約して同行者を殺した」って噂しはじめたの』

私は戦慄したわ。もし、先日の病院襲撃で私とマリナだけが生き残っていたら同じ事を言われたかもしれない。

『当然、噂は王女の耳にも入ったわ。でも、王女は一笑に付し今まで通り振る舞ったの』

「彼女強かったのね」

『でも、周囲、具体的には王家としては、やはり問題だった。王女が悪魔と契約していると噂されては困るの』

「・・・それで彼女は怎么样了?」

『王女は王宮の離宮に幽閉されたわ。建前上は王女を悪魔から守るため、という理由だけど。でも、彼女を気に入らない王家の人間や大臣達はこの機会に彼女をこのまま亡き者にするつもりだった』

「！だけど、それでは子孫は？イスマイル家は？」

『そう、ここからが彼女の本当の伝説なの』

『ある晩、彼女を殺しに本当に悪魔が現れたの』

「！」

『城壁より大きい悪魔だったそうよ。それで本当に悪魔が現れてお城は大混乱。国王や側近の大臣は幽閉された王女が仕返しに悪魔を呼び出したんだって言いはじめ、王女を離宮から連れ出して王女を殺そうとしたの』

「そんな・・・」

『だけど、いよいよ悪魔がお城を攻撃したとき、怖くなった国王や大臣は我先に逃げ出したの』

「王女は？」

『結局、王女が残った兵士をまとめてあげて悪魔と戦うの』

「す、凄いわね」

『だけど、悪魔の前には攻撃も効かず絶体絶命のピンチ。その時に、王女は黒き巨人を呼び出したの』

「黒き巨人！？」

私は悪魔を撃退した白いモビルスーツを思い出した。モビルスーツ

は他にもいるの!?

『黒き巨人は見事悪魔を撃退。そして王女は悪魔を退けた英雄として再び国民からも迎えられるようになったの』

私はその光景を想像するのは難しくはなかった。先日のように悪魔を相手に謎のモビルスーツが戦う光景を。

『以上が我が家に伝えるエクシア王女の伝説よ』

「凄い伝説ね」

『黒き巨人だなんて、モビルスーツが登場する遙か昔の世界の話にありがちなお伽噺よね』

マリナは遠くを見つめる。

「その後、逃げ出した王様や大臣はどうなったの?」

『王女を幽閉した国王や大臣を追放するべきだ!という声もあったけど、エクシア王女は国王や大臣達を許したそうよ』

「それが貴女のご先祖様なのね」

『ええ』

「(・・・おかしい。悪魔を退けた王女なら、退魔の『王女』になるはず。あの時、悪魔達は退魔の『巫女』と言ったのは何故だ?」

マリナは深い溜息をついた後で、何か決心したよう表情で私に向き

合ったわ。

『シーリン、それが我が王族の、いえ、女性にとって辛い歴史の始まりなの』

「え？」

『アザディスタン王国では女性に政治が関われなかったのは、貴女が一番良く知っていると思う』

「・・・ええ」

『では、なぜ私が皇女に選ばれたのか？王制復活のための象徴として？国の舵取りを大学を出たばかりの女が出来るほど甘くはなかった、というのは側で見えていたシーリンが一番良くわかってはいるはず』

私は当時を振り返り、マリナにかける言葉が見つからず苦笑した。

『エクスシア王女が悪魔を退けた話から、いつ頃からか分からないけど国が衰退する原因の一つに悪魔の仕業と考えるようになった。そこで、国が大変な時代を迎えたとき王女や皇女を国の代表にして、国の災い、つまり『悪魔』を一切合切を引き受けさせる習慣が出来たの。すると不思議と次の代が繁栄するの』

「そんな、非科学的な！」

でも、すでに自分が十分非科学的な状況に置かれていたのを忘れていたわ。

『確かにシーリンの言うとおり、この話は全ての王家の女性が該当

するわけではないから信憑性が怪しいわ。だけど、大変な時代を経験した王女や皇女の次の代は国が栄えてきたわ』

「まさか、マリナ、貴女」

『そう、私は悪魔を退けるために選ばれた女』

マリナ、そんな悲しい顔で言わないで。

「・・・違う！」

『シーリン！？』

「マリナは退魔の王女ではない。普通の女性よ。絶対違うわ」

私は叫んだ。理由はわからないけど、マリナの話聞いていたら腹が立ってきたのだ。

『シーリン・・・ありがとう』

マリナは笑顔で私に言ったわ。でもやせ我慢しているのは私にはわかった。

「マリナ、彼を、刹那を探しに行きましょう！」

『え？』

「刹那の首に縄を付けてでも私が連れてくるわ。そして、すぐに結婚式をあげるの！」

『ま、まっつて頂戴。シーリン!』

「マリナが彼と結婚して、彼を国王にする。そうすれば、マリナが全てを背負い込まなくてもいいじゃない!」

あの時を思い返すとマリナに向かって私もメチャクチャな事を言っていたわ。

刹那、あなたの場所も行き方も知らないのに、あの時は本当混乱していたのね。

『駄目なの、駄目なのよ!』

マリナは目に涙をためて私に訴えたわ。

『退魔の王女に選ばれる条件は昔は姉妹だったの』

「どうということ?あ、まさか!」

『・・・選ばれた女性は結婚してはいけないの。結婚すると次の代に不幸が訪れるという呪いがあると言われてるの』

「だから血を遺すために姉妹が条件だった・・・でもマリナは一人娘!」

『そう、私が刹那と結婚して子供をもうけた場合、その子供の代に不幸が訪れてしまうの。だから私は誰とも結婚できないの!』

「!そんなの迷信よ。そんな事があり得るわけない」

だが、果たしてそうだろうか。現に悪魔が現れマリナの先祖や私達

を狙い、そして正体不明のモビルスーツが悪魔を撃退しているこの状況では、私は自分の言葉に自信がなかった。国の災いとは国難や経済危機だけではなく、本当の悪魔の襲来も含まれているのではないかと私は思い始めていた。

『迷信なら、どんなに良かったことか』

マリナは涙を流しながら顔を横に振る。私はハツとした。

「……どうして、どうして！こんな大事なことをマリナは私に黙っていたの！私達、親友ではなかったの！」

『ごめんなさい。我が王家の問題にシーリンを巻き込みたくはなかった』

マリナは、そう言う顔をしてしまった。

「……マリナ、もしかして、この前の病院の出来事も！？」

『ごめんなさい。はっきりは覚えていないけど、私の中の「彼女」が出てきて「巨人」を呼び出すように囁いたの』

やはり、マリナがああ白いモビルスーツを呼び出していたのだ。

「マリナは、いつから、その『彼女』について知ったの」

『刹那がELSと対話するために地球を旅立ってすぐ、夢の中に彼女が出てきたの』

5年前から彼女、エクシア王女はマリナの中に現れるようになって

ていたの。

「まさか、俺が関係しているのか！？だとしたら、俺は・・・」

「ううん、刹那は気にしないで良いの」

マリナは私にこう言ったわ。

『シーリン、刹那にはこの事は絶対に話さないで。彼に話をしたら彼はきつと悪魔と戦うでしょう。彼だけは我が王家の呪いに巻き込またくはないの！』

マリナは幼い頃から戦いに明け暮れていた刹那をこれ以上苦しい戦いに巻き込またくはなかった。

「私はエクスシア王女を恨むわ。マリナに、こんな辛い運命を背負わせるなんて！」

その時だったわ。私もマリナも屋上の異変に気がついていなかった。いや、エクスシアは気がついていたらかもしれない。

「・・・では、その運命をここで終わらせてくれようぞ・・・」

『シーリン！』

ガシッ！

私は突然、首をつかまれ体が宙に浮いていた。

「・・・グッ、マ、マリ、ナ・・・」

『サタン！』

私は背後から突然現れた悪魔に首を掴まれ宙づりにされていたわ。大きさは3m近くあったと思う。悪魔は病院の屋上で私達に殺すために待ち伏せしていたの。

「やはり、貴様の力はまだ完全ではないようだな。この女の首を引き千切り、腸を掻き出すぐらいの力は出せるわ！」

私はその時に見たの。悪魔の体が徐々に溶け始めていたの。悪魔がマリナに近づくと段々と体が溶けていつていたわ。

『やめて！彼女は関係ないわ。彼女を離しなさい！』

「我が体が溶け落ちるのが前に、この女の首を千切ってくれるわ！」

悪魔はそういうと更に私の首を掴む腕に力を入れた。私は死を覚悟した。

でも、意識を失う瞬間、私は屋上の地面に落ちたの。悪魔の腕が切断されていた。固い地面にぶつかる寸前、誰かに抱きかかえられていたわ。

「ゲホッ！ゲホッ！」

私が喉を押さえていると

「大丈夫ですか？この場から離れます」

とても華奢な女性が私を軽々と抱きかかえて悪魔の元から助けて出してくれたの。

『・・・皇帝陛下、遅かったですわ』

気がついたらマリナの前に背のとても高い男性が剣を構えて立っていた。2mを超す長身だったわ。私には分かった。彼が悪魔の腕を切断してくれたことを。そして、この時、先日私とマリナを助けてくれたモビルスーツのパイロットではないかと直感した。

「・・・また、貴様か！どこまで我々の邪魔をすれば気が済むのだ！」

「言わなかったか？あの晩から彼女の主治医になったのさ」

私が瞬きをしたら、男は剣を振り下ろしていたわ。彼が何をしたのか、私にはわからなかった。でも、悪魔は頭から真つ二つにされていたわ。そして悪魔は灰になって消えていった。

『皇帝でも遅刻は遅刻です。今までどこに行っていらしたんですか？あと少しで彼女が危なかったわ』

マリナは男性に話しかけていたわ。男性を以前から知っている感じだった。いや、あの時はマリナではなかった。

「装甲を焼失したおかげで始末書の山さ」

『あら、それはお気の毒』

「まったく、誰のせいだと思っているんだ！」

『それは私のせいではございませんわ。それに私との契約をお忘れですか？』

「ふん、覚えているわ！この腐れ巫女め」

私には悪魔と遭遇した時よりも目を疑う光景だった。マリナの両目は輝いていた。刹那、貴方のように両目が虹色に輝いていたわ。

「シーリン大丈夫？怪我はないかしら」

マリナが手をさしのべてきたわ。だが私はその手を断った。

「私に馴れ馴れしく触らないで！」

『シーリン……』

マリナは悲しそうな顔をしたわ。でも、マリナではない事は私にはわかっていた。

「貴女……エクシアね？」

『そう、私がエクシア』

「それも王女ではなく、巫女の方の」

『……その通り。流石ね、シーリン・バフティヤール』

彼女はマリナの体を借りたエクスシアだった。私はハンドバッグから短銃を取り出してマリナに向けたわ。

でも、長身の男性と先ほど私を助けてくれた女性は何もしなかった。彼が剣を振るえば私なんて簡単に斬り殺せたのに。

「マリナを返して頂戴。その体はマリナのものよ。貴女が自由に使うって良いものではないわ」

『ごめんなさい。貴女を助けるにはこうするしかなかったの』

「マリナに、いいえ、マリナだけではないわ。王家の女性に辛い運命を背負わせておきながら、都合の良いことを！」

『王家の迷信と私は無関係、と言っても信じてもらえそうにないわね』

「現にこうして悪魔が襲ってきたじゃない。信じられるわけないわ」

『本当にサタンが襲ってきたのは、マリナの先祖であるエクスシア王女とマリナの時だけよ』

「！そ、そんな話」

「彼女の話は本当だ」

長身の男性が割り込んできた。

「俺は昔、この女と酷い契約を結ばされて、サタンが襲って来た時だけ、こうして呼び出されて撃退している。エクスシア王女の代に

召喚されているが他の代にはない。そもそも、こんな人使いの荒い巫女と契約するのは俺だけで十分だ」

『陛下、人使いが荒いなんて酷い』

「ふざけないで！私は真面目な話をしているの！」

エクスシアに向けていた短銃を男性に向けた。

「気を悪くされたのであればマスターに代わって私が謝ります。ですが、エクスシアさんとマスターの話は本当です」

私を助けてくれた女性が今度は話しかけてきた。カラーコンタクトをしているのか、彼女の瞳が見えなかった。まるで宇宙人のように綺麗だったわ。

「それでは、どうしてマリナは悪魔に狙われるの！マリナが何をしたってというのよ！」

女性とエクスシアの表情が強張る。

「それは……」

『それは、マリナが私の後継者だからよ。だからサタン共はマリナが力を付ける前に殺しに来るの。今回はマリナが倒れたときに一時的に力を失いかけた。その際にサタン達は殺しに来たの』

「嘘よ。マリナは普通の女性よ」

『……残念ながらマリナは普通の女性ではないわ。彼女はサタン

達を退ける役目を果たす運命にあるの』

「たとえば、それが運命だとしてもマリナは戦わないわ！私が絶対に戦わせない！」

『ええ、マリナが戦う必要はないわ。マリナが幸せに地球で暮らしてくれれば、サタン達はこの世界に来られないから』

「え？」

『私達巫女は、お伽噺に出てくるような魔女のように杖から光線を発射したり、鎌を振り回したりして、直接サタンと戦うような事はないの。ただ、そこに居るだけで、その世界に居るだけでサタン共を寄せ付けないの』

耳を疑った。ただ、そこに居るだけって？だが同時に疑問が浮かんだの。

「それでは、エクシア王女とマリナが生まれる間にサタン達が地球に来ればいいじゃない！」

「サタン達にとって地球侵攻は二の次だ。それよりもエクシアとマリナの魂が邪魔なのさ」

再び長身の男性が話しに割り込んでくる。

「退魔の巫女は、その世界に居るだけでサタン達には驚異だ。巫女が普通に死んだ場合、魂は輪廻転生を繰り返して再び世に出現する。だからサタン達は輪廻転生を阻止するべく、巫女が死ぬ直前や力が弱まったところを狙って殺しに来る」

『手段は選ばない連中よ。呪い殺そうとする時もあるし、科学力を駆使して攻撃してくることもあるわ』

私はマリナの様態が悪化したときのことを思い出した。まさか、あれは悪魔の呪いだっていうの？でも、私は彼らの話から希望の光を見つけた。

「それでは、マリナが普通に暮らしていれば悪魔は来ないのね!？」

『勿論、そうなるわね』

「それでは、マリナは彼と、いえ、普通の女性として幸せを掴むことが出来るのね!？」

『・・・それは』

「違っつて言うの!？さつき、貴女は『王家の迷信と私は無関係』と言っただじゃない!」

『確かに王家の迷信とサタンは無関係よ。だけど、巫女は男性と契りを結ぶと力を失う可能性があるの』

エクスシアの顔が曇る。

「エクスシアのような巫女は、力を失った場合、次の輪廻転生まではサタン達を退けることが出来ない」

長身の男性が私に説明する。

「まさか貴女も？」

エクシアが静かにうなづく。

「それでは、マリナの先祖エクシア王女はどうやって子孫を残したの!？」

『結局、彼女も結婚しなかったわ。彼女の妹が血を残したの』

その一言で見いだした希望の光は失いかけたわ。

「それでは、それではマリナは、幸せになれないじゃない!!」

『……』

私はエクシアを問い詰めた。今思い出すと彼女も気の毒だったのよ。巫女として選ばれて好きな男性と結ばれることなく独りで死んでいったんですもの。彼女も気がついたら泣いていたわ。

「……方法はある」

『皇帝陛下!しかし』

長身の男が私に向かって言ったわ。

「巫女の力を失う恐れがあるのなら俺のような超強力な騎士と契約するか、それとも……」

『以上が2319年の出来事よ』

刹那はシーリンから全ての話を聞き終えた。刹那の話も荒唐無稽だったが、シーリンの話はそれ以上に荒唐無稽だった。ELSが地球に襲来してから5年が経過した出来事だったが、イオリアの生前よりも以前から悪魔が地球に襲来していたのだ。もし、イオリアが悪魔の存在を知っていたらソレスタルビーイングの在り方も『対話』も変わっていたかもしれない。

「・・・マリナはエクシアの話をごだけ知っていたんだ？」

『エクシアはマリナには、それほど多くの情報は伝えていなかったそうよ。契約を交わした騎士の存在や男性と契りを結ぶと巫女之力を失うこと等、これ以上マリナを苦しませたくなかったみたい。マリナ自身も王女と巫女、二人の話が混ざっていたと思うわ』

だが、マリナは王家の迷信に従い結婚することはなかった。それは勿論、アザデイスタン復興のため、そして50年間も地球を留守にしていた誰かのせいでもあるが。そして、シーリンの話では、それ以降エクシアがマリナの人格と入れ替わることがなかったそうだ。長身の男とシーリンを助けた女性はその後姿を消した。彼らはマリナが悪魔達に狙われて危機に陥ったときだけ、別世界から召還される契約だった。

シーリンは刹那に複雑な表情を向けると刹那の手を取る。

『刹那・F・セイエイ、マリナは貴方を悪魔達との戦いに巻き込みたくない。と、いつも言っていたわ』

「それがマリナの願いだったのはわかっている。俺はマリナも貴女

も責めるような事はしない」

『でも、私はマリナの願いを無にする事を言わないといけないの』
刹那の手には数滴のシーリンの涙が落ちていた。

『刹那、マリナを救い出して。そしてマリナを幸せにしてあげて！』
気がつくときシーリンは刹那の胸の中で泣いていた。それは親友を救うために親友の願いを裏切る自分の行為からくるのか、それとも親友の愛する人を死地に向かわせる自分への嫌悪感なのか、それとも両方なのか、それ以外なのか、シーリンにもわからなかった。そんなシーリンを刹那は優しく受け止めた。

刹那はシーリンをオースチンで駅まで送り届けに来ていた。
刹那はホームでシーリンを見送る。

「シーリン・バフティヤール、今日は貴重な時間をありがとう」

『それは、私の台詞。礼を言うのは私の方。貴方から生きる希望を貰えたんだから』

生きる希望、それは今の刹那にはかけがえのない言葉だった。

「なるべく期待に添えるように頑張ろう」

『出来れば私が天国に行く前をお願いしたいわね』

「・・・難しいかもな」

『冗談よ。ミッションが難しいのはわかっているわ。もし、私が神様の元に召されていたら三人でお墓参りに来て欲しいわ』

「縁起でもないことを言わないでくれ。マリナが悲しむ」

『クス、それでは急いで頂戴』

「わかった」

刹那はシーリンを優しく長く抱きしめた。二人とも口には出さないが、これが最後かもしれないと思っていたからだ。

『マリナによろしく伝えてね』

「それは自分の口から伝えて欲しい」

シーリンが刹那の体から離れると列車に乗り込んでいった。シーリンは列車の窓からホームで見送る刹那に手を振る。そして、いよいよ発車ベルは鳴り列車は動き出した。刹那は列車が見えなくなるまでホームで見送っていたのだった。

ログナーの社長室。

「マスター、契約は更新されるのですか？」

『異議申し立てがない場合は自動継続だったな』

「それでは異議申し立てなれさますか？」

『する相手がジョーカーに行ってしまったわい』

「（クス、する気もない癖に）それでは更新ですね」

第8話 退魔の巫女（後書き）

次回予告

ついに刹那はラキシスと遭遇する。

そして刹那とログナーの騎士戦とは？

後書き

前回以上に内容がアレな第8話をお送りできました。

文字数も2万文字オーバーと過去最長。それでも、エクシア王女のエピソードは大幅カットしました。

第8話はこれからの物語の壮絶なネタバレ回だったと思います。

エクシア王女と巫女、ワンセットでオリジナルキャラクターを登場させて貰いました。エクシア王女と巫女のビジュアルは、ガンダム00の1stシーズンの白いドレスの女性です。マリナのご先祖様という設定ですから、こちらを採用しました。というか、他にイメージ出来ません。

あと、巫女さんの方はログナーを司令ではなく皇帝陛下と言っています。つまり、カラミティ・ゴードー星団皇帝を指すのですが、どうやって契約させたんでしょうね。巫女さんの呼び出しで毎回トんでもないタイミングで次元を超えて地球にやって来ていると思うと少々気の毒です。ログナーの密偵であるエレーナ女史の子孫も今回出ていましたが、バビロン王国領事館が地球にあるのかもしれないね。

さて、ストライクルが登場していますが、今のクリス御大の頭の中では『無かったことに』されているようですね！？バビロンズは『雷丸』がその地位を奪ったとか？でも、私はストライクルはストライクル、雷丸は雷丸で別物と考えて登場させました。というか第8

話でストライクルとはいえ、L・E・D・ミラージユを登場させることになるとは自分でも予想外でした。実剣だから良かったものの、これがインフェルノナパーム搭載だったら東京の町は炎に包まれていたことでしょう。

最後に、今回せつさんとスメラギさんがR15ギリギリな事を言っています。

SSなんだから、もっと気楽にせつさんとマリナで赤ちゃん出来ても良いのかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5039y/>

機動戦士ガンダム00 - おとぎの世界へ -

2011年12月25日02時49分発行